うさぎさんの楽しい毎日

人間狂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うさぎさんの楽しい毎日

【Ｎコード】
Ｎ４９６３Ｘ

【作者名】
人間狂愛

【あらすじ】
基本的に自己中心的な主人公がルイズ達原作キャラを振り回して、たまに仕返しされたりな日常のお話です。えっちな感じが苦手な方にはオススメできません。

第零話　からかいやすいお兄様

ゼロの使い魔の世界にキターでございますよ。オリ主、マジ☆参上ですね。

別れた女性に滅多刺しにされて、死んだらゼロの使い魔に出てくるトリステインという国の伯爵家の次男に、何故か何故か生まれ変わっていた。二つの意味で意味がわからん。

何故、フッただけであんなに包丁でグチャグチャにされなければならないのだろう。何故、生前善い行いをした記憶もないのに転生したのだろう。

まぁ、この際どうでもいい。無神論者だから神様とか、あの世とか、転生とか、微塵も信じていなかったのだが、とりあえずせっかくの二度目の人生なのだから、おもいっきり楽しもうと思っている。

前世十六年と今世五年、合わせて二十一歳になると、人間落ち着くものだ。有り得ない現実も簡単に受け止めちゃえるものです。

――楽勝だ、異世界生活。

「ねぇ、お兄様聞いてる？　女の子はマジで怖いよ？　女タラシのお兄様は気をつけてね？」

「タラシじゃねぇよ。お前は何処でそんな言葉覚えてくるんだよ。てゆーか、それよりももっと子供らしく甘えてこいよ。まだ五歳だろ？　弟ができるって聞いて喜んでた俺に謝れよ」

イケメンの父親と美人の母親との間に生まれたイケメンお兄様は、五歳年下の僕を見て溜息を吐く。

現在、新しい家族の（こう言うと再婚したみたいだね）兄と仲良く談笑中。家族仲は極めて良好だ。

「なるほど。お兄様は男もイケるのですね？　お母様似の僕に欲情しちゃってるんですね？　きゃーたすけてー」

「違ぇよ。なんでお前はそういう風に話を捩曲げんの？　まだ五歳なのに反抗期なの？　いや、確かにお前は可愛いぞ。白うさぎみたいで、我が家のお姫様だ。でも俺は男には興味ないからな？」

僕の半分冗談でのからかいにも、兄は律儀に反応をしてくれる。家から出る事を許されていない僕に、兄は毎日のように付き合ってくれる。

やはりショタコンなのだろうか。いや、僕の見た目はロリだから、ロリコンかもしれない。まぁ、どうでもいいけど。

「そろそろ家族紹介でもしようか」

「えっ、いきなりどうした？」

僕は立ち上がりながらゆっくりと語り始める。その様子を見て、兄は不思議そうに首を傾げていた。

「この必死過ぎて気持ち悪い金髪碧眼のイケメンが僕の兄、クイント。年齢は十歳で風のトライアングル。よく暇な時は相手をしてくれるヘタレだ」

「だからいきなりどうしたんだ？　てゆーか気持ち悪いとか、ヘタレとか――」

「父親の名前はアルベルト。兄を大きくしたような容姿で、性格も兄そっくりのヘタレだが、風のスクウェアで魔法衛士隊隊長を務めている。家族大好きで親バカ＆愛妻家だ」

「――なんで無視？　えっ、なんなんだいったい？」

兄の言葉は聞き流しながら、ゆっくりと丁寧に言葉を紡いでいく。観客を前に舞台で演じるように、遠くまで響くように声高々に、身振り手振りを加えながら、笑みを絶やさず語り続けていく。

「母親はシルビア。僕と同じアルビノな見た目だが紫外線が効果抜群なんて事はなく普通だ。性格は基本的にのんびり屋さんだが、実力は水のトライアングル。娘が欲しかったらしく、自分に似た僕を娘のように育てている。たぶんドＳ」

追記として、名前的に傍に感じる度幸せになれそうな気がする。

「アリアちゃーん？」

そんな僕の様子に兄は更に困惑する。誰かいるのかと豪華な部屋の中をキョロキョロ見回したり、僕の頭をポンポンと叩いてみたりするが、僕は気にせず語り続けていく。

「そして最後に僕。名前はアリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。人をからかったりするのが趣味で、それが原因で悲惨な死を迎え、この家の次男に転生した。とりあえず二度目の人生は深

く考えず、面白おかしく過ごせればいいと思っている」

「父上ーっ！　母上ーっ！　アリアが突然妙な行動を――」

ちなみに転生したという話は、既に家族にしたのだが、父親と兄は「それで最初に喋った言葉が『あのクソアマァ』だったのか」と納得し、母親は「あら、ラッキーね。二回人生を体験できるなんてすごいわ」と羨ましがっていた。シリアスなんてなかったようです。それでも私達の息子よ、みたいな感動話のカケラもありませんでした。

「以上。そんな風にバカな家族に囲まれて楽しく過ごしています。アリアでしたー」

「だ、誰がいるんだっ！？」

にこやかに手を振り、家族紹介を終えると、兄が抱き着きながら叫び出した。そして僕の肩を揺らしながら何度も同じ問い掛けを繰り返す。

「何が見えてるんだ？　誰かいるのか？　なぁなぁなぁなぁ――」

揺らす兄と揺れる僕。正直ただの悪ふざけだったのだが、こういうリアクションはうざい。幽霊でもいると思って、怖がっているのだろうか。

「――いたっ！？」

「お兄様。欝陶しいです。離しやがってください」

お兄様は頬をおもいっきり叩くと、漸く身体を揺するのをやめた。僕は溜息を吐いて、そんなお兄様を蔑みながら睨み付ける。

「ご、ごめんアリア――ってこわっ！？　なにその眼こわい。見下すように虫けらを見るように俺を見るなっ！」

お兄様は僕の目が気に食わなかったのか、僕の目を手の平で慌てて覆い隠す。

弱虫、毛虫、羽虫以下のお兄様には、まだマゾ属性は芽生えてないようです。弟としては安心ですが、兄にそっくりなお父様は、こうやって睨んでも喜ぶので、目覚めるのも時間次第ですね。可哀相なお兄様。

「なんで今度は哀れむような目で俺を見るんだ？」

お兄様は手をそっと離し、ゆっくりと覗き込むと、今度は同情する瞳に変わっていたので首を傾げる。

「世の中には知らなくていい事があるのですよ。今回の事はそれです」

「そ、そうか？」

「ですです」

よくわかっていない馬鹿なお兄様をごまかすように僕は笑う。自分の将来を嘆くには、まだまだお兄様は若すぎるのですよ。

「まぁ、いっか」

お兄様は笑う。自分の未来像を弟が勝手に想像して哀れんでいるとは知らず、満面の笑みで笑う。

僕はそれを見て、ひそかに涙を零した。

第一話　初体験はサディスティックに

この前から子作りに励むように頑張っていた杖との契約が、漸く完了した。そういう事で早速だが、今日から魔法の練習を始めるらしい。

今日からマのつく職業ですね、と柄にもなくはしゃいでしまうのは仕方がない。魔法なんて前世では空想の中にしか存在していなかったのだから。

厨二病患者が何度も夢見る魔法。僕も子供の頃は魔法を使って悪戯したいなんて可愛いことを考えていたものだ。

この日の為に、知識だけは頭に入れてある。さぁ、魔法使いアリア様の誕生でございますよー。

「――という訳で、私が家庭教師を務めるカーミラです。よろしくお願いします。何か質問はありますか？」

二十代後半辺りの真面目そうな女性が僕を見つめながら微笑む。

吸血鬼のような名前の彼女は母親の知り合いで、兄の家庭教師でもあるらしい。実力は風のトライアングルで、兄曰く、教え方も上手いらしい。

「よろしくお願いします。お兄様の童貞は美味しかったですか？」

「ぶふぅ――えっ、えっ？　いや、私はそんなことしてませんっ！」

質問と聞かれ、パッと思い付いた事を尋ねてみると、吸血鬼さんは真っ赤な顔で否定した。

今日も僕はいつも通り。誰が相手でも自分のやりたいようにすると、母親の胎内にいた頃から決めている。

しかし、からかいがいがありそうな先生ですね。

「あのヘタレ短小包茎早漏童貞野郎にまだ手を出してなかったのですか？　押しに弱いので簡単に――」

「こ、子供がそういう話をするものじゃありませんっ！　それに私はそういう趣味はありませんっ！」

僕が溜息混じりに言葉を紡ぐと、吸血鬼さんは更に真っ赤になる。

いい歳して結婚せずに家庭教師なんてやってるんだから、生徒狙いのショタコンなのかと思ったら、どうやら違うみたいだ。ただのいきおくれか。

ちょっと誘惑するだけで、次期伯爵夫人は間違いないのに勿体ない。

「こほんっ。とにかくまずは座学から――」

「なるほど、これがフライですか。便利ですね、魔法って」

「――って、飛んでるしっ！？」

吸血鬼さんが仕切り直して授業を始める前に、僕は我慢出来ずに

魔法を使ってみる。暇だったから屋敷にある書物を制覇した僕に今更、座学なんて必要ありません。

「なにこの子、……クイント君と全く違う」

全く制御出来ない僕を呆れ顔で見つめる吸血鬼さん。僕を自由に動かすなんて、王様でも無理ですよー。

「ほっ、着地成功！」

魔法を解除して地上に降り立つ。そして両手を広げてポーズを決めると、吸血鬼さんは溜息を吐いた。なにやら疲れたご様子だ。

「こほんっ」

さて、初体験の結果（卑猥な意味ではない）から思考を深めると、どうやら僕はちょっとやそっとでは、精神力切れで魔法が使えなくなる、なんて事はなさそうだ。

「こほんっ」

スクウェア並に身体の中に溜まっている（卑猥な意味ではない）だろう。前世持ちはチートだのう。

「ごほっ、あー、あー」

そんな風に考え込んでいると、咳ばらいがうるさく感じたので、ちらりと吸血鬼さんを見る。何か用があるのだろうか。

ああ、そういうことか。

「褒めてくれてもいいですよ？　頭を撫でるのを許可します」

頭を差し出しながら微笑むと、吸血鬼さんは苦笑いをする。どうやら違ったみたいだ。

吸血鬼さんが困っているのを見て僕は勘違いに気付いた。

しかし、そんな僕の心情を知らない吸血鬼さんは苦笑を浮かべながら何故か僕に近付いてくる。
まさか頭を撫でる気なのだろうか。

「あー、うん。すごいすごい」

僕の目の前で立ち止まり、棒読みで褒めながら頭を撫でる吸血鬼さん。うん、欝陶しい。

「触んなです、雌豚」

僕は吸血鬼さんの手を振り払い、唾を吐き付ける。変態にはご褒美だが、吸血鬼さんにはご褒美ではなかった為、彼女は泣き出してしまった。

「もぉー、なんなのよぉ。こんなの聞いてないわよ、うわーん――」

情けない大人だ。僕は蔑んだ眼差しで彼女を見つめる。

「ぶーぶーうるさいですよ、雌豚。この程度で泣くなんて子供ですか。さっさと授業の続きをしてください。さもないと叩きますよ？」

「ううっ、ぐすっ――」

僕の言葉を聞いても泣き止まない雌豚。芝生の地面に座り込んで、子供のように泣きじゃくっている。

なんという豆腐メンタル。

「ほら、雌豚。さっさと立ち上がれです」

「いたっ、ううっ――」

横っ面を引っ叩いても彼女は動かない。僕はその様子に苛立って、髪の毛を掴んで無理矢理立たせる。

「ぺっ！」

そして顔面にまた唾を吐き付けると、彼女は更に大声で泣き叫んだ。

「うわーん、もうやだよぉ――」

僕はそのうるささに耐え切れず、髪を掴んで地面に叩き付けた。

「お、お嬢様ーっ！？　ご無事で――えっ！？」

そんな騒ぎを聞き付けてか、使用人の一人が授業をしていた庭へと大急ぎでやってくる。どうやら僕が泣いていると思ったらしく、泣き叫ぶ家庭教師を見て唖然とする。

「いったい何があったのですか？」

使用人は恐る恐る僕に尋ねる。ちなみにこの瞬間も雌豚は泣き叫んでいる。

「かくかくしかじか」

「しかくいむーぶ、でございますね？」

事情を説明すると、使用人は地面にはいつくばる雌豚を哀れんだ瞳で見つめる。先程の取り乱していた様子はなく、今は完全に落ち着いている。

「最近の若い者は根性が足りねぇですね」

「肯定です。お嬢様が言う台詞ではありませんが」

「メイドさんも最近の若い者に余裕で入るけどね」

「失礼しました」

「ううっ、ぐすっ、ひぐっ……、ぐすんっ――」

地に這う雌豚を放置して、使用人と談笑をする。この使用人さんはなんだか気が合いそうな気がする。

「そういえばお嬢様って男に対しての呼び方じゃないよね？」

「肯定です。ですが、奥様から呼び方が義務付けられていて、破れば解雇されてしまいます。それに違和感はないのでよろしいかと」

「女装趣味の変態野郎ではないからね？」

「わかっております」

僕の素朴な疑問に即座に答える使用人。五年間不思議に思っていた謎が漸く解明された。

「あ、それと――」

「なにこの地獄絵図……」

ここでお兄様登場。草花に囲まれた緑豊かな空間で、笑い合う僕と使用人、泣き叫ぶ雌豚を見て言葉を漏らす。

「何やってんだよっ！？　えっ、そこのお前（使用人）もこの状況を不思議に思わないの？」

僕と使用人に尋ねるが僕らはただ笑顔を浮かべるだけだ。

「こわっ！？　なんなのお前ら？　と、とりあえず大丈夫ですか、カーミラさん？」

お兄様は僕等の反応を見て若干引きながら後ずさる。しかし、地面に這う雌豚をほって置けず、彼女に近付いて身体を支えながら立ち上がらせようとする。

「きゃー、お兄様が女性を泣かせてるですぅー」

「い、いけませんよ、坊ちゃま。女性には優しくと――」

「おいいいいいい！？」

僕達はそんなお兄様を見て、事前に計画していたかのように、大きな声を出して騒ぎ出す。

「どうなさいました？」

「如何なされました？」

「坊ちゃまが何でしょうか？」

メイドA、メイドB、メイドCが現れた。

「い、いや、これは違っ――」

お兄様は必死に言い訳しようとする。

しかし、効果は今一つだ。

「坊ちゃま……」

メイド達の冷たい眼差し。

効果は抜群だ。

「なんで俺がこんな目に――」

こうして魔法体験初日は比較的平和に終わった。

第二話　赤い敗北

部屋中、桃色で埋め尽くされたファンシーな空間。この無駄に可愛い部屋が僕の部屋だ。

今、中には僕と、お兄様と、あの日仲良くなった使用人がいる。ちなみに、名前はフランシアというそうだ。

あの雌豚はその日の内に家庭教師を辞めてしまった。そしてその件が兄ではなく僕のせいだとバレて、食事やトイレなど以外自室で謹慎の上、２４時間使用人に監視されている。

一応、僕もやり過ぎような、そうでないようなって感じで反省はしている。後悔はしていない。初日はもう少しソフトにやるべきだった。気分に任せて突き進んでしまうとは、僕もまだまだ子供のようだ。

「なんなのお前？　カーミラさんの何が気に食わなかったの？　何か恨みでもあったの？　あと俺にも」

現在お兄様による説教中。あの雌豚が好きだったのか、珍しく噛み付いてきている。

さっさとキメておかないから後で後悔するんですよ。まぁ、前に後悔しておくなんて出来ないですけどね。

「僕は気に入ってたですよ？　お兄様並に面白い玩具でしたし。あと、恨みはお兄様共々ありません」

僕はベッド（これも桃色）の上で転がりながら返事をする。良い教師か悪い教師か尋ねられると、何も教えてもらっていないし困るが、彼女はユニークだった。

「……実の兄を玩具扱いかよ」

僕の言葉にうなだれるお兄様。その様子を見て、僕は笑顔になる。

「あれですね。お兄様を虐めていると濡れます」

「おい、やめろっ！　子供が言う言葉じゃねぇよ。てゆーかアブノーマルだし、それにお前の性別じゃ濡れねぇよ！」

僕の突然の発言に、お兄様は赤面しながら否定的な意見を述べる。前世の話をしているのに家族全員子供扱いはひどいと思う僕です。

「あらら、耳年増ですねお兄様。おませさんですねお兄様。メイドで筆下ろしでもしました？」

「してねぇよ！！」

お兄様は耳まで赤く染めながら怒鳴る。

豊富な知識を褒めたつもりですが、お兄様は不満なようです。もしくは軽々しく童貞を捨てる発言がダメだったのでしょうか。『童貞も守れないヤツに女は守れねぇ』って言っていた気もするですし。

「ごめんなさい、お兄様」

僕はベッドの上に座って深く頭を下げる。すると、お兄様が嬉し

そうに微笑んだ。

「漸くわかっ――」

「お兄様は童貞です。生涯守り通せるはずです」

「――お前、兄を嘗めているだろう？」

僕の言葉にガックリと凹み、それからお兄様は笑顔で怒り出した。

「舐めてほしいのですか？」

「違うっ！」

首を傾げながら尋ねると、お兄様は即座に否定する。

「ああ、もうやってらんない」

お兄様はそう言うと素早く立ち上がる。

「どうしました？　お暇ですか？　それならジャンケンで負けたお兄様が一枚ずつ脱いでいくゲームでもしませんか」

「脱ぐの俺だけじゃねぇか！」

「僕に脱いでほしいのですか？　僕を脱がせたいのですか？　もしくはフランシアを脱がせたいのですか？」

僕が問い掛けていくと、お兄様はせっかく正常な色に戻っていた顔を、どんどんと赤くしていく。

「そんな訳ないだろうがっ！」

そして静かに否定の言葉を告げる。

「もういい。俺はもう付き合ってられん」

お兄様はそう言いながら扉の方へ歩いていく。そして扉を開いて、こちらを見る。

「じゃあな、一人で遊んでろ」

――バタンッ。

大きな音を立てて扉が閉まる。捨て台詞と共にお兄様は逃げるように部屋を去っていってしまった。

「僕と話をしていてムラムラしてしまって、童貞を捨てに行ったのでしょうか」

「お嬢様。それはないかと」

僕が独り言を呟くと、先程まで黙って無言で待機していた使用人が即座に否定する。

十歳だと精通すらきていないか。それに巨大化もしないだろうし。

僕は使用人の言葉に頷く。

しかし、それだと理由がわからない。

「女性がいるのに猥談されて恥ずかしい的な？」

「否定です」

「からかわれるのが嫌になった？」

「それも否定です」

えっ、それはいいのか。

「意味がわからないお兄様ですのぉ」

僕の疑問に無表情で否と答える使用人。この様子だと彼女はお兄様について何か知っているらしい。

僕は頭を抱える。二十一年の経験を持つ僕にもわからないとは、思春期の少年は難しい。

「坊ちゃまはお嬢様を心配しているのですよ。何年かすればお嬢様も魔法学院へ通いますし、そこでも同じ行動をとってしまうのではと。友達ができないのではないかと」

僕が悩んでいると使用人は案外簡単に理由を教えてくれた。そうか、そういうことか。

「それで茶化しながら相手をする僕に腹を立てたと？」

「肯定です」

使用人は満足そうに頷く。まさかお兄様がそんな心配をしていたとは知らなかった。ブラコンですか。

しかし友達の心配をされるのは心外だ。前世では愉快な仲間達に囲まれて楽しく過ごしていたのに。

まぁ、心配してくれるのは嬉しいですけどね。

「子供の気持ちを理解するのは難しいですねぇ」

「肯定です。お嬢様が言う台詞ではありませんけどね」

僕が笑いながら呟くと、使用人は無表情で頷いた。心配しているなら素直に言えばわかるのに、ツンデレは難しい。

「てゆーか一人で遊んでろって言ってたけどフランシアがいるよね」

僕は忘れられていた使用人に向かって微笑む。

「肯定です。お嬢様と遊ぶ気はありませんが」

「――えっ？」

すると、使用人は予想外の返事をしてきた。　僕が不思議そうに見つめると、使用人は首を傾げる。

「遊んでくれないの？」

「肯定です。私はお嬢様の玩具ではないので」

使用人の言葉にしょんぼりとする。なにこの生意気な使用人。

「なら、えっちぃことでもする？」

なんとかこの使用人を困らせたい僕は、兄をからかうように笑いながら言葉を紡ぐ。

「否定です。どうしてもと言うなら泣き叫んでも止めずにイかせ続けて差し上げますが」

しかし使用人は赤面一つせず、無表情のまま淡々と返事をしてきた。しかもめちゃくちゃ怖い返事を。

「……遠慮します」

――完敗。頭を下げて断りながら僕の頭の中にはその二文字が浮かんでいた。

「残念です。本音を言えば毎日お嬢様を犯したいと考え――」

「お母様助けてぇ！！！！」

僕は慌ててベッドから飛び出して部屋から出ようと走りながら叫ぶが、使用人はその行動を予想していたのか、僕の手を掴んでベッドにほうり込む。

そして僕の上に馬乗りになりながら、口を手で塞ぐ。

「――お部屋から出てはいけませんよ？」

舌舐めずりしながら告げられる台詞に、僕は涙目で何度も頷く。

「それとあまり騒がないように」

何度も何度も頷く。今世で最初のピンチに、僕は蛇に睨まれた蛙そのものだった。

「良い子ですね」

使用人は片手で僕の両手を抑え、もう片方の手で、僕の太股を摩る。僕はされるがままで、ビクビクと怯えるしかない。前世で経験があるのに、何故か怖くて動けない。

そして使用人の顔が僕の顔に近付いてくる。僕は怖くて目を閉じた。

一秒、二秒、三秒、四秒、五秒、六秒、七秒、……。どれくらい経っただろうか。暗闇の中で震えながら待つが、何も起こらない。

僕は恐る恐る瞳を開く。

「――冗談ですよ」

使用人の顔は目の前にあった。しかし、どんどん距離が開いていく。

「もしかして期待していましたか？　申し訳ありません、お嬢様」

僕の両手を離し、不出来なウインクをして、使用人はベッドから離れていく。

「――マセガキさんですね」

僕は真っ赤な顔で俯くしかなかった。

第三話　レッツパーリィー

――あの敗北から数日後。
突然だが、現在パーティー会場。ヴァリエールさん家のルイズちゃんが五歳になったから、誕生日パーティーやっちゃいますよ的な感じで、貴族の皆さんが集められた。僕達ルチアーノ家もそんな貴族達の仲間だ。

僕にとって初めての外出は知らない人の誕生日パーティーなようです。

「そんな感じですにゃー」

「あらあら、そうだったの」

そして、いきなり桃色の髪のお姉さんに捕獲されて、膝の上でお話し中。お姉さんはものすごいニコニコしてる。

「ウチのルイズのパーティーに来てくれてありがとうね」

「いえいえ。こちらこそ、ご招待ありがとうございます」

頭を撫でられながら首を振る。

なんだろう、この人といるとめちゃくちゃ和む。癒される。動物と仲良しな理由がわかった気がするよ、うん。

「あ、そういえば自己紹介がまだですね。アリアです。ルチアーノさん家の次男やってます。このドレスはお母様の趣味って、ああ、

喉は――」

「うふふ、私はヴァリエールさん家の次女のカトレアよ」

喉を撫でられ思わずうにゃうにゃとなってしまう。

――なんというテクニシャンっ！

「うにー、こるはしゅばらしい……」

「見た目はうさぎさんなのにねこさんみたいね」

彼女は笑顔のまま僕を撫で続ける。年頃の貴族の娘さんが男にこんな事をしていていいのだろうか。いくら此処が隅の方で目立たないといっても、ダメな気がする。いや、五歳程度で、しかもドレスを着ていて男に見えないから平気か。

「ええ、気にしなくていいわよ。貴方はおとなしく撫でられてなさい」

心が読まれてる。流石はヴァリエール家次女。読心術もお手のものか。

「何となくわかるだけよ」

僕は目を細めながらされれがままに、快楽に身を任せる。

――此処が楽園か。

「ああっ！　あんた、ちぃ姉様から離れなさいよっ！」

しかし、そんな心地良さは幼女の声で止まってしまう。どうやら桃色お姉さんが彼女の声に反応して、手を止めたようだ。

僕は声がした方を見る。

すると、本日の主役がそこにいた。

「あれがヴァリエールさん家のルイズちゃんですか」

「ええ、そうよ。可愛いでしょう？」

ぷんすかぴーと怒りながらこちらに歩み寄る幼女を見ながら、桃色お姉さんに尋ねてみると、どうやら正解だったようだ。

主人公に御対面キターでございますよー。

僕は幼女に微笑みながら話し掛ける。

「はじめまして、アリアです。気軽にアリア様と呼ぶ事を許可します」

「ルイズよ――って、いきなり様付けを勧めるなんてどういう事っ！？」

桃色お姉さんに飼い馴らされながら自己紹介をすると、幼女は良いツッコミをくれた。これは良い遊び相手になりそうな予感／Ｄｉｒｅｎ　ｇｒｅｙ。

「それよりもちぃ姉様から離れなさいよっ！」

幼女は僕の位置にご不満な様子で、僕の腕を引っ張りながら引き離そうとする。しかし、桃色お姉さんにがっちりと抱き締められているのでびくともしない。

ところで、今更だけど桃色お姉さんってなんかエロそうだよね。

「ちぃ姉様って呼ばれてるのですか？　僕はなんと呼べば？」

「ご主人様かしら？　うふふ」

「私を無視するなーっ！」

唸る幼女、首を傾げる僕、笑うお姉さん、怯える僕、怒る幼女。まさかのペットとして飼う気満々な桃色お姉さん（卑猥な意味ではない）に僕はビクッとする。

「離れなさいよーっ！」

「カトレアに言ってほしいです」

「ご主人様でしょ？」

「うがーっ！！」

幼女が唸る。ちぃ姉様好き好き大好き超愛してるなルイズにしてみれば、いきなり大好きな姉が盗られてしまったみたいで不満なのだろう。

「どうしたのですかルイズ。そんなに騒いでみっともない」

そんな騒ぎを聞き付けてか、招待された貴族達を掻き分けて、ルイズママ《伝説よりもチート》が現れた。桃色三色ビンゴですね。

「お、お母様。だってコイツが――」

僕を指差しながら幼女が俯く。桃色お姉さんも僕も微動だにしない。

「おや、もしやシルビアの娘ですか？　いや、あの娘には息子しかいなかったはずですが」

僕を見てチートが首を傾げる。確かにこんなドレスと母親そっくりの容姿ではわかりにくいだろう。

「息子です。母の趣味でドレス着てます」

「えっ！？」

僕の言葉に幼女が驚愕する。予め予想していたのか、チートは驚いていなかったが、何故か苦笑している。

「あの娘は変わりませんね」

溜息混じりにチートが呟く。

「お母様をご存知なのですか？」

「ええ、まぁ」

僕は気になって尋ねてみると、チートは肯定した。そして昔を思

い出してか、チートは微笑む。

ヴァリエールと、しかも伝説よりチートな存在と知り合いだったとは、全く聞いてなかったです。

「お母様。私、この子を飼いたいんですが――」

「ち、ちぃ姉様っ！？」

そんな僕達の会話を聞いて桃色お姉さんが突然爆弾発言をかます。

幼女はそれに驚愕。さっきから幼女は驚いてばかりだ。

「私、この子といると、何故か体調が良いんですの」

「コイツは人間ですよちぃ姉様っ！？　確かにうさぎみたいですけど」

漫才をするように会話をしていく二人を僕とチートは黙って見つめる。当事者の僕を置いて話がどんどん進んでいくが、僕は特に何も言わない。

だって、どうでもいいもの。流れに身を任せるのが僕です。

そして話を聞いてチートは何度か頷くと、何か思い出したのか突然二人の間に入り込む。

「ふむ、わかりました。とりあえず私はシルビアと話をしてきます。貴方達は此処で待っていなさい」

そして、そう言い残して去っていった。

「お母様っ！？」

そんなチートの言葉が信じられず、幼女は口をあんぐりと開けながら驚愕している。

気持ちはわかる。人間を、しかも貴族をペットにするのはどう考えても、いや、よく考えなくてもまずいだろう。

幼女は将来犬（種族人間の平民）を飼う事になるだろうけど。

「あ、あんたはなんで何も言わないのよっ！？」

依然として膝の上に乗ったまま、黙っている僕を見て、幼女が喚く。僕はそれを聞いて笑う。

「そりゃあ、現実的に次男坊とはいえ貴族の家の子供をペットにするなんて不可能だからです」

僕の言葉に幼女は納得し、喚くのをやめて落ち着く。現実的に考えて不可能です。

「ま、まぁ、そうよね。確かに有り得ないわ」

「ですです」

僕が肯定すると、幼女は安心したのか可愛らしく微笑む。そして最初の話題を思い出してか、僕の腕をおもいっきり引っ張り出す。

「てゆーかあんた、いいかげんにちぃ姉様から離れなさいよ」

「カトレアが離してくれにゃーのですよ」

僕達が話しているのを見ながら、あらあらうふふと頭を撫でる桃色お姉さん。こういうのも両手に花と言うのだろうか。

とりあえず手を引っ張るな、幼女。実際ものすごく痛いです。

しかし、まさか恋愛フラグではなく、ペットフラグが立つとは予想外だったです。いや、恋愛に興味はないですけど。

「ちぃ姉様ぁ！」

「うふふ」

「の、喉はらめぇ――」

喚く幼女、笑うお姉さん、悶える僕。

僕等はこんな感じでパーティーを過ごしたのだった。

第四話　ＫＹ（空気読みません）

朝の食事後、爆弾発言が飛び出した。

「……突然だが、来週からアリアはヴァリエール家で生活する事になった」

泣きながら喋るお父様。これが僕の父親で、この国の魔法衛士隊隊長です。

食事中から様子がおかしいと思っていたら、そういうことか。それにしてもどんな交渉をすれば息子をペットとして預ける事を、この家族大好き人間に認めさせたのやら。

「どういう事だよ、父上！？」

そんなお父様の言葉に当然、納得がいかないブラコンお兄様は、机を叩きながら立ち上がりお父様に問い掛ける。

「家庭教師はアリアが辞めさせちゃったし、次の家庭教師もどうせアリアの相手はできないだろうから、カリーヌさんに魔法教育をお願いしたのよ」

そんなお兄様の疑問にお母様が答える。僕はそれを聞いて納得した。

ペット兼弟子か。

「で、でも――」

「もう決まったことだ。男らしくアリアを見送る準備をしろ」

納得せずに抗議しようとするお兄様を止めるお父様。貴方めちゃくちゃ泣いてるじゃないですか。

流石はファミコン（ファミリーコンプレックス）。せっかく過保護に育ててきた息子が来週から魔窟入りですものね。

「使用人のフランシアを世話役として連れていけ。風邪には気をつけろよ？　寂しくなったらいつでも帰ってきていいからな？」

お父様が泣きながら話す言葉に一つだけ納得がいかず眉が吊り上がる。あの使用人には勝てる気がしないので、できればもっと扱いやすい使用人が良いのですか。まぁ、言っても無駄ですかね。

「私も一週間に一度はヴァリエール家にお邪魔するからね？」

しかし、僕の心情を気にすることなく、話しは進んでいく。

お母様は僕を膝に抱えながら笑う。怪物に娘のように愛する息子を送るっていうのにめちゃくちゃ笑顔ですね。ドＳですか。

「まぁ、なんとかなるですよね」

ぎゃーぎゃーうるさい男二人と、笑顔が黒いお母様を見て、僕は呟く。

目指せチート化。

☆

時間が経って来週がきた。
場所も変わってヴァリエール家。

「どうも。アリア・ド・ルチアーノです。攻撃力２３００守備力１５００で、必殺技はギャラクシービンタ。好きなラーメンはチャーシュー麺。好きな乳製品はいちごオレ。好きなケーキはいちごショート。将来の夢はブリタニアをぶっ潰すことです。どうぞよろしくお願いします」

「アリアお嬢様の世話役として来ました、使用人のフランシアです。お嬢様の事は深く考えないで相手してあげてください」

二人一緒に頭を下げる。ヴァリエール家一同に囲まれながら挨拶をしてみるが、カトレアさんがニコニコしているだけで、他の全員はみんなぽかーんとしていた。

「あー、おほん。よろしく頼む」

髭を生やした厳ついオッサンが咳ばらいをしながら言葉を絞り出すと、それに続いて全員自己紹介をしていく。

髭公爵、チート、眼鏡、アニコン（アニマルコンプレックス）、幼女、――ちぃ覚えた！

「ルイズ。アリア君に屋敷を案内してやりなさい」

「は、はいお父様」

髭公爵が告げると幼女は椅子から立ち上がり、僕の目の前に立つ。使用人が僕の後ろに立っているので、サンドイッチにされた気分だ。

「ほら、行くわよ。私が案内してあげるんだから感謝しなさ――」

「ギャラクシービンタァーッ！」

「――へぶっ！？」

何となく腹が立ったので、必殺技を発動してしまった。倒れる幼女を見て、幼女の家族は突然の事に唖然として、全く反応ができない。

「ほら、行くですよロリビッチ。案内させてやるから感謝しろです」

そして僕はそんな幼女を引きずりながら部屋から出ていく。それに使用人も続く。

部屋の中からは騒ぐ髭公爵と宥めるチートの声が聞こえているが気にせず、どんどんと廊下を進んでいく。

「は、離しなさいよっ！」

幼女は喚いている。

離しますか？

はい

→いいえ

「ちょ、引きずらないで、さっさと離しなさい、コラ、――ちょっとっ」

雑音をシャットアウトしながら先へ進み、使用人も黙って付いてくる。トリステイン一の演算力（自称）は伊達ではない。

「離しなさいってばっ！」

幼女が僕の腕を引っ掻く。ふむ、そろそろ離してやるか。

「あばっ！？　――何すんのよっ！？」

パッと手を離すと幼女は顔面を強打するが、彼女はそれを気にせず、すぐに立ち上がる。なかなか鍛えられているようだ。流石チートの娘。

「あんた、こんな事していいと思ってるの？　私は由緒正しきラ・ヴァリエール公爵家の三女よ？」

幼女が偉そうにない胸を張る。僕はそれを見て鼻で笑った。

「な、何がおかしいのよ？」

「幼女は別に偉くねぇですよ。女は家督を継げません。次期公爵は長女の婿となるでしょう。では幼女、貴女はどうなるのですか？　いずれ誰かに嫁ぐのですよね？　それだとヴァリエール家ではなくなりますよ？」

「肯定です。それに家柄の話をすれば、カリーヌ様は弱小貴族出身らしいですしね」

よくあるアンチ的な台詞を五歳の幼女に言ってみると、使用人もそれに続く。しかし、いくら頭が良くても子供には難しかったらしく、首を傾げている。

「と、とりあえず私の名前は幼女じゃなくてルイズよっ！　あとお母様を馬鹿にしたら許さないわよ！？」

睨み付けながら怒鳴る幼女。家族想いなのは良い事です。

「お嬢様もこれぐらい可愛げがあればよろしいのに」

幼女を見つめながら使用人が小さな声で呟く。合計二十一歳の大人に無茶言わないでください。

「さて、とりあえず案内してほしいのですが」

僕は仕切り直して、幼女に案内を求める。すると、幼女はまた無い胸を張り、威張りながら声を出す。

「いいわよ。着いてらっしゃい」

そして一人先にズンズンと進み出した。

「僕らも行くですよー」

「肯定です。公爵家の三女を一人にするのはあまり良くないかと思われ」

僕達も後を小走りで追う。幼女のペースは速いが歩幅は狭いので、すぐに追い付いた。
さぁ、子供らしく探検といこう。

☆

大きな庭、城のようなというか完璧に城な屋敷の中、寝室、食堂、トイレ、個人の部屋、使用人室、遊戯場、訓練場、一日で全て見回るのは無理と諦めるまでいろいろな場所を見て回った。
ルチアーノ家の何倍あるか知らないが、流石トリステイン一の貴族という感想を送ろう。豪華さも広大さも完敗だ。別に勝負してないけど。

「此処は私のお気に入りの場所よ！」

そして最後に原作でお馴染みの、小船が浮いている池に案内された。此処でサイトとルイズが乳繰り合っていたのか。

「これだけ案内すれば後は大丈夫でしょ」

そう言って幼女が芝生に寝転ぶ。僕も同じように寝転ぶことにした。使用人は流石に立ったままだ。

「まぁ、アレよ。これからは、な、なな仲良くしてやってもいいわ

よ？　一応今日からあんたも一緒に住むんだし」

夕日に照らされながら、その夕日が原因でない赤面をしながら、幼女は素直じゃない言葉を述べる。

それを聞いて僕は笑い、使用人はそんな僕達を嬉しそうに見つめていた。

「――だが断る」

「えっ！？」

しかし僕は笑顔で拒絶することにした。驚く幼女と、予想通りと言いたそうな表情の使用人。

「ここは『うん、よろしく』とか言って、夕日をバックに握手したりするところじゃないのっ！？」

「肯定です。空気を読んでください」

「ところがどっこい、ＫＹ（空気読まない）で有名なアリアさんは、気まぐれな気分屋です。思い通りにいかないのが僕という存在なの

ですよ」

溜息を吐く二人に、僕は満面の笑みで答えた。

第五話　女王様より女王様

とてつもなく広いヴァリエール家の敷地内には訓練場所もあるみたいで、今日から始まる僕の魔法訓練は、そこを使って行われるそうです。

目の前にいるのはトリステインの伝説のメイジ、烈風のカリンこと、カリーヌ・デジレ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女は杖を構え、仏頂面で僕を見下ろしている。

「さて、今日から私が貴方を鍛えます。反論は許しません」

まだ子供の僕に対して、大人でも腰を抜かしそうな威圧感を醸し出しながら、彼女は僕を睨み付ける。

だが、僕は脅えたりなどしない。

どう考えてもあの変態子供好き（性的な意味で）の方が怖いからだ。

あの阿婆擦れを忘れない限り、僕は戦場ですら恐怖を感じたりしないだろう。

女にされてしまいそうになる恐怖なんて感じるとは思わなかった。

あんな事がないように兄と容姿を交換する、もしくは髪を切ったり服装を変えたりして男らしくなりたい気分だ。

お母様が許してくれないので確実に無理だろうけど。

「せんせー、質問ですです」

右手を大きく上げて呼び掛ける。

なんとなく学生時代に戻った気分だ。

「はい、なんでしょう」

それに対して彼女は表情一つ変えずに返事をした。

そして僕はその返事を聞いて笑顔で彼女に質問をする。

「ルイズはおやつに入りますか？」

「（　。д　。）」

「あ、間違えた。ルイズは一緒に教わらないのですか？」

定番の質問である『バナナはおやつに入りますか？』が頭に過ぎって、質問内容と混ざってしまい、おかしな質問をした事で公爵婦人は物凄い表情をした。

そして、威厳なんて知らん、というその表情を笑わないように訂正すると、彼女はすぐに咳ばらいをして、仕切り直し、元の仏頂面に戻る。

「え、ええ。ルイズには家庭教師を雇っていますから」

「それで拗ねたりしないですか？　私もお母様に教わりたい的な」

彼女に追加の質問をすると、彼女はむっとした表情をした。

「いえ、あの娘はむしろ私からの指導を拒絶しましたから」

苛立ちながら話す姿に苦笑いをする。

そして小さな声で、「死にたくなかったんですね、わかります」と呟いた。

「何か言いましたか？」

風のメイジらしくきちんと聞こえていたようで、僕は笑顔でごまかす。

「空耳、もしくは聴覚障害です。クソババア」

訂正、おちょくる。

「い、今なんと？」

僕の言葉を聞いて、彼女は杖をへし折りそうなぐらい力を込めて握り締めている。

僕はその姿を見て笑顔のまま話を続ける。

「どうやらちゃんと聞こえてるみたいですね。さっさと授業をお願いします」

「は、はい。そうですね。うふふふふ」

濁った瞳で僕を見つめながら妙な笑いをする公爵婦人。

これは確実に怒っているようだ。

しかし彼女はすぐ様荒い呼吸を静め、いつも通りの動作に戻る。

ルイズとは違い『大人』はすぐに癇癪を起こさないんだなぁ、と僕は関心した。

「ではまずは座学を――」

そして何事もなかったかのように授業は再開された。

しかし座学と言う言葉を聞いて僕は話を聞くのをやめる。

もう僕に座学は必要ないのだ。

それを説明する為に何か魔法を使って証明するとしよう。

「ユキビタス・デル・ウィンデ」

「（　。д　。）」

なんとなく使用してみた風のスクウェアスペル、偏在は無事成功し、僕は二人に分身した。

それを見て彼女は唖然とする。

「なんとなく」

「できましたー」

「夢だけど」

「夢じゃなかったー」

二人交互に話すと公爵婦人は頭を抑えながら僕を信じられないものを見る目で見る。

バファリン使うですかー？

「さ、流石はシルビアの息子。常識が通用しませんね」

ドン引きしている烈風のカリン。

「そんなに褒めないでください」

「照れちゃいますから」

「褒めてません」

「「ぶーぶー」」

彼女は呆れながら否定した。

僕達はそれにブーイングをするが、彼女は気にした様子はない。

「とりあえず貴方は既にスクウェアレベルの精神力を持っているようですから、呪文の暗記でもしていなさい。それが終わり次第実戦

訓練をします」

そして取り繕いながら僕に命令（オーダー）を下した。

「あんちょこ見ながらって格好良くありませんか？」

「気分は千の呪文の男！」

「わかりましたね？」

「「はーい」」

睨まれたのでおとなしく返事をする。

なんでこの人いちいち怖いんだろう。

子供にぐらい優しくしてほしい。

ヴァリエールの領民は怖くて彼女に近付けないのではないだろうか。

平民の子供は睨まれたら心臓が止まるのではないだろうか。

彼女を妻にしたヴァリエール公爵は本気で尊敬する。

偏在を解除しながら僕はそんな事を考えていた。

「よろしい。いつか貴方も戦場に立つのですから、呪文の暗記は必須ですよ」

「大丈夫です。平民を盾にします」
「（　。д　。）」
「冗談ですよ」
「そ、そうですか」
「盾にするのは貴族です」
「（　。д　。）」
彼女の驚愕するなんて珍しい表情を見たのは今日何度だろうか。
「嘘ですよ」
僕は眼を反らしながら答える。
「絶対にやってはいけませんよ？」
「押すなよ絶対に押すなよ、ですか？」
「フリではありません！」
「はーい」
ぷんすかぴーと怒る彼女を見て、僕は礼儀正しく返事をした。
ちなみに戦場に出て死にそうになれば、平民だろうが、貴族だろうが、王族だろうが、男だろうが女だろうが関係なく例外なく、僕

は誰かを盾に自分の命を守ります。

きっとギャグ補正で生き延びてくれるでしょう。

我が最愛のお兄様なら生き延びるどころかエルフのように魔法を反射できるかもしれません。

「……はぁ、本当にシルビアによく似ていますね」

僕がニヤけているとチートさんが溜息交じりに言葉を紡ぐ。

「お母様は昔はどんな方だったのですか？」

僕は可愛らしく小首を傾げながら愛らしい表情で尋ねる。

「その仕草も似ていますよ」

チートさんは僕を見て笑った。

「シルビアは……そうですねぇ。とにかく狡賢い娘でした。そして王族だろうが大貴族だろうが例外なく自分らしく接する人間でした。たぶん今もそうでしょうけどね」

「自分らしく？」

「ええ、マリアンヌ様なんて跪ずいて脚を舐めさせられていたわ」

それを聞いて僕はドン引きした。

本物の女王様を奴隷にしての女王様プレイなんて女王様過ぎる。

ドSだ。

そんなお母様に似ているなんてひどい暴言としか言いようがない。

「それに魔法の才能も素晴らしかったわね。サボり癖さえなければ私なんかよりもずっと素晴らしいメイジになっていたでしょう」

僕は何も言わない。

ただ聞き始めのワクワクした態度とは真逆の心底嫌そうな表情で母親の知りたくなかった話を聞き続けている。

「貴方のお父上はそんな彼女の一番の犠牲者でした。魔法で切り刻まれ、禁止されている魔法の実験台になり、誰もが同情していましたねぇ」

お父様がドMなのはお母様の調教の結果なのですか。当然なのですか。

僕は更にげんなりとする。

「貴方はそんな両親から生まれたんですよ」

嬉しくない。全然嬉しくない。

「ですが、あの二人のようには育たないように清く正しく成長してくださいね」

苦笑を浮かべながら言われた言葉に、僕は力強く何度も頷いた。

これからは少し自重しよう。

第五話　女王様より女王様（後書き）

初期設定ではアリアは女の子でした。わざわざ男にしたのは百合好きっていうか百合な作者が男の娘×女の子から女の子×女の子を好きになってもらえないかなぁとか考えたからです。

嘘です。本当は僕っ娘で書いていたら男の娘になっていただけです。

第六話　僕とルイズと時々メイド＋α

◇危険なフランシア

「なんかこう……、世界中が鼻で笑うようなくだらないことがしたい」

「なにそのくだらない願望」

ごろごろとベッドの上で言った僕の独り言に、椅子に座りながら本を読んでいたルイズが呆れながら突っ込む。

くだらないとは失礼な。

「――僕は王族も貴族も平民も、みんな関係なく、全員を笑わせたいのですよ」

キリッと真面目な表情でルイズの方を見つめながら言葉を紡ぐ。

「その言葉だけ聞くと立派よね。その前に言った言葉で台なしだけど」

しかしルイズは態度を変える事なく残念そうなもの見る目で見つめ返すだけだった。

「肯定です。お嬢様はもう少し考えて発言を――」

「うるさいですよ、ショタコン」

そしてフランシアが畳み掛けるように僕に説教をしようとするが、僕はそれを遮る。お説教は勘弁です。

「しょたこんって何よ？」

僕の言葉を聞いていたルイズが首を傾げる。僕はそれを見て『容姿や動作は可愛らしいが性格が残念だよね』と心の中であまり関係ない事を呟いた。

「ねぇ、なぁに？」

「幼い少年を性的に愛する変態でございます」

いつまでも答えない僕に苛立ちながらルイズがもう一度尋ねると、僕の代わりにフランシアが答えた。

ルイズはそれを聞いて顔を真っ赤にする。耳年増発見です。

「な、ななな」

「もちろん、私はショタコンではありませんよ。ただのロリコンです」

「えっ？」

顔を赤らめながら焦るルイズにフランシアは更に追撃する。

それを聞いて僕は思わず声をあげてしまった。

「ろ、ろりこん？」

ルイズは理解できなかったのか不思議そうな表情でフランシアを見る。

「幼い少女を性的に愛する変態でございます。ぶっちゃけた話をさせていただきますと、生まれた瞬間から二十歳になるまでの女性が私の守備範囲です」

「「えっ？」」

無表情で淡々と告げる使用人の言葉に僕達は揃って疑問を浮かべる。

……同性愛者？

「ガチレズと呼ばれる同性愛者ですね。あ、お嬢様は別ですよ？」

僕の予想は当たっていたが、更に斜め上の追加も存在した。

えっ、狙われてるの？

僕は数日前の事を思い出してすぐにベッドから離れ、ルイズの後ろに移動する。

「あばばばば」

「あ、あんた、なんて使用人連れてくるのよっ！」

ルイズも脅えているようで、僕の身体を揺らしながら焦り出す。

「僕は男だから幼女の方をオススメするですよ！」
「ちょ、あんた、普通は男なら女を守る場面でしょ！？」
「む、無理！　あの人ガチで怖いから！」
「いつも人を振り回してる癖に！！」
「受け身は苦手なのですよ！」
ぎゃーぎゃーわーわーと喚きながら、僕達はお互いを生贄にしようと彼女の前に突き出し合う。
そんな僕達の様子を見て、フランシアは溜息を吐いた。
「心配しなくても手を出そうなんて考えておりません」
その言葉を聞いて僕達はぴたりと止まる。
「ほ、本当に……？」
「ええ、本当です」
ルイズが恐る恐る尋ねるとフランシアは笑顔で頷いた。それを聞いて僕達はお互いを抱きしめ合いながら、ほっと安心する。
「そういえば、この前のアレも冗談だったもんね」
僕は胸を撫で下ろしながら彼女に笑い掛ける。すると、彼女も同

じように僕に向かって微笑んでくれた。

「――いえ、私がガチレズでロリコンなのは事実です」

舌舐めずりをしながら蛇のように僕達を見定める目に僕もルイズも身体が強張る。

「「助けてーっ！」」

そして次の瞬間には二人一斉にドアを開いて、一目散に駆け出し、全力疾走で逃げ出した。

「子供というのは本当にからかいやすいですね」

僕達がいなくなった部屋にはクスクスと一人で笑う使用人がいたそうな。

◇エレオノールの悩み

エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール三姉妹の長女で、現在１６歳。魔法学院に通っているらしいが、現在休暇中で実家に帰って来ている。

そんな彼女が何故か僕をじっと見つめたまま動かないのは何故だろうか。

「あんた名前は――」

「アリアです。アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。気軽にアリア様でいいですよ？」

「なんで私があんたを様付けで呼ばなきゃいけないのよ」

観察していたような瞳が睨む目付きに変わる。流石烈風のカリンの娘と言った感じの威圧感を沿えて。ちなみに、ぎゃーぎゃー喚くルイズよりも落ち着いているが、こめかみに青筋が浮かんでいる事から、相当怒っているのがわかる。

口調は落ち着いてるけど、表情は今にも噛み付いてきそうな程獰猛だし。

「あんた、確か男よね？」

殴り掛かりそうになっている握り拳を反対の手で掴み、怒りを抑えながら尋ねるエレオノール。金色の髪がメデューサみたいにうねり出しそうだ。

「ああ、服装ですか？　お母様の趣味です。似合いますか？」

僕はそんな様子を気にせず、スカートをふわりと翻しながら一礼をする。

「それ、嫌じゃないの？」

僕の行動を見てエレオノールは理解しがたいものを見る目で僕を

見る。

オカマやろうだと勘違いしているのでしょうか。

「嫌ではねぇですよ。自分の服装や髪型を気にした事はないですから。あ、でもパンツスタイルが似合わないのはちょっと残念ですね。スカートは寒いので」

ひらひらとスカートを摘み上げながら苦笑を浮かべる。

女の子になりたいなんて考えた事はないが、男らしくなりたいと考えた事もない。この格好が好きという訳ではないが、嫌いという訳でもない。つまり、どうでもいい。

僕の言葉を聞いて、エレオノールは溜息を吐いた。

「あんたに聞こうとしたのは間違いだったみたいね」

「何をですか？」

「えっ、いや……その、」

エレオノールは僕の質問にしまった、という顔をする。

おそらく何か悩みがあってそれをバレずに相談したかったのだろう。

「何か悩みがあるのなら僕が解決してあげましょう。恋のキューピッドなんかもお任せくださいです」

「なっ――」

僕の言葉にエレオノールは顔を真っ赤にする。

まさかの恋愛相談ですか。

前世では紹介しても全カップル上手くいかなかった僕ですが、今回ばかりは独神エレオノールを救って差し上げましょう。

「友達の話なのだけれど――」

エレオノールは恥ずかしそうに語り出す。

友達の話＝自分の話な法則ですね。

３０分掛けてエレオノールが語った内容によると、こんな感じでした。

?学院に好きな人がいる。
?その人が女の格好をした弟の話ばかりする。
?もしかしたら『そっち』の趣味なのかもしれない。
?振り向かせるにはどうすればいいのだろう。
?ついでに参考の為に貴方の兄の好みの服装とかタイプとか教えてほしい。

ま　さ　か　の　フ　ラ　グ　！

どう考えてもエレオノールが好きなのは僕のお兄様ですね。

「……」

無言で僕の答えを待つエレオノール。

どうすればいいのだろう。

「えっとおにい――じゃなくて、たぶんその人はストレートですよ。ただ家族が好きなだけかと。だから普通に女の子が好きだと思います。それと振り向かせる為には積極的が一番だと思います。あと、お兄様の好みのタイプとかは知らないです」

「そ、そう？　こほんっ……そうね、友達にも言っておいてあげるわ」

エレオノールは嬉しそうにニヤけるが、僕が目の前にいる事を思い出すと取り繕いながらごまかすように咳ばらいをする。

「ま、まぁまぁ参考になったわ。たぶん友人も感謝していると思うから」

そしてそのまま急ぎ足で立ち去っていった。

後日、兄から女好きの変態とエレオノールに罵られたと手紙が届くのはまた別の話。

第七話　美ＷＡＬＫ、健康に、美しく！

「う～さ～ぎ～美～味しい～ふふふ～ふ～ん♪」

「共食いですか、お嬢様」

「人間です」

貴族の食事は豪華だ。

そしてボリュームもある。

それがどういう事かわかるだろうか。

このまま魔法もあまり使わず、運動もせず、屋敷の中でうだうだしていたら、すぐにマリコルヌ《こぶたさん》になってしまうという事だ。

ルイズがお姫様に会う為に王城に向かった後、暇になった僕はすぐに行動を開始した。

庭を散歩するという苛酷な肉体労働を。

ちなみに伯爵家の次男でしかない僕はお姫様の遊び相手に相応しくなく、また男を姫に近付けるのは好まれず、ヴァリエールの知り合いだからと王城についでに連れていってもらえる事はなかった。

ルイズが聞いた話では王城で勤務する者曰く『シルビアによく似た子供なんてアンリエッタ姫様に近付ける訳にはいかない』だそうだ。

ルイズから言われた『あんたのお母様何したのよ』という言葉に返す台詞は僕にはなかった。

まさか女王様に女王様プレイした事あるらしいよ、なんて子供に話す訳にはいかない。

「お嬢様なら世間知らずな姫様なら一日で従順な犬に仕立てあげられるでしょうね」

「いや、僕をそんな生粋のサディスティック調教師みたいに扱わないでくれないですか？　僕はそんなみんながドン引く果てしないドS野郎じゃないよ」

「ご冗談を。お嬢様は奥様そっくりですよ？」

「……知りたくなかった現実を大画面３Ｄで見せられた気分だよ」

変態メイドはいつの間にか着いてきていた。

何処に逃げようと発見され、『お嬢様のお世話係ですから』と行動を共にすると伝えてきた。

使用人らしく後ろを歩いてくるのだが、気分はハイエナに追いかけられるバンビだ。

「心配なさらずとも、お嬢様の純潔を初体験なのに外で散らせる気はありませんよ」

それは外じゃない場所でいつか散らせてやると宣言しているよう

なものではないのか。

僕は返答を聞くのが怖いから聞かなかった。

しかし微笑む彼女の姿を見て、聞かなくても答えはわかってしまった。

前世で女性に一般的に酷いと言われる事をし過ぎたのが原因なのだろうか。

――助けてブリミル様。

「穏やかな気分で散歩したいなぁ」

「私が邪魔だと言いたそうですね？」

「言わなくてもわかってくれるなんて優秀だね」

「ありがとうございます」

「わかってるならさっさとこの世界から消えてくれればいいのに」

「あ、失礼。この場からではなく世界からも消えて欲しいと思っているのはわかっていませんでした。まさか雇い主の子息様に『死んでほしい』と思われていたのは想定の範囲外です」

彼女は無表情で淡々と告げた。

真顔で死を願われている事を知ってもダメージなんて負っていない。

コイツに弱点なんてあるのだろうか。

「ねぇ、フランシア？」

「はい、なんでしょうか」

「君にもやっぱり弱点ってあるの？」

「肯定です。私も人間ですから。弱点のない人間など存在しないかと思われます」

そんなチート野郎も実は結構いると思うけどね。

「それは何？」

僕は彼女を上目遣いで見上げながら首を傾げて尋ねる。

すると、彼女は心底嫌そうな表情で告げた。

「男です。髭なんてとてつもなく気持ち悪いですね。ぶよぶよな身体をした豚も身体を鍛えている筋肉質なゴリラも汚らわしいです。まだ目覚めていない赤子や枯れた爺なら許せますが、下半身直結型のエロ男には触れられる事すら許せません。そんな事になりそうになれば私は自害します。ああ、汚らわしい。世の中の男なんか全て死に絶えればいいのに。何故あんなものがこの世界に存在しているのでしょうか。ブリミル様も根絶やしにしておいてくだされば良かったのに。もしくはブリミルも男だったのでしょうか？　それなら私はブリミル教徒さえやめたくなりますね。毎晩ブリミル様に世界中の男を根絶やしにしてほしいと祈るのもやめます」

歩きながら息継ぎなしで語られた言葉に僕はげんなりとする。
生粋のレズ野郎じゃないですか。
「すごい肺活量だね」
「ルチアーノ家の使用人たるものこれぐらいは当然でございます」
ルチアーノ家の使用人は化け物か！
「あ、お嬢様は別ですよ？」
できれば別にしないで欲しい。
あれで呼吸一つ乱さないタフな肉食獣の相手なんか務まらない。
「しかしあれだね。流石はヴァリエール家、庭もとてつもなく広い」
話を変える為に話題を提供する。
いつまでも変態の性的な趣向の話を聞きたくないし、そんな話では盛り上がれない。
「肯定です。領地もルチアーノ家とは段違いですしね」
メイドも僕の心情を察したのか、話題に乗ってきてくれた。
こういう僕の意図が理解できたり、仕事がめちゃくちゃできるところは優秀だ。

これでまともな性格だったら言う事がないのに。

あと、振り回しやすい弱点も欲しい。

「あら？　あの馬車は公爵様のですかね？」

メイドの声を聞いて前を見ると、そこには贅沢装備を施した馬車が屋敷に向かって走っていた。

「朝から色街にでも行っていたのですかね？」

「お嬢様は貴族を何だと思っているのですか？」

「魔法が使えるお金持ち」

貴族の義務（ノーブレス・オブリージュ）とか今のハルケギニアには戦争の時に最後までアルビオンの王党派だった貴族にしかないのではないだろうか。

平民を奴隷として扱うトリステイン。
金儲けばかり考えるクルデンホルフ。
お金で貴族になれるゲルマニア。
現状よりも贅沢な暮らしに釣られて反乱を起こすアルビオン。
無能王の駒となるだけのガリア。
貴族ではないが貴族すら食い物にして私腹を肥やすロマリア。

いや、僕にはどうでもいいけどね。

自分が良ければそれでいいクズだから。周りの人間を玩具扱いする性悪だから。

積極的に悪事を起こす訳ではないが、関わる気もない。

「楽しければそれでいい！」

「いきなりどうなさいました？」

メイドは突然宣言した僕を怪しげな目で見る。

僕はそれに笑顔で返す。

「とりあえず公爵の馬車を爆破しましょうぜ！」

「流石にそれはまずいかと。いきなり何をおっしゃっているのですか？」

「暇なんです！　散歩は飽きたのです！」

「暇だからと公爵家に喧嘩を売ろうとするお嬢様の思考回路が私には理解できません」

「考えるな……、感じるんだ！」

「いえ、とにかくダメなものはダメです」

メイドの言葉に溜息を吐く。

どうせなら王族に生まれたかった。

そうすれば『面白くなかったら打ち首パーティー、ポロリ（首が）

もあるよ』とか開けるのに。

「あれですね。奥様がお嬢様に何故わざわざ世話係をつけたのか漸くわかりました。お嬢様を守る為ではなく、お嬢様から守る為でしたか」

メイドは通り過ぎる馬車を見つめながら呆れたように呟く。

「お嬢様、屋敷に戻りましょう。暇ならカトレア様がお相手してくださるでしょう」

「あの人苦手です！」

「大丈夫です。流石に首輪を付けたりとかは自重してくれるでしょうから」

「えっ、何の話？」

「いえ、以前カトレア様から『どういう風にあの子で遊ぶのがいいかしら』と相談されまして」

なにそれこわい。

「いや、僕はもうちょっと散歩を――」

「それとそろそろ昼食の時間です」

「それなら僕達も戻りますか」

運動したらお腹が空く。

ヴァリエール家の食事は我が家より美味しい。
だからちょっとぐらい我慢しよう。
僕は馬車が向かった方向に足を進めていく。
メイドもそれに後ろから着いてきた。
「私がおばさんにな～ったら、貴方はゴブガリよ♪」
「ご機嫌ですねお嬢様。いえ、歌の意味は理解できませんが」
「考えるんじゃない――」
「感じろ、でございますね？」
「うん！」
でゅーくずうぉーくで帰った後のご飯は大変美味でございました。

第八話　カトレア動物園

蛇、鳥、狼、犬、猫などの地球にしかいない生物や、ハルケギニアにしか存在しない幻獣まで、ご飯を食べた後に連れて来られたカトレアの部屋の中はたくさんの生き物が溢れていた。

「動物園でも開くのですか？」

「ドウブツエン？」

「世界中の動物達を集めて檻に閉じ込めて見世物にする為のお店ですよ」

「あら、この子達はお友達よ？」

ベッドに腰掛けながらカトレアは優しくふんわりと笑う。

彼女の部屋は公爵家の人間とは思えないほどの質素さだ。

確かに物の一つ一つは高級品なのだろうが、物自体少なく、至るところに動物が付けたらしき傷跡が残っている。

「おいでおいで」

カトレアが手招きしながらこちらを見る。

どう見ても人間扱いされていない。

「ほら、ね？」

両手を大きく広げながら僕が飛び込んでいくのを待っている彼女を見て、僕は小さく溜息を吐く。

僕は彼女のペットになったつもりもなるつもりもないし、甘えさせてほしいと考えるほど子供でもない。

「――首輪を付けてほしいのかしら？」

でも、よく考えたらまだ年齢的には幼い子供だし、たまには甘えたくなってしまうことも無きにしもあらずだし、女性の誘いを断るのは紳士的に許されないし、むしろここは大人になって彼女に付き合ってあげるのも貴族の務めだよね。

「うふふ、どうしたのかしら？」

彼女の右手にちらっと見えた黒い物体を見て、僕は抵抗する事なく彼女の腕の中にすっぽりと納まった。

そして彼女は僕を抱き上げて膝の上に乗せる。

まだ十三歳なのに彼女の身体は女性的に順調に成長している。

これで病気さえなければ貴族の男連中に大人気ではないだろうか。

ヴァリエールの領地からすら出れない病弱な身体の彼女に僕は同情する。

「同情なんていらないわよ？　お友達もたくさんいるし、家族にだって愛されているし、暮らしだって豊かだし。それに私って同情さ

れるの好きじゃないのよね。同情って上から目線の言葉でしょ？
私は下に落ちているつもりはないわ」

「あいたっ――」

額に衝撃を受けて痛みに瞳を閉じる。

でこぴん、優しい力で放っただろうそれはなかなか痛みを感じた。

「それと言ったでしょ？　貴方といると身体の調子もなんだかいいのよ」

「なにそのアニマルセラピー」

「アニマルセラピー？」

「動物と触れ合う事で癒しがどうたらこうたらなのですよ」

頭を撫でられながら思う。

どう考えても癒す立場なのは僕ではなく、カトレアだろう。

「それは素敵ね。お友達と一緒にいるだけで、仲良くしているだけで体調が良くなるなんて」

部屋で寛ぐ動物達を見て彼女は笑う。

僕は頭を撫でられながら気持ち良さそうに目を細め、されるがままになっていた。

「アリアはいろんな事を知っているのね？」

「あまり外出が許されていないので、読書ばかりしているからですにゃー。所謂『頭でっかち』ってやつです」

「魔法も得意なんでしょ？」

「あんな疲れるもの嫌ですよ。僕は頭脳労働派なのです。あ、でも労働自体嫌なので将来は一日中寝ているグータラ人間がいいです」

「私みたいに？」

「病気になるのは勘弁ですけどね」

僕がそう言うと彼女は笑う。

「ハッキリ言うのね？　気を遣ったりしないの？」

彼女の表情は僕からは見えない。

けれど悲しい表情ではない事は話し方からわかる。

たぶん彼女は純粋に、好奇心から尋ねているだけなのだ。

怒っている訳でも、悲しんでいる訳でもない、いつも通り優しい笑顔で微笑んでいるのだろう。

「僕は人間を平等に自分がしたいように扱うですからね。王様だろうが、貴族だろうが、平民だろうが、病人だろうが、怪我人だろうが、たとえ悪魔だろうが、僕は自分勝手に振り回します」

たまに振り回されるけど。

「うふふ、そうね。その方がいいわ。私は対等に平等に扱ってくれる方が嬉しいもの」

「僕は対等より下に扱うですけどね」

昔、『病人だから、身体障害者だから優しくしなさい。差別しちゃダメよ？』なんて言われた事があるが、僕はそれ自体が差別だと思う。

人間平等でいきましょうぜ。

「そうね。私もそっちの方が気が楽だわ」

頭をぽんぽんと叩かれる。

「ありがとね」

そして何故かお礼を言ってきた。

心の底からお礼を言われるなんてこの世界でははじめてかもしれない。

心の底から怒られるのは生まれてから何度も経験したが、こんな風に『ありがとう』なんて言われたのは前の世界でもなかなかない。

「か、勘違いしないでよねっ！　別にあんたの為なんかじゃないんだから！　別に嬉しくなんてないんだからぁ！！」

「あらあら、ルイズみたいね」
無表情でツンデレながら棒読みすると、カトレアは含みのある笑顔で微笑んだ。
「顔がりんごみたいに真っ赤よ？　それに口元がニヤついているし」
無表情で――
「耳まで真っ赤か」
と、とにかく、カトレアは笑った。
「これでこの話は終わり！」
「そうね、そうしましょう」
こほんっと咳ばらいして話を強制終了させる。
この世界には勝てない人間が多過ぎる。
「あ、そうそう。首輪の色は何色がいいかしら？　やっぱり瞳と同じ赤？　私の髪と同じ桃色？　それとも貴方のお腹の中のように黒？」
「誰が腹黒か」
「そうね。貴方は黒より真っ黒で、貴方のお腹の中と同じくらい黒い色の首輪なんて見付からないわよね」

「誰もそんなこと言ってな――ああ、喉はらめぇぇ！！！」

喉をごろごろと撫でられ、僕は快感に身をよじる。

「ほらほら、何色がいいのかしら？」

「首輪なんか、あっ、うにゃ、ああっ、喉は、喉は――」

カトレアのテクニックは以前よりも成長していた。

僕は悶えながら抵抗するが、彼女はそれをものともせず、僕の喉を優しく撫で続ける。

――ヘブン状態っ！！！

☆

あれから帰還したルイズが止めてくれるまで延々と快楽地獄に囚われていた。

喉を撫でるだけで呂律が回らなくなるほど気持ち良くするとかゴッド（ブリミルではない）フィンガー過ぎる。

「……あんた大丈夫なの？」

ベッドで寝込む僕を心配そうに見つめる幼女に僕は返事できない。
たぶん今声を出したらみさくら語（だったかな？）みたいな言葉でしか話せないだろう。
「いつも自由で元気なあんたをそこまで追い詰めるなんて、……やっぱりちぃねぇさまったら最強ね！」
ルイズは誇らしそうに笑う。
いつもの仕返しか知らないがとても偉そうだ。
「これに懲りたらあんたもこれからは人をからかったり振り回すのをやめなさい！」
それは関係ないと思う。
「もし今度私に何かしたらちぃねぇさまにお願いして今みたいになるようにしてもら――あいたっ」
調子に乗るな。
僕はルイズの額に力いっぱいでこぴんをした。
「告げ口したらルイズ――」
「ごくりっ」
息を飲む幼女。

僕の普段の行いの悪さからどんな仕返しをするのかに怯え緊張しているようだ。

「――のお父様の髪の毛を根絶やしにしてあげよう」

「やめたげてぇ！！　お父様めちゃくちゃ気にしてるから！　たまに鏡を見ながら髪の毛を弄って溜息吐いてるからぁっ！！！」

「……」

「……」

「ごめん」

「私も……」

お互い悲しげな表情で見つめ合う。

確か心配しなくてもあと１１年は白髪が増えるだけで髪の毛も健在なはずだが、やはり年老いた男は髪の毛関係で多大な悩みを抱えるものなのか。

そういえばウチのお父様もまだ若いのに同じような事してたっけ。

勝ち誇る幼女の悲痛な叫びを聞いて、僕達はお互い他の人は巻き込まない事を決めた。

ちなみにこの時のルイズの叫びは屋敷内に大きく響いていて、公爵にも聞こえたらしく、彼は普段の威厳のある顔付きが霞むほど、めちゃくちゃ涙目だったそうだ。

第八話　カトレア動物園（後書き）

喉を優しく『撫で』続けるが、喉を優しく『投げ』続けるという優しさのカケラもない、ＳＭを越えた鬼畜プレイになっていたのを七煙眠兎様の指摘により、修正させていただきました。

たぶん投稿してから１万アクセスぐらいありましたが、３１日のアクセス数は普段の倍でしたが、皆さんお気づきだったでしょうか？　気付いていて、しかもそういうプレイなのかと納得していたアブノーマルな変態さんはいたでしょうか？

とりあえず一応言っておくと狂愛の作品のカトレアさんには喉を千切って投げる趣味はありません。

期待していた方はすいません。

第九話　魔法少女ルイズ☆バクハ

「トリック・オア・トリート。お菓子をくれなきゃ犯しちゃうぞ、でございます」

「えっ、突然何ですか？」

「何故か言わなきゃいけないような気がしまして」

突然変態的な台詞を言い出したメイドは無視する事にする。

ルイズは魔法が使えない。

爆発、爆発、爆発、爆発。

何度やっても爆発、何をやっても爆発するボンバーガールだ。

今日もドッカン、ドッカン、庭に生えた草を根こそぎ焼失させている。

僕とメイドはそんな彼女の魔法を見学しているのだが、これがまた面白い。

治癒を使おうとしたら爆発ってどう考えてもトドメだ。

「何よ？　言いたい事があるなら言いなさいよ」

半泣きの表情で僕を睨む幼女。

最年少スクウェアたる僕が未だにどんな魔法も成功しない彼女を笑いに来たとでも考えているのだろう。

まぁ、あまり間違ってないが。

「あれじゃないですか？　ルイズ虚無ってるんじゃないですか？」

「はぁ？　何馬鹿な事言ってんのよ。私が始祖ブリミルと同じ虚無な訳ないでしょ？　馬鹿なの？　死ぬの？」

僕のせっかくの助言を全く相手にしないルイズ。

まだ子供なんだから素直に『私が虚無？　そうか、そうなのね！　わぁい』とか喜んべよクソガキ。

「そうね。もし私が虚無だったらお母様の寝室を魔法でめちゃくちゃにしてもいいわよ？　それに付け加えてエレオノール姉様の眼鏡を粉々にしてもいいわね。それで叱られてもあんたのそいにはしないわ」

ふふんと笑うクソガキ。

たぶん１１年後に死ぬ程後悔する。

――ドカーン。

ルイズが杖を振りながら呪文を唱えるとまた小さな爆発が起こる。

「ほら、見なさい？　虚無だと思い込んでやってみてもコモン・マジックすら成功しないじゃない」

「失敗魔法を誇られても……」

「う、うるさいわねぇ！」

ふふんと誇らしげなルイズに言い返すと、彼女は図星をつかれて真っ赤になる。

あの真っ白な本とアホリエッタが旅費の足しに売ってもいいと言った国宝の指輪で覚醒していないのに成功するはずがない。

「とりあえずあれだよ。１１年後までに虚無にならなければ僕の負けでいいよ」

「なんか中途半端な期間ね？　まぁ、いいけど。もし無理だったらあんたがさっき言った事をやるのよ？」

「うん、約束ね」

「はいはい」

僕とルイズはお互いに笑い合った。

僕は彼女が泣きながら二人に怒られるのを想像しながら、彼女は逆に僕が二人に叱られるのを想像しながら、二人共純粋に、とは言えない邪まな笑顔で微笑みあった。

「さて、その話は終わり。とりあえずルイズはこれからその失敗魔法を活かす事でもしたら？」

「はぁ？」

ルイズは僕の言葉を聞いて怪訝な表情をする。

何言ってんのこいつ、なんて今に言ってきそうだ。

「何言ってんのこいつ」

言われてしまった。

「魔法が全部爆発するなら爆発を利用すればいいんだよ！　つまり人類は滅亡する！！」

「な、なんだってー！　――って最後のは全く関係ないじゃない！！　何やらせんのよっ！」

「何やってんのよっ！」

「うるさいっ！」

ぎゃーぎゃーうるさいルイズを程よくからかいながら僕はルイズの爆発魔法練習方法を考える。

そして良い方法を思い付いた。

「ヴァリエール家メイド部隊&フランシア集合！！！」

風の魔法を使って屋敷内に声を響き渡らせると、最初から傍にいたフランシア以外の一流メイドの皆さんも仕事で離れられない人達以外全員庭に集合してくれた。

「全員一列に並べーっ！！」

「えっえっ？」

ルイズは突然の状況に着いていけないみたいでキョロキョロと挙動不審だが、メイド部隊＋αの皆様は状況を理解していないのにも関わらずに直ぐに行動を開始し、あっという間に一列に並んだ。

「そのまま待機！」

僕がそう言うと彼女達は微動だにせず、そのままその場に直立し続ける。

「よし、ルイズ。錬金だ！　一列に並んだメイド達の心臓目掛けて順番に錬金を掛けていけ！　馬鹿にしてきた使用人や変態（フランシア）をぶち殺せるチャンスですよ！」

「「「「ええーっ！？」」」」

ルイズとメイド達から驚きの声があがった。

フランシアは無表情だが、ヴァリエール家のメイド達は顔面蒼白だ。

あの爆発の威力は使用人なら全員知っているし、そもそも平民にとって魔法とは恐怖の対象だ。

いくら失敗魔法といえども恐がるなというのは無理な話だ。

張本人のルイズはいきなりメイド達を殺せと言われ、杖を落とし

てしまった。

流石に真っ直ぐ育った五歳児にこんな発言をしたら怯えるのは当然か。

「あ、あああああんた何言ってんのよ！」

ルイズの言葉にヴァリエールメイド軍団は大きく何度も頷く。

集まられたと思ったらいきなり魔法の的にされるなんて初体験だろう。

「練習にピッタリじゃない？」

メイド達は必死に首を横に振る。

「んな訳ないでしょうがぁぁあああ！！！！　簡単に奪ってもいい命なんてないのよ！」

ルイズは吠えた。

その言葉に感動して感涙するメイド達まで存在している。

「あんた達、もういいからさっさと持ち場に戻りなさい。こいつは私がなんとかしておくから」

ルイズがそう言うとメイド達はフランシアを除き、全員逃げるように泣きながら去っていった。

「普通にっ、練習っ、させてっ、頂戴っ！」

はぁはぁと荒い呼吸を整えながらルイズが僕を睨む。

「興奮しているのですか？　性的な意味で」

「そんな訳ないでしょっ！！」

そして彼女は杖を拾いあげて僕に向けた。

「ああいう悪ふざけは許さないからねっ！？」

「はいはーい」

僕が返事をするとルイズは疲れたように杖を下ろしてその場に座り込んだ。

――パチパチパチ。

手の平を何度も合わせたような乾いた音がルイズの失敗魔法で荒れ果てた庭に響く。

「お見事です、お嬢様。これで使用人達は陰口など叩かず、ルイズ様を慕うようになるでしょう」

「えっ？」

フランシアが僕に向かって拍手をしていたようだ。

彼女は僕を褒め讃えながら微笑み、ルイズはそれを聞いてハッとしていた。

そして照れたような表情で僕を見る。

僕はルイズに見つめられながら笑顔で答えた。

「えっ、何の話？　僕はフランシアを殺してもらうついでに練習用の的を用意しただけなんだけど」

二人から笑顔が消えた。

信じられないものを見たかのように固まっている。

「そうよね。こいつが私を気遣うなんて有り得ないわ」

「肯定です。私の考え過ぎな勘違いでした」

こういう時はこの二人は仲良しな気がする。

ルイズは彼女がロリコンの変態だと忘れているのだろうか。

「まぁ、そんな事は置いておいて。魔法の練習しようぜ！　僕は冷やかすだけでしないけど」

「冷やかしはいらないわよっ！」

「まぁまぁまぁ。爆発魔法を有意義に使うですにゃー」

「失敗魔法なんて意味ないじゃない。私はお母様やお姉様達みたいにちゃんとした魔法が使いたいのよっ！」

お父様が入っていないのが可哀相だ。

ルイズは呆れたような顔で僕を見る。

「ふむふむ、ルイズは爆発をコントロールする自信がないと？　ちゃんとした魔法じゃないから操る自信がないと？　誰も使えない魔法だから教えてくれる人もいないし、できる自信がないと？」

僕の言葉を聞いていく内にルイズはみるみると真っ赤になっていく。

「はぁ？　そんな訳ないじゃない！　いいわ。こんなぐらいすぐにコントロールできるようにしてやるんだからっ！」

「はいはいそうですね。天才ルイズ様なら簡単ですよねー」

「むかつくぅ！　絶対やり遂げてみせるんだから！　見てなさいよっ！？」

こうして見事に載せられたルイズは爆発魔法のコントロールを覚えたのだった。

キレやすい若者は扱いやすい。

第九話　魔法少女ルイズ☆バクハ（後書き）

ハロウィンですね。日本で過ごしていると気付いた時には終わっている、なんて事もよくあります。

お気に入り登録や感想、お気に入りユーザー登録ありがとうございます。

あれですよね。自分が好きな小説の作者さんが自分の小説を読んでいる、なんて知った瞬間には大歓喜でございます。

お気に入り登録してあるーっ！　なんて一人でニヤニヤした経験がある方も他にもいるのではないでしょうか。

まぁ、皆さんそうだと思いますが、読み専門の人でも登録してくれてたりしたの発見したら嬉しいんですけどね！

まぁ、そんな話でした。

最後に一言。

Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！（ご馳走（かんそう）くれなきゃ悪戯するぞ！）

冗談です。それでは。

第十話　烈風式訓練法

少し予定に狂いはあったが、ヴァリエール家に来た当初の目的通り、僕は烈風のカリンこと公爵夫人カリーヌに鍛えられていた。

毎朝早朝からトレーニング、休憩ついでにご飯を食べた後は昼までメイジには体力も必要だと言われ、走る、走る、走る、走る。

昼からは実際に魔法の使い方を学ぶ訓練。実際に使ったり、戦い方を頭に叩き込まれたり。

そしてティータイムを挟んだ後には実戦形式という名のイジメ。烈風のカリンとガチバトル。

此処は何処の軍隊ですか。僕は軍隊になる為に育てられているんですか。

僕は毎日ボロボロになるまで扱かれ、けれど全く筋肉がつかないという悲しい運命に立ち向かいながら頑張っている。

ちなみにカリーヌは同じ訓練を密度を増やしてやっているが息一つ乱さない。たぶん――いや、絶対に化け物だ。

「今日はコレにて終了にします」

そんな辛く長い一日が今日も終わった。

カリーヌは一言告げて去っていく。

いきなりスクウェア・スペルが使えるというチートな能力を持っているはずなのに全く勝つ事ができない。

てゆーか何故僕は訓練なんてしているのだろう。

疲れる事は嫌いだ。魔法も疲れるから将来的にも極力使わないように済ませたいと考えている。原作とか戦争とか他人任せのつもりでいる。

それなのに神様にチート貰ったけど努力はするぜ、的なオリ主以上に扱かれているのは何故なんだ。

「……楽してズルして他人を犠牲にして、のんびりと生きていきたい」

「何、最悪な独り言を言ってんのよ」

僕の独り言に返事が返ってきた。

幼女、ルイズ。虚無の担い手。

ピンク頭のルイズが芝生に倒れ込んでいる僕を上から見下ろしていた。

「やぁ、裏切りピンク。何か用ですか？」

「誰が裏切りピンクよっ！？」

今日もルイズは元気に突っ込む（性的な意味ではない）。

「あんたが死んでないか確認しに来てやったのよ！　勘違いしないでよ？　し、しし心配なんてしてないんだからね！？」

そしてツンデレた。

家族や目上の人以外には素直に接する事ができないとか残念な子だなぁ。

友達ができそうにない。

僕は自分の事を棚にあげてルイズに同情する。

「……何よその眼」

「友達できそうにないなぁって同情してる眼」

「あんたに言われたくないわよッ！」

ぷんすかぴー。ルイズは怒った。失礼な（僕程ではない）事を言いながら僕の身体をおもいっきり蹴った。

骨、折れました。

☆

「……ごめん」

「……」

「悪かったわよ」

「……」

「ごめんなさい」

「……」

ベッドに寝転ぶ僕にルイズは何度も何度も頭を下げる。

けれど僕はそんなルイズを睨み付けるだけで何も言わない。

あの後、僕はメイドさんに運ばれて、ヴァリエール家専属の水メイジに治療されて完治した。

まさか始めての大きな怪我がルイズからの攻撃とは思わなかった。

カリーヌに四肢をもがれるか、威張りん坊な貴族に不意打ちされるか、原作に巻き込まれて敵にやられるか、戦争に無理矢理参加させられて敵国に攻撃されるか、そのどれかだと思っていたが、幼女に骨折られました。

僕の身体が貧弱なのか、ルイズの筋力が異常なのか。

ちなみに実は別に全く怒っていないのだが、いじける女の子って可愛いよね、なんて理由で放置している。

「わ、私だってお母様にたくさん叱られたのよ？」

半泣きで、でも意地を張りながら、僕から視線を反らしつつ、ルイズは言った。

お姫様以外のはじめての同世代の友達（僕にとっては玩具）に嫌われた、なんて幼女らしい事でも思っているのだろう。

それが全く検討違いの勘違いとも知らずに落ち込んでいるのだろう。

僕はそんな君の様子を見ているのがすっごく楽しいですにゃー。

「……ねぇってば」

粘るルイズ。拗ねるフリをする僕。

烈風さんの訓練で疲れた心身が癒されていく感覚がする。

人に意地悪な事をしていると、僕は非常に楽しい気持ちになる。

ふふふ、でもそろそろ飽きてきたし許してあげようかな。

「ごめんなさい」

「……いいよ」

「ほ、ほんと！？」

僕が許すと、彼女は意地を張るのも忘れて嬉しそうに微笑んだ。

「うん、お願いを聞いてくれたらね」

「お願い？」

僕の言葉を聞いてルイズは少し嫌そうな顔をする。

どうせ普段の僕を考えて、どうせ悪いお願いでもしてくるのだろうとか考えているのだろう。

実は何も考えていないんだけどね。

さて、どうしようか。

悪戯とかは別にやりたい気分でもないし、公爵家の三女の権力を利用してやりたい事なんてないし、あ、そうだ。

「今度お姫様に会わせてよ！」

「……アンに？」

ルイズは何を企んでいるのだろうか、と僕を疑いながら見つめる。

フランシアを爆殺して、と悩んだが僕はこちらを選択した。

純粋に、温室で育った白百合を真っ黒（腹黒）に改造なんてのもいいし、普通に騙しやすそうだから騙して何かさせるのもいい。

アホリエッタなら良い玩具になる。

僕は今からワクワクしていた。

「いいわ。私からアンに言っておいてあげる。アンがお願いすれば王宮にいる人達も断りきれないでしょうし」

心の中でガッツポーズ。

新しい玩具が手に入るぞー。

そして運が良ければ若い頃のマザリーニも弄り回せるかもしれない。

「た・だ・し！　絶対に粗相がないようにね！」

「僕はタダシじゃなくてアリアですよ？」

「名前じゃないわよ！　てゆーかタダシなんて変な名前の人間いる訳ないでしょ」

日本に山ほどいます。

「ルイズ、人の名前を変だなんて失礼だよ？　タダシさんに謝りなさい」

「ご、ごめんなさい――って、だからタダシって誰よ！！」

「タダシさんはね、みんなの心の中にいる妖精さんなんですよ。悪い事をしようと罪悪感という名前の痛みを与え、悪事を未然に防いだりしているんのです。そんな素晴らしい心の妖精さんなんです」

「そうだったのね……。ごめんなさい、私ったら――」

「もちろん嘘だけどね」

「し、信じ、別に私最初から信じてなかったんだから！」

何故ルイズはこんなに扱いやすいのでしょうか。

僕は心の中で少し呆れる。

まぁ、幼女だから仕方ないのだが、純粋ゆえに人を信じやすく騙されやすい。

僕にとっては面白いからいいけど、将来困るだろうなぁ。俺俺詐欺とか引っ掛かりそう。

「絶対なんだからね！」

きゃんきゃん吠えるルイズを放置して、僕はベッドに潜り眠る態勢になる。

「おやすみなさい」

「聞きなさいよっ！！」

とりあえずアホリエッタに会うのが楽しみです。

今から期待に胸が膨らむ。気のせいか物理的にも膨らみそうな気がする。

「ちょっと、聞きなさいよ！」

ヤダ。

目を閉じて、ルイズの喚き声を子守唄にしながらだんだんと意識が遠退いていく。

良い夢見れますように。

第十一話　手紙のやり取り

『アリアへ
元気ですか？
ヴァリエール家でイジメられたりしていませんか？
なんて一応言ってみるけど、お兄ちゃんはアリアがヴァリエール家の人達をイジメていないか心配です。
ちゃんと手加減していますか？
昔メイドが号泣しながら辞職した時みたいな鬼畜な行為はしていませんか？
ヴァリエール家みたいな大貴族に喧嘩を売って、ルチアーノ家が取り潰しになるような事は勘弁してください。
お兄ちゃんは普通に家を継ぎたいです。
クイントより』

『愛しのダーリンへ
私もダーリンに会えなくて寂しいけど、ダーリンの写真で自分を慰めながら今日も元気に過ごしています。
イジメなんてとんでもない。
ヴァリエール家の人達はとても良い人達です。
でもダーリンみたいに鞭で調教したりしてくれないのは不満です。
身体が疼いてしまいます。
今度の休暇には是非私を辱めてくださいまし。
それとメイドの件ですが、あれはあのメイドが私のお気に入りのぬいぐるみを間違えて処分してしまったからです。
私は悪くない！　私は悪くない！
貴方の奴隷より』

『アリアへ
あんな手紙を学院に送るとはどういうつもりですか？
普通に教室で読んでいたせいでクラスメート達に見られて、誤解され、ドン引きされてしまいました。
しかも最近女子生徒の視線が冷たいです。
お兄ちゃん泣きそうってゆうか、毎日枕を濡らしています。
何が言いたいかわかりますね？
お前次に会った時は容赦しないからな！
それとメイドの件はどう考えてもやり過ぎでした。
全裸で屋敷の庭に立たせるとか何を考えて生きてるんですか。
クイントより』

『おにいさまへ
ありあまだございだからよくわかんなーい。
ありあより』

『アリアへ
ぶち殺すぞ。
クイントより』

『お兄様へ
冗談ですよ。
ちょっとしたハルケギニアンジョークです。
お兄様の御学友の方達には個別で誤解を解く種の手紙を送っておきました。
この手紙がお兄様の元へ届く頃にはお兄様の誤解も解けているは

ずです。
安心して学業に励んでください。
メイドの件は僕は悪くないです。
むしろあれぐらいで済ませてやった事に感謝してほしいぐらいです。
本来ならオークの鬼の巣に入れて、■■■を■■■■■■■に■■■■■■■■■と■■■■■をして■■■■■ぐらいしたかったです。
アリアより』

『アリアへ
お前次ふざけたらマジぶっ殺すからな。
誤解の件はどうやら解けたみたいです。
でも少し質問があります。
何故学友達は揃いも揃って泣きながら謝ってきたのですか？
あのエレオノールすら泣かせるなんて一体どんな手紙を送ったのですか？
お兄ちゃんはアリアが怖いです。
それとメイドの話はもうやめましょう。
いえ、お願いだから聞かせないでください。
実際にやっていなくても怖いです。
クイントより』

『ヘタレなお兄様へ
了解いたしました。
誤解が解けたみたいで良かったです。
どんな手紙を送ったか、ですか？
人間誰でも知られたくない秘密があるというものです。
それを書いて、もしこの事をバラされたくなかったらクイントに

は逆らうな、と少しお茶目な冗談を書いただけです。
お兄様は何も気にせず奴隷（二重線で消されている）ではなく御学友をこき使って（二重線で消されている）ではなく御学友と仲良く楽しく過ごしてくださいませ。
メイドの件了承しました。
アリアより』

『アリアへ
何故調べたのか、どうやって調べたのかは聞きません。
だからその秘密は全部頭の中からも消滅させてください。
最近クラスメートどころか先生達まで怯えていて、誰も話し掛けてくれません。
自分から話し掛けたら泣きながらご機嫌をとろうと頑張ってきます。
こんな恐怖政治の暴君生活はもう嫌です。
一刻も早く戻してください。
それと人のクラスメートを奴隷扱いしたり、こき使うとか書いたりはやめてください。
それに消した後がまる見えで逆に怖いです。
普通の学院生活を返してください。
クイントより』

『我儘なお兄様へ
御学友の件了承いたしました。
どうせなら教員も、と思ったのですが、それもお兄様には余計なお世話だったようですね。
全て解決しておきます。
あと奴隷の件ですが、あれはまだ五才ゆえに知識不足で間違えた

だけです。
勘違いなさらないでください。
お兄様が楽しい学院生活を送れる事を祈ります。
アリアより』

『アリアへ
ありがとうございました。
少し違和感はありますが、少しずつ元の学院生活が戻ってきているようです。　本来ならお礼は言う必要などないのでしょうが、一応伝えておきます。
それとお兄ちゃんの為に行動してくれた事自体は嬉しいです。
それもありがとう。
あと知識不足とか言っていますが、アリアの本性や知識量は知っているので、嘘だとバレバレです。
嘘をつくならもっとまともな嘘をつきましょう。
楽しい学院生活を送ってほしいなら何もしないでください。
クイントより』

『お兄ちゃんへ
妊娠しました。
アリアより』

『アリアへ
相手は誰ですか？
何処のクソ野郎ですか？
騙されてるに決まっています。
今すぐ相手を教えなさい。

すぐに処刑してやる。
パパより』

『お父様へ
あれ？　お父様に届いてしまったみたいですね。
クイントお兄様です。
アリアより』

『アリアへ
父上から貴様がアリアをたぶらやしたのか、今すぐ実家に戻って来いという手紙が来ました。
どういう事ですか、何をしたんですか？
とりあえずお前も今すぐ実家に帰ってこい。
クイントより』

『アリアへ
先週の家族会議ではやってくれましたね。
もう少しでお兄ちゃんは切り刻まれてグリフォンの餌にされるところでした。
今でも殴られた頬が痛いです。
何故遅れて来やがったのですか。
クイントより』

『お兄様へ
親父にも打たれた事ないのに（笑）
アリアより』

『アリアへ
おい、なんかムカつくからやめろ。
クイントより』

『お兄様へ
二度も打った（笑）
アリアより』

『アリアへ
殺す。絶対殺す。
クイントより』

『お父様へ
アリアはお兄様に殺されるみたいです。
今までお世話になりました。
お父様やお母様の事大好きでした。
アリアより』

『アリアへ
父上に告げ口はズルイと思います。
おかげでお兄ちゃんは今ベッドの上に一週間います。
クイントより』

『お兄様へ

お大事に。

アリアより』

『アリアへ

他に言う事ありませんか？

クイントより』

『お兄様へ

始祖ブリミルの使い魔ガンダールヴはエルフの女性だったそうです。

アリアより』

『アリアへ

そんな事は聞いてな（二重線で消した後）えっ、本当ですか？

謝罪を求める気持ちもありますが、それよりそっちの方が気になります。

クイントより』

『お兄様へ

ごめんなさい。

アリアより』

『アリアへ

許します！　だからその話を詳しく！

クイントより』

『お兄様へ
最近暑いですね。
アリアより』

『アリアへ
ガンダールヴ詳しく。
クイントより』

『お兄様へ
ググれカス。
アリアより』

『アリアへ
兄にカスとか殺すぞ。
クイントより』

『お兄様へ
反省が足りないようなのでお父様に報告させてもらいます。
アリアより』

『可愛いアリアちゃんへ
海より深く、山より高く反省しております。
だから父上に報告だけは勘弁してください。
ハルケギニアよりも広い心を持つアリア様の慈悲に期待しています。

お兄ちゃんまだ死にたくないです。
クイントより』

『アリアへ
今、エレオノールに頼んで代筆してもらっています。
お兄ちゃんは腕すら満足に使えない状態です。
もうこれ以上は勘弁してください。
クイントより』

『お兄様へ
大丈夫です。
お兄様のように面白い玩具（二重線で消してある）素敵な兄の死を、僕が望んでいるはずがありません。
お父様にはちゃんと反省していると伝えておきます。
アリアより』

☆

「ふふっ」

「お嬢様、何を笑っておられるのですか？」

「ちょっとお兄様からの手紙を見ていたのですよ」

「なるほど、そういう事でしたか」

「お兄様って本当に面白いよね」

「肯定です。ちなみに奥様曰く若い頃の旦那様にそっくりなようです」

「ふーん」

そんなお話。

第十一話　手紙のやり取り（後書き）

トリステインはベルギー、ゲルマニアがドイツ、ガリアがフランス、アルビオンがイギリスでしたっけ？

とりあえずハルケギニアはエルフだろうと翼人だろうと話せる亜人含めてみんなフランス語に似た言葉で統一されているイメージ。

ちなみにうさぎさんの家名のルチアーノはトリステイン貴族なのにイタリア系です。由来はご存知ラッキー・ルチアーノです。でもルチアーノ伯爵家には一切関係ありません。

アリアは楽器メーカー。クイントはラテン語を調べてたからだったかな。アルベルトはあの有名なアインシュタイン。シルビアは自動車で半分正解、Ｊａｎｎｅ　Ｄａ　Ａｒｃの曲名でパーフェクト。フランシアも同じくラテン語です。

基本的にその場の思い付きで名前作るのでクイントとかアルベルトとかフランシアは正直名前がすぐに出てきません。今回クイントくんの名前を出す時も第一話見返して書きました。

アリア・サマー、オニイ・サマー、オトウ・サマー、オカア・サマー、メイ・ド・サンとかにしておけば良かったかも。

第十二話　アンアンマジアンアン

「僕と契約して腹黒少女になってよ！」

「えっ」

「アン、こいつの言葉は８割無視していいや」

「はちわり？」

「ほとんどって事！」

「なるほど」

酷いなぁ。今から育てておいたらトリステインがトリスタニアの街を歩けば必ず裏切り者にぶつかるなんてアホな国になる事はないのに。

☆

アンリエッタは６才らしいバカな――げふんげふん、相応の知識を持ったただの子供だった。貴族の箱入り娘との違いは服装の豪華さぐらいの何のオーラもない普通の子供だった。

髪も地味だし。

頭の良さといい、風格といい、派手さといい、見た目の美しさといい、ルイズの方がどう見てもお姫様っぽい。

虚無の血はヴァリエールに濃く流れちゃったみたいだから、始祖ブリミルの血を引くっていう王家として重要な要素も薄いし、貴族連中が裏切りたくなる気持ちもよくわかる。

だって王様が死んだらマリアンヌは食っちゃ寝税金で贅沢生活で仕事しないし、アンリエッタは多国の王子にふぉーりんらぶで王族の事を何一つ理解していない母親そっくりのダメ子さんだし、どう考えてもトリステインとか崩壊寸前じゃねぇですか。

てゆーかマザリーニいなかったら確実に滅んでいたよ。

てゆーかアンリエッタはウェールズの気持ちを全く理解せず見た目だけそっくりの偽物の死体に着いていくし、それが終わったらすぐにサイトに乗り換えるし、どう考えても王族的にアウトじゃないだろうか。

「アンアンマジアンアン！」

「アンアン？」

「アン、無視でいいわ。下手に関わったらアンが汚れてしまうわよ？」

ルイズが王宮に来てからひど過ぎる。いつもはもっと懐いてるくせに。

――はっ、まさかアンリエッタに！？

「この泥棒猫！　ルイズは私のモノよ！！」

「えっ？」

「ちょ、な、ななな何言ってんのよ、あんた！！」

「嘘だよ、バーカ！！　ごはっ――」

嘘発言を聞いた瞬間、ルイズのブラジリアン・キックが炸裂する。

ま、魔法使えよ。最近〈格闘少女ルイズ☆マジカ！？〉になっちゃってる気がしたりしなかったりするんですけど。

これでガンダールヴの力もゲットしてゼロが使い魔になったら、格闘も武器術も魔法（虚無）も使いこなせる最強メイジになれるね。

「やったねルイズちゃん！　家族が増えるよ！！」

「やめて！　――てゆーかいきなり何の話よ！？」

今日もキレの良いツッコミありがとうございます。

僕達のそんなやり取りを見て、アンリエッタは目を丸くする。

「あ、姫様――じゃなくて、アン、ごめんね」

そんな様子を見てルイズは僕から視線を反らし、アンリエッタに告げる。

「ううん、ずいぶん仲がいいのね。もしかして昔お母さまが言っていたユリ？　ってやつかしら？」

「ち、ちちちち違うわよ！　てゆーかコイツ男よ！！」

５才児に何教えてんだマリアンヌ。

「そうなの？　ならもしかしてコイビト？」

「もっと違うわよ！！」

もっとってなんですか、もっとって。僕が女でルイズと百合の方が有り得るという事なのでしょうか。

――えっ、去勢されるの？

僕はルイズから１０歩、間を取るように下がる。

「ちょ、なんで距離を取るのよ！？」

「まさか君がフランシアと同じ趣味だったとは……」

予想外にも程がある。サイトと恋愛関係にならないじゃないか、なれないじゃないですか。主人と使い魔の憧れるような信頼関係がアウトじゃにゃーですか。

「ち、ちち違うわよ！　私はストレートよ！　普通に男の子が好きだわ！」

慌てて近付きながら誤解（？）を解こうとするルイズ。けれど僕は近付かれるとフランシアの時と同じようにルイズが近付いた分だけ後ろに下がる。

「大丈夫です。信じていますよ。だからそれ以上近付かないでください」

「信じてる態度じゃないじゃない！」

「これがお母さまが言っていらしたシュラバってヤツかしら？」

何教えてんだマリアンヌ第二段。

あと、修羅場は違います。

「ちょ、アン！　それだと私が浮気したみたいじゃない！」

「うわき？」

「それは――って、姫様にそんなの教えられないわ！！」

「えー」

ぎゃーぎゃー喚くルイズと好奇心旺盛な子供のアホリエッタを置いて僕はお姫様の部屋から出る。

ルイズが一緒にいると思わずルイズを弄ってしまうし、今の純粋培養アンリエッタに僕が関わるとルイズが言ったように汚れ――エロワードを使いこなす淫乱お姫様になってしまうから今回はこれぐらいにしておこう。からかいがいが全然ないし。

原作ぐらいになってから、女王様になってからぐらいに弄りに行こう。

あ、お母様とは違って女王様プレイとかはしないんだからね！

☆

あれ？　アイツマザリーニじゃね？　未来の鳥の骨じゃね？　超ウケるんですけどー（笑）

王宮を探索するという子供っぽい（子供らしい）遊び（もちろん悪戯もついでに）をしていたら、若き日のマザリーニが前方から歩いてくるのを発見した。

顔を見た瞬間吹き出してしまったのは仕方ないと思う。

彼は今時期教皇とか噂になっている人物である。その為下級貴族なんかは媚びを売ろうとして必死乙である。

上級貴族とかは他国の人間だから警戒しているみたいですけどね。

ちなみにどうせ今の王様が崩御（死ぬって事）したら教皇選抜的なヤツやるから帰って来いって言われてもトリステインに残って、トリステインの為に自分を犠牲に頑張り、そして王家の為、国の為を優先して貴族を蔑ろにする＋他国の人間が事実上トリステインの事を支配してるみたいな感じになって、トリステイン乗っ取りを考

えてるとか疑われて、今媚び売ってる下級貴族に加えてトリスティン国民にすら嫌われるんだけどね！

「ごほん、私の顔に何かついていますかな？」

そんなマザリーニさんはずっと自分を見てくる人間、しかも何故か笑っている子供である僕を不思議に思い、声を掛けてきた。

「目と鼻と口と眉毛と髪と――」

「いえ、そういう事ではありません」

わかってるよ。冗談だよ。ハルケギニアンジョークだよ。のっぺらぼうなんてハルケギニアにいないよ！

「失礼ですが、貴方は？」

「あら、失礼。私ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールでございますわ、マザリーニ殿（Ｃｖ：釘宮）」

僕が１０８ぐらいあるかもしれない特技の一つ声真似を使いながら優雅に一礼すると、彼は苦笑を浮かべる。

「ほう、ヴァリエール嬢でしたか。確かに声は同じですが、確か彼女はピンク色の髪でしたがのう」

「ええ、まぁ、嘘ですからね」

マザリーニは僕の嘘発言を聞くとぽかーんと間抜けな表情で僕を見る。

知ってるなら最初から言っておいてよ。

「ルチアーノ伯爵家のアリアです。よろしくお願いします、マザリーニ殿」

「あ、そういえば私めには大切な用事があったのでした。これで失礼――」

「待ちやがれですよ」

僕の名前を聞いた途端に態度が急変したマザリーニはそのまま僕から逃げていこうとするが、そのまま逃がすはずがなく腕を掴んで引き止める。

「何故名前を聞いた途端に……失礼じゃないですか？」

僕が睨むとマザリーニは露骨に嫌な顔をする。うわぁ、目を付けられたとか思ってるのだろうか。

「うわぁ、目を付けられた」

思ってんのかい。えっ、何、僕って王宮まで名を轟かせる有名人？

「お願いしますから、勘弁してください。お金なら出しますから！」

ヤンキーに絡まれた中坊か！　そして僕は肩がぶつかったとかいちゃもんつけてきたヤンキーか！

「で、では仕事があるので失礼します！」

僕が呆れれながら手を離すと、マザリーニはその隙を付いて僕に重い袋を手渡して去っていった。

たたたたんたんたんたーん。

アリアはマザリーニを倒した。

経験値３００と金貨１００エキューを手に入れた。何処か虚しい気持ちを手に入れた。

後日、マザリーニが５歳の子供にカツアゲされた話をトリステイン王にして、見事に笑われたが、その子供の名前を聞くと笑うのをやめたとかなんとか。

第十二話　アンアンマジアンアン（後書き）

トリステイン王とかいつ死ぬのだろう。適当に１０歳の時でいいか。６年間王不在ぐらいでいいか。

狂愛は調べるのが面倒だった。

第十三話　Would you lend me your underwe

どうも、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。貴族の家の三女やってます。最近の日課はアリアに虐められたウチの使用人を慰めてあげる事です。今日もたぶん何かしらやらかしているでしょう。

「ぐすっ……、うわーん！！」

噂をすれば影がさす。私が屋敷の中を歩いていると、目の前に顔を鼻水だらけにしながら号泣しているメイドがいた。

確か彼女はヴァリエール家の使用人になったばかりだ。名前はいちいち覚えていない。たぶん先輩達にアリア関係の面倒事でも押し付けられたのだろう。

群れの中で一番弱いものを囮に、わざと狼の前に差し出して逃げるという手段はとても賢いと思う。犠牲を最小限に抑えるのは生き残る為に必要な事だ。

ヴァリエール家のメイドは狡賢い草食動物なようです。サバンナに放り込まれても生き残れるでしょう。

さて、私はそんな犠牲にされた、狼に襲われた哀れな新人メイドをそのまま放置して行く事ができるほど図太い性格はしていない。だからいつものようにハンカチを差し出しながら声を掛けた。

「どうしたのよ。アリアに何かされたの？」

「……うっ、ぐすん」

新人メイドはハンカチを受け取ると、鼻水塗れの顔を拭い、涙を止めようと顔に力を入れ、瞼をぎゅっと閉じる。

うん、流石に他人が鼻水をしたハンカチは洗っても使いたくないからあのハンカチはこのメイドにあげよう。

「実は、わ、わたし、……ぐすっ、お洗濯係の一人に任命、ひっく……されて、それで、アリア様の部屋に洗濯……ぐすん、……ものを取りに行ったんです。そ、そしたら……ううっ、アリア様が――」

メイドが涙ながらに話してくれた事を要約するとこうだ。

アリアの部屋に洗濯物を取りに行った→そしたらちょうどアリアが部屋にいた→だからアリアに洗濯物の場所を聞いた→そして教えてもらってそれを受け取って帰ろうとした→すると下着がない事に気付いた→だから洗う予定の下着の場所を尋ねた→そしたらアリアが豹変し、新人メイドはついさっきまでお仕置きとして泥塗れの靴を舐めさせられていた。

「流石アリアね。サディスティック過ぎるわ。むしろアリア過ぎるわ」

「ううぅ……」

私は話し終えてまた泣き出したメイドを気遣いながらアリアの鬼畜っぷりにドン引きした。

まだ年若いメイドにどんだけマニアックなプレイをさせてんのよ！

「とりあえずね、アリアの洗濯物とかはルチアーノ家のメイドのフランシアにやらせればいいわ。てゆうか貴方（ヴァリエール家のメイド）はやらなくていいのよ。身の回りの世話は食事とか以外あの子がやるから」

「……ぐすっ、はい」

「それに基本的にアリアに関しては上手く関わらないようにしなさい。呼び止められたら用事があるとか言って。まぁ、そこら辺は先輩に聞きなさい」

「わかり、ました……ひっく、ありがとうございます！」

「ほら、仕事に戻りなさい」

「はい、……ぐすっ」

私の言葉を聞くと、メイドはふらふらと走り去っていった。

何が原因かはわからないが、今回は先輩メイド達の新人メイドへのアリア関係の教員不足だったようだ。知らなかった故にやらなくていい事をやろうとしてしまい、結果逆鱗に触れた。

あの新人はこれに懲りてもうむやみやたらにアリアに近付かないだろう。

「しかし、下着ねぇ……。下着、下着、――下着！？」

私は唐突に気付いてしまった。

アリアの下着。普段は見えない男性と女性で全く別の形であるアレ。

アリアは、彼は一体どちらの下着を付けているのだろうか。性別的に考えれば男性物だが、容姿や普段の服装、それにあの子の母親の趣味を考えると女性物なのだろうか。

気になる。乙女として気にしてはいけないモノではあるがすっごく気になる。

てゆーか下品ではあるが、私は実際にアリアが男である証拠を見た事がない。

もしかしたら男勝りな女の子、もしくは男に憧れる女の子、それか心は男の子な病気なのではないだろうか。

他にもフランシアを警戒して男と言っていたり、悪い虫が付かないように男と言っていたり、そして嘘つきのアリアの事だから性別すらも冗談半分で偽ってる可能性がある。

「だってそうよね。普通に考えればあんなに可愛い子が男の子なはずがないじゃない！　きっと何か事情がある女の子なんだわ！　ハッ、もしかして女の子が好きな女の子だから男の子だと言って気を惹こうとしてるのかもしれないわ。いえ、きっとそうなのよ！　そして普段から何かと私に意地悪してくるのも私に構ってほしいから、私と少しでも話していたいからに違いないわ！　そ、そそそうだったのね、アリア！？」

耳まで真っ赤に染めながら私は叫ぶ。

気付いた。気付いてしまった。きっとアリアは私にいけない感情を抱いてしまっているんだわ。

ああ、私ってなんて罪作りな女なのでしょう。同性すらも惚れさせてしまうなんて。

でもダメよ、ルイズ。私には子爵様という口約束だけど親が決めた許婚がいるのよ！？

ああ、私って本当にいけない娘……。

「どうしたのですか、ルイズ？　一人で真っ赤な顔でくねくねして、何かの遊びかしら？」

「ち、ちぃねぇさま！？」

私は自分の考えに長く没頭していたらしい。背後からちぃねぇさまが話し掛けてくるまで、近付いてくるまで全く気付いていなかった。少し恥ずかしい。

「あ、あのね、ちぃねぇさま！　えっと……、そうそう、アリアの下着ってどちらなのでしょうね！？」

わ、私ってば何言ってるのよ？

さっきまでの妄想を語る訳にはいかず、咄嗟に私が出した話題はなんとも変態的な話題だった。

……どうしよう。ちぃねぇさまにアリアの下着を考えて妄想して

た変態とか思われるかもしれない。

私はちぃねぇさまに嫌われてしまった自分を想像して少し落ち込む。

「うふふ、ルイズ。わからないのなら確かめればいいのよ」

「……確かめる？」

「ええ。あ、私はそろそろ行くわね」

「あ、はい」

ちぃねぇさまはいつも通りの素敵な笑顔で私にアドバイスすると、すぐに去っていってしまった。

確かめる――うん、確かに気になったら確かめてみるのもありね。ううん、ちぃねぇさまがおっしゃったんだから、それがきっと当然なんだわ。

私は勝手に解釈して勝手に納得する。

けれどどうやって確かめればいいのだろう。普通に聞けばおそらく私も延々と靴を舐めさせられてしまうはずだ。

私にはそんな趣味はない。だから少し慎重にならなくては。

「あ、そうよ！　その手があったわ！」

私は突然閃いた。この手ならアリアに怪しまれる事なく下着の種

類が調べられるわ。

そうと決まったら早速行かなきゃ。

☆

「ねぇ、アリア。どうも私の下着がまだ洗濯中で使えるのが一つもないのよ」

早速アリアの部屋に向かった私はアリアがいる事を確認すると、挨拶もそこそこに本題に入る。

「だからあんたの下着貸してくれない？」

「えっ？」

言った。私は言ってやった。これなら怪しまれたりなんかしないはずだ。

アリアは突然の発言に困惑しているようだが、怪しんでいる様子はない。

流石私ね。策士過ぎるわ、ルイズ。

「……まぁ、いいですけどね」

そしてアリアは部屋の中にある箪笥を漁り始めた。

「はい、どうぞ」

それからしばらくして、アリアが取り出した下着は女性物だった。しかも少し、その、え、えっちな感じの。

う、うわぁ……、この娘、こんなにえろい白の下着付けてるんだ？　い、今もあの服の下に？　もしかして真っ赤なのとか、真っ黒のとかもあるのかしら？　いえ、やっぱり白オンリーかしら？

私はごくりと喉を鳴らす。

「あ、そういえば違う箪笥に下着があったの思い出したわ！　あ、あはは、あはは、じゃ、じゃあね！」

そして恥ずかしくなった私は唐突に別れを告げ、走り去ってしまった。

あんなにセクシーなのを5歳のくせに付けてるなんて流石エロアリアだわ！　ぺたんこなのに妙な色気があるのはそのせいだったのね！　わ、私もお母様に新しいの買ってもらわなきゃ！　一応想ってくれているアリアにもあんな子供っぽい下着じゃ失礼だし！

私はこれからの目標というか、買い物予定というか、とりあえず何かを考えながらお母様の元へ直行した。

☆

「おや、お嬢様？　私の下着が何故かゴミ箱に入っているのですが。言って下されば下着どころか中身まで見せて差し上げますのに。真っ赤な顔で私の下着をオカズに必死にシコシコなさっていたのですか？」

「ぶっ飛ばすですよ淫乱メイド。ルイズが下着を借りに来たから君がわざわざ僕の箪笥に仕込んでおいたそれをルイズに渡そうとしただけです。まぁ、ルイズは借りずに真っ赤な顔で走り去っていってしまったので捨てましたけど」

「あら、そうでしたか。残念ですわ」

アリアの下着の真相は闇の中。

第十三話　Would you lend me your underwear

明日用に予約投稿しようとしたけど面倒だから直接投稿。

第十四話　うさぎが二羽（二匹）

母が来た。お母様が来た。サディスティック星出身である事が疑いようもない母親がやって来た。各所で恐れられている悪魔がやって来た。いろんな噂がある伯爵夫人がやってきた。僕は転生してルチアーノ家に生まれたから性格は似ているはずがないのに、よくそっくりと言われる女王様がやって来た。

さっき使用人室を覗いたら長年勤めているらしい使用人達が辞表を書こうとしていた。厨房を覗いたら『今すぐ最高級の食材を揃えろ！　機嫌を損ねたら死ぬぞ！』とコック長が騒いでいた。ヴァリエール公爵の部屋に行ったら虚無の曜日なのに仕事に行ってくると出ていってしまった。

僕のお母様は一体何をやらかして生きてきたのだろう。何故こんなに恐れられているのに嫌われている訳ではないのだろう。不思議だ。

「あんたそれ自分に言ってるの？」

隣にいるルイズに僕の考えを伝えたら鼻で笑われた。

「失礼だよルイズ。僕はお母様レベルの事はまだやってないよ」

「まだ、ねぇ？」

あ、そういう意味ではない。これからやるという意味ではない。勘違いはやめてほしいのでございますよ。

「アリアの彼氏になる人は大変よね。そう考えるとルチアーノ伯爵は勇者だわ。母親と娘がこんなのなんて」

「……僕は男には興味ないです」

「そ、そそそうね！　そうだったわね！　じ、冗談よ、冗談！　そんなに不機嫌そうな顔しないでよ」

誰だって薔薇男呼ばわりされたら不機嫌面になるよ。それにこんなの呼ばわりもひどいと思うです。

僕は何故か真っ赤なルイズをジトーっと睨み付ける。

「あらあらあら、仲が良いのね。まるで昔の私とアルベルトのようだわ」

そんな僕達の様子を、感性が狂ったお母様が勘違いしながら話し掛けてきた。

この人が言う恋人関係、しかも伯爵夫婦とかどう考えてもサドマゾ、S&M（奴隷《スレイヴ&マスター》）でしょうね。お母様がキョドる姿なんて想像できないからルイズが僕の旦那様？　もしそんな可能性があるとしても普通逆じゃないだろうか。

僕はルイズの鳶色の瞳に自分の紅色の瞳を合わせる。

「ななななな、なな何よ！？」

「落ち着けよ、ルイズ（Cv：日野）」

「……誰の声よ」

拗ねた感じのサイトの物真似をしてみるとルイズはようやく落ち着いてくれた。まだ出会う前だけど絆が繋がっているのだろうか。運命的な感じで。

「ルイズの事を大切に想う（巨乳好きのくせにルイズＬＯＶＥだし）、強くて（ガンダールヴだし）、変態で（エロ犬だし）、浮気性で（よく目移りするし）、ちょっと変わった人間（異世界から召喚されるし）？」

「『ルイズの事を大切に想う（数少ない友達）、強くて（最年少スクウェア）、変態で（えっちな言葉を使う）、浮気性で（ルイズ以外もいじめる）、ちょっと変わった人間（性別を偽っているｏｒ女装してる）？』ですって？　あんたの事聞いてるんじゃなくて、さっきの声の事を聞いたのよ！　そりゃあ大切に想ってるとかは嬉しいけど……」

何言ってるのでしょうか、この娘。

僕は溜息を吐きながらお手上げとばかりに両手を上げる。

「はぁ、久しぶりに会った母親よりも恋人といちゃついてるなんてひどい子ね。お母さんなんだか寂しいわ。……この泥棒猫！　アリアは私のモノよ！」

「アリアと同じ事言ってる……」

「ウチの母親がごめんなさい」

突然豹変したお母様と僕を交互に見て感心するルイズに、僕はやる瀬ない気持ちで頭を下げる。

僕はいつもこんな感じなのか。僕と同じように自由に振る舞っている、自分の感情のままに生きているお母様を見て、僕はなんだか恥ずかしい気持ちになった。

「それにしてもミス・シルビアはアリアそっくりですね。まるで姉妹みたいですわ」

「あらあら、シルビアでいいのよ？　どうせアリアもヴァリエール家の年上の人間なんて呼び捨てでしょうし。あ、もしくはお母様とか！」

「お、お義母様だなんてっ！！！」

ルイズに若いと遠回しに褒められて喜ぶお母様。そしてそんなお母様の言葉に何故か赤面してくねくねし出すルイズ。

最近この子、様子がおかしいです。フランシア曰く、よく場所を選ばず一人でくねくねしてるらしいし。

てゆーかお母様。僕は公爵は公爵、カリーヌは心の中以外では先生と敬意を払った呼び方をしてるですよ。エレオノールとカトレアは呼び捨てですけど。

「……ねぇ、ルイズちゃんどうしちゃったの？　鞭で叩いたら直る？」

「知らにゃーですけど、鞭は勘弁してあげてほしいです」

何処からともなく鞭を取り出すお母様を見てドン引きしながらも流石に止める僕。

原作前にルイズがドMに調教されてしまっていたとか勘弁してほしいです。てゆーかこんな人に似ているって言われる僕って一体何なんだろう。最近自重しているのに。

「あら、残念。ルイズちゃん可愛いから楽しめそうだったのに」

流石、本物の女王様にSMの女王様プレイで調教したドS。女の子でも関係なく、子供だろうと容赦なく、大貴族の娘だろうと躊躇なく、息子の友達だろうと例外なくイけるのですか。

見た目はアルビノで儚い白のイメージなのにドス黒いですねお母様。その白い肌のお腹の中は真っ黒ですか。その白い髪の奥から生まれる思考は真っ黒ですか。その真っ赤な瞳は今までお母様に酷い目に遭わされた人の血の涙の色ですか。

……なんだか自分に言葉が光速で跳ね返されてきているような気がするがきっと気のせいだ。そうだ、そうに違いない。

「ハッ、私ったら……。すいませんお義母様、ついおかしな事を想像していまして」

正気に戻ったらしいルイズが何故かちらちらと僕を何度も見ながら申し訳なさそうにお母様に頭を下げる。

この母親にしてこの息子ありとか思ってるんだろうなぁ。イヤだ

なぁ。

「いいのよ。女の子にはそういう時があるもの」

ねぇですよ。

「ね、アリア？」

僕に振らないでください。僕は男の子だからわかりません。女の子だとしてもわかる気がしません。どちらだとしてもわかりたくありません。

僕は視線を合わせようとしてくるお母様からルイズへ視線を反らし、無理矢理頷かせようとするお母様の無言の威圧感を回避した。

「や、やっぱりそうなのね……」

すると視線の移動先であるルイズは挙動不審な感じでまた僕とお母様を交互に見つめながら、うんうんと何度も一人で頷いていた。

「いや、ルイズ。お母様の話は絶対に嘘ですよ。女の子にはそういう時があるなんて言ってますが見た事がないです」

「あ、私が頷いてるのはそっちの話じゃないわよ？」

どっちの話ですか。

僕の首が肩に触れ、僕の表情は疑問を抱く表情に変わっていく。

「べ、別に気にしなくていいわ。隠してるみたいだし！　いや、そ

うじゃなくて、その……私は何も知らないから！」

意味がわからない。やっぱり何処か壊れてしまったのだろうか。

僕は意見を求めようと、年長者だから何かしら対象方法を知らないかとお母様の方を見る。

しかしお母様もわからないのか答えは苦笑でしか返ってこなかった。

「まぁ、どうでもいいですね」

「ええ、どうでもいいいいわね」

お母様と一緒に何度も頷く。

「やっぱりそっくりだわ。流石似た者母娘（おやこ）」

この人に似てるって言われるのは見た目なら美人って事で嬉しいけど、性格が似てるは正直嫌すぎる。

僕はお母様と比べたら小悪です。お母様みたいな性悪ではありません。

「あ、お義母様！　そろそろ食事の時間ですし、案内しますわ」

「あら、そうね。じゃあ、お願いしちゃおうかしら」

僕はささやかな願いを渇望しながら一日で仲良くなった二人が姉妹のように手を繋いで、僕をほって歩いて行くのを見送った。

ちなみにその夜食べたご飯は文句が付けようのない御馳走だった。

それと僕とお母様には関係ないが、ヴァリエール家で雇われていた平民が１０人ほど『2倍の辛さはもう味わいたくない』と言い残して辞めていった。

貴族と同じ、調味料が使われたご飯でも食べたのでしょうか？
平民にはヴァリエール家の、それも豪華さを重視した味付けは濃過ぎたのですかね。嫌なら食べなきゃいいだけなのに。

第十四話　うさぎが二羽（二匹）（後書き）

遂にかなりの差を付けて新しく書き始めたばかりの『バカ』に負けたうさぎさんでした。

でも書きやすいから（文章とか気を使ってないし）、好きな小説の作者さんがお気に入り登録してくれているのを偶然見付けたから、狂愛はこの小説も書き続けていきたいです。

さて、何故か順調にルイズフラグが建っているような、ルイズルートに突き進んでいるような気がします。サイト×ルイズが好きな狂愛としてはあるぇ？　って感じです。弄りやすいからとルイズを出し過ぎたのが原因でしょうか。

ワルド頑張れ！　サイト頑張れ！

誰かうさぎさんに適当なヒロインを作って譲渡するのが一番確実だろうか。

第十五話　幼女性愛騎士

「ある朝、アリア・ド・ルチアーノが不安な夢からふと覚めてみると、ベッドの中で自分が一匹の、とてもなく大きな白兎に変わってしまっているのに気がついた」

「おはようございます、ザムザ様」

「誰がグレゴール・ザムザですか」

まだぼやけている眼を右手で擦りながらベッドの上で上体を上げる。

朝一から部屋に勝手に侵入していて、主人のボケにボケで返して突っ込ませるとは、彼女は本当に使用人だろうか。せめてボケにはツッコミをお願いしたい。

「ザム――お嬢様。心配なさらなくてもお嬢様は白兎ではなく、白兎の様な人間なので、ご安心してください」

「最初から心配してないですよ。てゆーかうさぎのような人間って安心できるのですか？」

ベッドから立ち上がりながら溜息を吐く。

てゆーかなんでまたザムザ様って言いかけてるんですか。

僕は朝から幾つも不満が出てくるが、彼女には言っても無駄なので言わない。

けれど不満なのはやっぱり不満なので、顔を洗ってタオルで拭いた後、僕は彼女を睨みつけた。

でも彼女は気にしない。ただ自分の仕事を遂行し続ける。

「お嬢様、こちらへ着てください。服を――」

「変な事しようとしたらクビにするから」

「――畏まりました」

先に命令してからフランシアに服を替えさせる。

命令には基本的に逆らわない事にこの前気が付いた。だから最近は彼女に怯える事なく楽しく愉快に痛快に過ごさせてもらっている。

「ふふふ、フランシアも命令されたら何もできないのですね」

「肯定です。命令できない寝てる間にほっぺにキスとかはしてますけどね」

「えっ」

「あと、すやすやと眠るお嬢様の一部を舐めたりとか――」

「何してんですかこの変態メイドぉおお！！！！！」

フランシアの胸倉を掴みながらおもいっきり揺する。

えっ、なんなの？　命令がなかったらやりたい放題なんですか？
主人に手を出すんですか？

「まさに飼い犬に手を噛まれるですね。野良犬に噛まれたと思って忘れるといいですよ」

「忘れられる訳ないですよ！！！　この！！　この！！　この！！」

不敵に笑うフランシアの脛にローキックを何度もくらわせる。けれど彼女は表情を変える事も、苦痛に膝をつく事もしない。

クビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビ、絶対にクビ！

僕は心の中で何度も叫ぶ。

「……半分冗談ですよ」

けれど彼女の告げた言葉で、僕のマグマが噴火したような怒りは鎮火した。

なんだ冗談か。

「――って、えっ？　もう半分は？　そしてその半分に該当する部分は？」

「ほっぺにキスです。生娘じゃあるまいしそれぐらいいでしょう？
さぁ、お嬢様。今日も可愛らしくなりましたよ。まぁ、私としては着飾っていない自然なお嬢様の方が、裸のお嬢様の方が可愛いと思いますけど」

「よくねぇですよ！　僕はからかうのはいいけどからかわれたりする側はダメなんです！　てゆーかどさくさに紛れて何言ってんですか！？」

「林檎みたいに真っ赤なお嬢様も素敵ですわ」

「うるさい！」

コイツが貴族、もしくはそれ以上の王族に生まれなかったのは、このハルケギニアにとって不幸中の幸いだと思う。

もし権力か武力なんか持たせたら平民のメイドでハーレム作ったり、幼女を誘拐してきたり碌な事をしないだろう。

ブリミっつぁんのファインプレイだ。

「それよりお嬢様、本日のご予定なのですが」

「それよりってなんですかバカ。とりあえず寝てる間の接触一切禁止！」

「ちっ、畏まりました」

「……舌打ちしやがったですよ」

親の顔が見てみたいってホント、こういう時に言うんですよね。どんな育て方をしたらこんなに貴族を嘗めた平民が育つのですか。

いや、やっぱり見たくない。正確には逢いたくない。もしもコイ

ツそっくりの変態レズ野郎だったら僕は終わる。

「てゆーか今日は虚無の曜日ですよね？　何故予定なんか？　それを教えてから舌を噛み切って死ね」

「訓練などはおやすみですが、ルイズ様にド・ワルド子爵の息子さんが会いに来るそうです。お嬢様、そんなに激しいディープキスをご所望ですか」

「なるほど、それは面白そうかも。自分の舌を噛み切れって言ってんですよ」

「はい、ですから予定の確認を。流石はお嬢様。サディストの鏡ですわ」

「うん、ならそのワルドざまーを見に行こう。黙れカス」

まるで姉妹のように仲の良い語り合いをしながら、僕達は夕食の席に向かった。

☆

「決闘だっ！」

「……ワルド様」

「はぁ、帰りやがれですよロリコン」

「お嬢様、ふぁいとでございます」

勇ましく吠えるジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド、そんなワルドを見て頬を染めるルイズ・フランソーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、溜息を吐きながら呆れるアリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ、アリアを無責任に棒読みで応援するフランシア。

朝、ご飯を食べてルイズと（で）遊んで、昼、ご飯食べてルイズと（で）遊んでいたらワルドが来て、何故か、いつの間にか決闘をする事になっていた。

「どうしてこうなった……」

「初対面のワルド様に出会った瞬間笑いながら『ワルドざまぁｗｗｗｗｗ』とか言ったのが原因ではないでしょうか？　もしくは婚約者とＳＭプレイに興じるお嬢様に腹を立てたとか」

なんて器の小さい、心が狭い男なのだろう。流石は無理矢理結婚しようとしたら拒否されて、キレてルイズを殺そうとした髭子爵の若い頃。更に心が狭いのですね。

あとＳＭプレイはやってません。

「ワルド様っ、何故決闘だなんて……」

「止めないでくれ、僕のルイズ。たとえ相手が女の子だろうと――いや、女の子だからこそ負ける訳にはいかないんだ！」

「ワルド様……」

男の子ですけどね。

格好を付けるワルドを見てルイズは頬を朱色に染める。そしてそんなルイズを見てワルドは自慢げに僕に視線を向ける。

いや、別に羨ましくないですよ。

「いいか、えっと――」

「アリアお嬢様です」

「――ミス・アリア。杖を落とすか負けを認めるか、どちらかを選んだ方が負けた。単純でいいだろう？」

子供相手に必死乙です。

「僕は風のトライアングルだ。ギブアップするなら今の内だよ？」

「参りましたー。フランシア、カトレアの動物と遊びに行こうです」

「なっ！？」

僕がわざと杖を落とし負けを認めると、ワルドのこめかみからブチリッと嫌な音が聞こえる。

「待ちたまえ！　まだ決闘は始まっていないぞ！？」

きゃんきゃんきゃんきゃんうるさいですよロリコン犬。

「子供相手に必死ですねワルド様（Ｃｖ：釘宮）」

「ち、ちが、ルイズ、僕は君の為に！」

「えっ、えっ？　私は何も――」

「そんなワルド様なんて格好悪いですわ（Ｃｖ：釘宮）」

ルイズの声を真似しながら批判すると、ワルドは面白いように慌て出した。

ルイズは自分が喋っていないのにワルドが自分の名前を呼びながら慌てる様子を見てはてな顔だ。

てゆーかルイズは僕がルイズの声で話したのに気付いてないですね。他人に聞こえる声と自分が話す声は違うからでしょうか。

「くっ、仕方ない。決闘は中止だ！　１０年後にでも決着をつけよう」

「あ、ああ、はい……」

１０年後に弄ってくださいって意味ですか。わかりました。

しかしあれですね。確かに今のワルドは面白くない。

まだ裏切ってないし、髭生えてないし、普通のイケメンっぽい。ただしロリコンでマザコンだけど。

「覚えていろよ！　この借りは必ず返す！！」

「ワルド様？（Ｃｖ：釘宮）」

「い、いや、何でもないよ」

「……？　ワルド様どうかなさったんですか？」

一体この人何しに来たんだろう。

いきなり決闘を申し込んできたワルドは結局決闘を未来に先延ばしにした後、何もせずに帰っていった。

第十五話　幼女性愛騎士（後書き）

そういえばアリアの前世の名前って何でしょうね。愛姫とかでしょうか。

第十六話　お別れの日

ヴァリエール家に来てから、カリーヌから魔法教育を受けるようになってから、時間が過ぎるのは早いものでもう1年が経った。

そしてつい先日、カリーヌに『貴方にはもう教える事はありません。いえ、ただ身体を鍛えただけですが、まぁ、とにかくもう終わりです。それにもうヴァリエール家の使用人も限界ですから』と言われた。

そんな訳で今日ルチアーノ家に帰る次第ですです。

「変態メイドー、荷物まとめ終わったですよねー？」

「一部否定の肯定です。私はメイドで荷物はまとめ終わりましたが、変態ではありません。それと荷物は既に馬車に積み終わりました」

「どんな考え方をすればお前が変態じゃなくなるのかわからないですよ」

1年間使用した客室とも今日でお別れ。ここは僕の第二の私室のようなものだ。また是非来たいような気もしない事もないような気がする。

「それじゃあ、僕はルイズにお別れでも言ってくるですよ。公爵夫妻やカトレア、使用人にはもうしたですし」

「その際に公爵の浮気を捏造、使用人の部屋にあるベッド全てに画鋲を仕掛けるという悪戯を残していったのには恐れ入りました。ま

さか恩を仇で返されるとは」

「あれが僕流のお礼だよ。カトレアには何かしたら大変な事になりそうだったから何もしなかったけど」

「性格が捩曲がり過ぎて大事故になっていますね」　それならお母様の性格はハルケギニア滅亡レベルですね。いや、あの人なら滅ぼそうとすれば本当に滅ぼせそうで怖いですけど。

「んじゃ、いってきまーす。部屋の掃除は来た時よりも美しくでよろしくねー」

☆

ルイズの部屋の前まで来た僕は、まず普段はしないノックを数回した。けれど彼女から返事が帰ってくる事は無い。

「居留守ですか？　さっさと帰りたいのでドアを開けてほしいんですけど」

――ガチャガチャガチャ。

何度回してもドアノブは開かない。続けてノックをしてみても何の反応も返ってこない。

「そんなにお別れが寂しいのですか？」

「……違うわよ」

やっと反応が返ってきた。

しかしなんだこのしんみりとした空気は。僕はシリアスなんて大嫌いなんですけど、コミカルにいきたいんですけど。

「ならさっさと出てくるですよ。てゆーか今生の別れでもあるまいのに何を悲しむ事があるのですか」

「うるさいうるさいうるさい！」

ここで『うるちゃいうるちゃいうるちゃい！』と返すのは、流石に空気を読まなさ過ぎですかね。

まぁ、アホしか友達いないし寂しい気持ちは仕方ないのかな。一年間一緒にいたんだし。

僕はドアにもたれ掛かりながら溜息を吐いた。

「ルイズ、会おうと思えばいつでも会えるし、会いたくなくても魔法学院に入る頃には嫌でも顔を合わせるんだよー？　てゆーか僕はシリアスが得意じゃないからいつものような感じにしましょうぜぃ」

木の板でできたドアの向こうからは少し嗚咽が聞こえる。

なんだこれは、なんなんだこれは。僕は自分の思い通りに人を振り回すのが好きなのだ。こんな風に相手の顔色を伺いながら、相手に気を遣いながら話し掛けるなんて僕じゃない！

「わかった……5秒与えるです。その間にドアを開けなければ吹き飛ばしちゃいます」

僕は杖を取り出して構える。

相手のペースに合わせるのなんてもうやめだ。どう考えてもアリアじゃない。■■の生き方に反する。

「ごぉー……、よぉーんー……、321デストロイ！！」

――ドッカーン。

風の魔法でドアを吹き飛ばし、声も掛けずに、反応も待たずに中に入る。

うんうん、これが僕だ。

中に入るとルイズは身体を毛布で覆い隠しながら泣いていた。

いつもなら文句の一つや二つ言ってくるのに、何も言ってこなかった。

「はぁ、なんか調子狂うですよ」

今のルイズは面白くない。僕が玩具にしていたルイズじゃない。こんなただの子供は僕の友達ではない。

――いつものルイズちゃんじゃない。

僕は毛布を掴み、おもいっきり引っぺがす。

「なっ、なにすんのよっ！？」

何度も擦ったのか、どれだけ泣いたのか、ルイズの瞼は赤く腫れていた。

「……ルイズ」

「きゃっ――」

僕はそんなルイズの両手首を掴み、ベッドに押し倒すような形で馬乗りになる。

「ひゃっ、だっ――ちょ、そんなとこ舐めないで、よっ！」

そして赤く腫れたその瞼を、動物がするようにぺろぺろと舐める。眼球ごと舌で犯していく。

「だめよっ、そういうのはっ……大人になってから、じゃないとっ！」

「……何勘違いしてんですか」

「えっ」

フランシアじゃあるまいし、僕はロリコンなんかじゃないしこんな子供に手を出したりしないよ。

手首を離し、馬乗りの体制からルイズの頬を横に伸ばす。

「ふにょ――」

「おお、これ気持ちいい」

「あぶ、あばばっ……うにゅ、うううぅ」

「のびーるのびーる」

「ひゃめにゃひゃいほ！！」

そのまま何度も引っ張っていると、ルイズは僕の両肩を押して、突き飛ばしそうとする。

けれど僕の手がルイズの頬から離れただけで、僕と彼女の距離は変わらない。

「あんたね！？　そういう雰囲気じゃなかったでしょ！？　今のは普通き、きききききキスしたりとかそういう感じでしょうが！！」

「うるさいですよマセガキ！」

「あだっ！？」

うだうだとうるさいルイズの脳天にチョップをくわえると、彼女は額を押さえながら睨んできた。

「何すんのよ！？」

「そっちの方がルイズらしいよ」

「えっ」

僕は満面の笑みで微笑んだ。

これだ。このうるさいきゃんきゃんうるさい発情期のうるさい雌犬みたいなうるさい女がルイズだ。

しゅんとしているルイズなんてルイズじゃない。何よりも普通の女の子なルイズなんて僕がつまらない。

「ルイズ？」

「……何よ」

「またいつでも会えるんだから泣く必要はないですよ」

「……わかってるわよ」

ルイズは頬を膨らませながらぷいっと視線を反らす。可愛いつもりなのだろうかこの雌豚は。

「ねぇ、アリア？」

「なんですか？」

「キス、してくれない？」

「……はぁ？」

いきなり何を言い出すのだろうか。もしかしたら発情期になってしまったのだろうか。

いや、人間は年中発情期か。なら仕方がない。

僕は一人で勝手に納得した。

「ん……」

僕がそんな事をしている間に、ルイズは僕の方を向きながら瞳を閉じ、可愛らしく唇を突き出していた。

えっ、なにこれ？　サイトくんは？　いじめられ過ぎて目覚めちゃった感じなの？

僕はルイズを見る。頬は朱色に染まり、泣いていた為か睫毛がキラキラと輝いている。そして何も言わずに僕を待っている。

据え膳食わぬは男の恥か。

僕は諦めてルイズと重なり合った。少し震えているルイズの身体を抱きしめ、彼女に顔を近付けていった。

☆

「信じらんない！　なんであそこで首を噛むのよ！？　ムード満天

だったじゃない！」

「ルイズがそう思うのならそうなんだろうですにゃー。ルイズの中だけでは。あと首はなんか美味しそうだったから☆」

「『美味しそうだったから☆』じゃないわよ！　あんた吸血鬼！？」

「落ち着いて、落ち着いて。ほら、クッキー食べる？」

「もぉー！！　あんたなんかさっさと何処へなりとも行きなさい！！」

さようなら、ヴァリエール家。

第十六話　お別れの日（後書き）

前話の途中からと今回の話に違和感を感じた人。貴方は鋭いですね。でも触れないでください。

第十七話　再会の日

私、ルイズ・フランソーズ・ド・ラ・ヴァリエールは少し緊張していた。その理由には今日から魔法学院の生徒になるという事もあるが、それがメインではない。

アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。ルチアーノ伯爵家の次男で、私が5歳の時に彼は1年間ラ・ヴァリエールの屋敷に住み込みで、私のお母様に魔法を習っていた。

彼は同い年なのだがその頃からスクウェアクラスのメイジ、所謂天才というやつだ。しかし基本的に何でもできて、けれどやりたい事をやりたい時にしかやらない、そんなヤツだった。

性格は最悪としか言いようがない。自己中心的で、会話が下品で、平民だろうと貴族だろうと神官だろうと王族だろうと例外なく、躊躇なく、差別なくいじめ、反撃させる隙を与えない。私もそんなアリアによく振り回されていた。

ちなみに性格は最悪だが見た目はとても可愛らしかった。白い髪と赤い目で白兎のような、少女のような外見の男だった。それに騙されてからかわれた男は何人もいるそうだ。

そんな彼と別れてから10年。いつでも会えるからと別れたアリアは、たったの一度もヴァリエール家に顔を出す事がなかった。

「いつでも会えるって言ったくせに……」

私から会いに行く？　冗談じゃないわ！　普通男から来るもので

しょ？　まぁ、当時の私は思い込みが激しく女の子だと思い込んでいたのだけれどね。

ちなみに今でも少し疑っている。

閑話休題。とにかく今日はその幼なじみのアリアと再会できる日なのだ。彼が嫌でも顔を合わせると言っていた日が今日なのだ。私の緊張の理由の大部分はそれである。

さて、再会したらまずはなんて言ってやろうか。言いたい事はたくさんあるが、とりあえず会いに来なかった文句からだろうか。

とにかく今から始まる入学式が終わったら探して見付けて引きずり回してやる！

☆

憎っくきツェルプストーのいけ好かないあの女と青い髪の少女タバサ一悶着あったが、私は無事に入学式を終える事ができた。そして現在、あの性悪幼なじみを捜索中である。

とりあえずあいつはうさぎみたいな目立つ容姿だ。成長していてもそれなら一目瞭然、私はすぐに見付けられるはず。

「何処にいるのよ……」

そう思っていたのだが、どれだけ探しても見付からない。あの煌めく白い髪を見逃すとは思えないのだが一体どういう事だろうか。

それに私の桃色の髪も目立つからあちら側から来る可能性もあると思ったのだが。

「……まさか逃げたんじゃないでしょうね？」

私は自分が呟いた言葉に納得する。

そうだ。そうに違いない。きっとアリアは私に怒られるのが怖くて逃げ出したのだ。

なら、いくら一人で探しても見付かるはずがない。誰か学院の使用人に聞く事にしよう。

「ちょっとそこのあんた」

私は近くを通り掛かった珍しい黒髪のメイドを呼び止める。

「はい、なんでしょうか？」

「アリア・ド・ルチアーノの居場所を知らないかしら？　白髪赤目で白兎みたいな見た目のヤツなんだけど」

「ああ、ルチアーノ様ですか。あの方なら入学式をサボってずっとヴェストリの広場にいたみた――」

「そう、ありがとう。もう仕事に戻っていいわ」

私はメイドの返事を聞かずに歩き出した。

いろんな場所を探し回ったから学院のだいたいの地図は頭の中に入っている。ヴェストリの広場は私が捜していたのとは真逆の方向だ。

あの性悪女男は今頃、私から逃げられたと余裕をこいているだろう。けれど私はアイツの居場所を知る事ができた。

ふふ、首を洗って待ってなさい！

☆

久しぶりに会ったアリアはまた一段と彼のお母様に似て、美人になっていた。私はヴェストリの広場に近付くと、遠くから白い髪の人間を見付け、それからゆっくりと近付いた。そして振り返ったアリアの姿を見て私は言葉を失った。

本当に綺麗だ。長い白髪が太陽の光を浴びて、風に揺られて煌めいている。自分と同性ではないなんて全く信じられない。自分と同じ人間だなんて全く信じられない。

妖精の女の子がいたらこんな感じなのではないだろうか。悪戯好きで見目麗しい妖精――アリアにピッタリだわ。

「何か用？」

アリアの言葉を聞いて、私は現実に引き戻される。

屈辱だわ。私を覚えていないような態度もそうだし、男に見とれてしまうだなんて！

私はそんな屈辱を唇を噛む事で堪えながらアリアを睨む。

「何か用、ですって？　あんたまさか私の事を忘れているの？」

もしそうだったら許さない。あんなに弄んだくせに飽きたら忘れるだなんて、そんなクソビッチになっていたら引っ叩いてやるわ！

「ヴァリエール家の三女でしょ？　で、なんか用？」

なんだろうこの違和感。私を見るアリアの瞳がすごく鋭い。私と話すアリアの口調がすごく冷たい。まるで別人と話しているような気分になる。

私はそんな不安を必死に頭から振り払いながらアリアに凄む。

「はぁ？　何、他人行儀な態度とってんのよ？　あんた――」

「悪いけど用がないならどっか行ってくれない？　目障りだから」

今、なんて言った？　この人は一体誰？　アリアが私にこんな事を言うはずがない！

「あ、あんた一体誰よ！？」

ぼやけていく視界でアリアを捉えながら、混乱する頭を必死に整理しながら、私は今にも掴み掛かりそうな勢いで叫ぶ。

違う。勘違いだったんだわ。確かにアリアに似ているけど別人。きっとそうなんだわ。

必死に自分を欺こうとするが、努力で手に入れた優秀な頭脳はそんな戯言を肯定してはくれない。

「アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノだけど？」

そして目の前の人間も肯定してはくれなかった。私はそのまま芝生の上に膝をつく。

「――ちっ、お前が動かないから僕が移動するよ。はぁ、やれやれ」

去っていくアリアの姿を私は目で追いかける事すらできない。ただその場に崩れ落ちて、そのまま必死に涙を堪えている。

けれどもうだめだ。堪える事なんてできるはずがない。

私の瞳から雫が零れ落ちる。

ああ、私の知ってるアリアは死んじゃったのね。

☆

ヴェストリの広場から少し離れた校舎の影。そこで男子の制服を着た女性――に見える男子生徒と１０年前から容姿が変化していない実年齢不明のメイドがいた。

彼女達は片方は悔しそうな顔で、片方は嬉しそうな顔で、対象的な表情で向かい合っている。

「さて、賭けは私の勝ちですね、お嬢様。約束通り、奥様の要望通り、女子用の制服を着て、女子寮に住んでもらいます。お風呂はアリア時間というものが用意されていますのでその時間にどうぞ」

「僕は性別秀吉か！　あーあ、なんで泣いちゃうですかね。まぁ、でも久しぶりに会った幼なじみが冷たくなってたら仕方ないのかな？」

「お嬢様は何と言うか……乙女心の勉強をした方がよろしいかと。私が教えて差し上げましょうか？　もちろん実技で」

「死ね。今すぐ身体中の骨を粉々にへし折って死ね」

「生きます。あ、イきますではないですからね？」

「死ね。さっさと毒草のフルコースでも食って死ね」

「何故か機嫌が悪いですね？　もしかしてルイズ様に自分がしてしまった行為が原因ですか？　罪悪感を感じているのですか？」

「それはない」

「ですよねー」

第十八話　友達百人できません

あの後『ドッキリ大成功！』と書かれたプラカードを持っていったら、ルイズに垂直落下式ブレーンバスターで頭から落とされて丸一日ベッドの上から降りられなかった。

そんな日から一週間が経ち、学院での生活にも慣れてきた今日この頃。僕にはルイズと過保護なお父様が悪い虫がつかないように学院にメイドとして送り込んできたフランシアしか話し相手ができていなかった。

つまり一人も新しい友人はできていない。見事にハブられていた。

しかしそれはお母様や僕の悪評が原因ではない。入学式とルイズにやられた日を休んだせいと、このアルビノの容姿のせいで病弱で儚い高嶺の花的なポジション（失笑）についてしまっていたのだ。

「なんというぼっち生活。いずれは便所飯ですね。なんかワクワクですです！」

「なに変な事にワクワクしてんのよ。てゆーか私がいるでしょうが」

ちなみにルイズ経由で友達を作ろうとしても、性格が悪く、教室を何度も爆発させているルイズにも友達なんてできていない。

フランシア？　あいつの交友関係なんて変態集団に決まっている。絶対に知り合いになりたくない。アレ一人で十分だ。むしろアレもいらない。

そんな訳でルイズと二人。僕等はリア充集団を遠くから眺めながら非リア充を満喫している感じだ。

「……ねぇ、アイツらの真下に火薬仕掛けてきなさいよ」

物騒な事を言い出すルイズ。嫉妬乙としか言えない。

「ルイズも最初は人気者だったのにねー？」

「アイツら私が魔法が得意じゃない事を知った途端離れていったわ！　爆殺してやろうかしら」

ルイズの爆発魔法は僕に挑発されて練習したせいか、威力も範囲も自由自在だ。その気になれば学院のメイジの大半を一人で虐殺できると思う。この前教師の作ったゴーレムを一カ所ずつ粉々にしながら笑っていた時は流石に恐怖した。

一対一で勝てるのは魔法の使える軍人や接近戦に特化したメイジ殺しレベルの傭兵、あとは特殊な戦闘教育を受けたメイジや伝説レベルぐらいだろう。普通のメイジなら『錬金』一発で終わる。

これで虚無に目覚めたら文字通り最強だろう。格闘技も使えるみたいだし。

「てゆーかアレよ！　私達は友達が作れないんじゃなくて友達を作らないのよ！　友達なんか作ったら人間強度が下がるじゃない」

そんな戯言は置いといて、友達を作らないと社交性とかが下がるのは確実だと思う。

「アリア！　いつもみたいにいろいろ振り回していつの間にか友達になってるみたいな感じの魔法やりなさいよ！」

「そんな魔法使えないですです」

「ほら、あそこの薔薇をしゃぶってる薔薇中毒なんて面白そうじゃない？　弄ってきなさいよ。そして最終的に仲間にすればいいわ！」

ルイズが指差した方向を見ると、薔薇を口に咥えながら話すという器用な事をしているダサいシャツを着た金髪の少年がいた。うん、ギーシュだねアレ。

「ルイズってああいうのが好みなの？　変わってるですね」

「アリアの方が実際はおかしい格好だけれどね」

まぁ、確かに。マルコヌル辺りのヤツが僕と同じ格好していたら斬首刑もの――いや、一族やその関係者まとめて皆殺しにされてもおかしくないし。

「てゆーかよく考えたらあんたなんで女子の制服着てんのよ！？　再会した時は似合ってなかったけど男子のだったじゃない！　似合ってたから、むしろ女の服を着ているのが当たり前になってたから気付かなかったわ！」

「ルイズが泣いちゃって賭けに負けたからですよ」

「あんたねぇ……」

ルイズはまるで、噴火寸前の火山のようにぷるぷると震え出す。

ああ、また怒り出すのだろうか。

「てゆーかあんたのその胸もムカつくのよ！　なんで少し膨らんでる！？　なんで私より大き――えっ、柔らかい！？　本物！？　なんでアリアに胸があるの！？」

賭け事関係で怒られるのかと思いきや、何故かルイズは僕の胸部関係の話で怒り出した。しかも、もぎ取ろうとしているのか、物凄い力で僕の胸を掴んでいる。

「メロンパン入れになってまーす」

「めろんぱんってどんなパンよ！？　てゆーかこの感触はパンなんかじゃないわ！　ちょっと脱ぎなさい！！」

「ちょ、ルイ――」

「うるさい！！」

まさかの野外プレイは勘弁です！

僕は服を剥ぎ取ろうとし出したルイズに流石に焦り、必死に抵抗しながら、逃げ出そうとするが、何故かルイズの華奢な腕はびくともしなかった。

「脱ぎなさいよっ！」

「お、落ち着いて！　こういうのは――」

「ちょっとだけ！　ちょっとだけだから！　先っぽだけだから！！」

何の先っぽですか！？　てゆーか何処の童貞野郎！？

ルイズの目を見ると、洗脳されたかのようにぐるぐる巻きの渦が見える。ウチのお兄様にでも取り憑かれたのだろうか。もしくはフランシアとか。

「る、ルイズ！？」

「……なによ？」

ルイズは声を掛けるとピタリと止まってくれた。けれど手がわきわきと動いていて安心はできない。

「できれば優しくしてください。初めてなので」

顔を反らしながら照れたようにルイズに告げる。しかし反らしてルイズから見えなくなった僕の顔は、赤くなっている訳はなく、ニヤニヤと笑っている。

こんな事を言われたらルイズも流石に自分がやってる事に気付くだろう。

「……わかったわ。大丈夫、私に全部任せなさい」

――なんて、考えていた頃が僕にもありました。

ルイズは止まるどころか、落ち着きながらも確実に僕を食べる事を決めていた。

目はぐるぐる巻きで、顔は真っ赤、メダパニでもくらったような状態で、おそらく混乱しているのだろう。何か薬でも盛られたのだろうか。

「アリアがいけないのよ。久しぶりに会ったらこんなに綺麗に――」

「あー、あー、ごほんっ、うん。神聖な学び舎で、しかも野外でそういう行為は、僕としてはあまり推奨できないと思うのだが――いや、見たいか見たくないかなら是非見たいのだが！」

救いの神現る。いつの間にか近付いてきていた薔薇男（ノンケ）の突然の介入（３Ｐではない）により、ルイズは正気に戻り、みるみる内に真っ赤に染まっていった。

「なっ、なっ、こ、ここれはちがっ――」

「いいんだ！　ミス・ヴァリエール、君の気持ちはよぉーくわかる。確かに白兎の君はとても美しい。同性の君が惹かれるのも無理はないだろう。けれど、けれどだ！　野外で、しかも無理矢理というのはいけない事だ！！　しかも婚前にそのような事は――」

「ち、違う！　違うのよ！　アリアの胸を確かめようとしたら急におかしくなったのよ！！」

「それはうらやま――ではない。そうだね。女性の胸というのは確かに魔性の魅力を持つ。けれどそれに惑わされて自分を失い、あげくの果てに襲い掛かるのは紳士とは言えない！」

「私は女よ！」

おいてきぼりになった僕は彼等の言い争い（？）に耳を傾けるのをやめた。それから、ふと胸元に触れて、その匂いを嗅いでみた。何か甘い感じの匂いがする。香水？

「ちょっとアリア！　アリアからもあんたは男だって説明しなさい！」

「ははは、何をバカな事を言っているんだい？　こんなに可愛い男の子がいたら僕は自分を薔薇だなんて言えなくなるよ」

「あんたは元々薔薇なんかじゃないわよ！」

僕は香水なんて付けないから誰かが付けたのだろうか。学院の寮では一人で着替えているし、そんな機会あっただろうか。

「何、無視してんのよ！？」

胸元の匂いについて考察していた僕は急に肩を掴まれたので、思わず掴んだ相手を見る。そして異変に気付いた。

「ご、ごめんなさい……」

「あ、アリアが素直に謝ったですって……？」

何気に失礼な事を言っているルイズだが、僕はそんな事を気にする余裕が無くなってしまっている。

ルイズを見ているときゅんきゅんしてしまっている僕がいる。キスしてほしいとか思ってしまう僕がいる。抱きしめて欲しいなんて

思ってしまう僕がいる。

どう考えても惚れ薬です。本当にありがとうございました。

たぶんルイズはすぐに戻ったから僕もすぐに正気に戻れるのだろうが、このままでは恥ずかしい事を言ってしまいそうだ。

僕は逃げる為に、薬の効果に抗いながら立ち上がる。

「どうしたのよ？」

「あっ――」

「へ？　あんた何その顔？　ついに壊れちゃった？」

しかしルイズが僕の手を掴み、そのまま顔を覗き込んだ事で、僕の足は大地に根を張り巡らせたかのように動かなくなってしまった。更にルイズに見られていると感じるだけで、嬉しさのあまり顔が紅潮していく。なにこの乙女ティック思考回路。

何の目的で誰が――あ、フランシアだ。

僕は昼食の後に『タイが曲がっていてよ？』『お姉様……』なやり取りをした事を思い出した。あの時フランシアがこれの原因を僕の胸元に付けたのだろう。

「ミス・アリアはどうかしたのかい？」

「わからないわ。なんか妙に目がうるうるしてるけど」

ルイズが他の人と話している姿を見て、胸の奥がぎゅっと痛む。
フランシアめ。何が目的かは知らないけど絶対殺す。
そんな事を考えながら、僕はルイズの手を握った。
「る、るるるルイズ？」
「なに？」
「わ、私といいい一緒に散歩……してくれませんか？」
「はぁ？　いきなり何よ？　てゆーかなんかあんたの目、なんかおかしくない？」
そりゃあメダパニってるでしょうね。
何故か恥ずかしがり屋になっている僕はこうやって誘うのが精一杯だった。そしてルイズが答えてくれない事を悲しく思い、泣きそうになってしまっていた。
「ルイズはっ……私と、散歩するの……いや、なんですか？」
「えっ？　えっ？」
「ルイズのバカ！　だいっきらいっ！！！」
「あ、アリアーっ！？」
なんかもう頭の中が意味不明なぐらいグチャグチャになって僕は

走って逃げた。

☆

「おいクソメイド。お前、僕に何をした」

走っている内に薬の効果が切れ、僕はフランシアの部屋に急行し、そのドアを吹っ飛ばして中に入った。フランシアはそんな行動が予想通りだったなのか、紅茶を二人分入れて待っていた。

「お嬢様に新しい友達ができない事を旦那様に報告したら『薬でも何でも使ってアリアの友達作りに協力しろ！』と命令されましたので、その通りに行動させていただきました」

「何の薬？　惚れ薬っぽかったけど」

「媚薬――いえ、発情薬ですね。匂いを嗅いで最初に見た人に発情します。効果時間は短いですが」

フランシアの言葉に僕は吉本の漫才のようにすてーんと大袈裟に転んだ。

なんてもんを使ってんですか。しかも胸元の匂いを嗅ぐほど近い距離までいくって、どう考えても友達以上じゃないと無理だ。友達作りの役に立つはずがない。更に友達作ろうとしているのに発情させてどうする。

あれ？　でもそれだと僕のアレが説明できない。ルイズのアレは確かに発情だったが、僕のアレはそうじゃないと思う。

「僕は発情薬とやら使っても手を握って散歩に誘う程度しかできなかったんだけど？」

「ああ、それはお嬢様が実は超恥ずかしがり屋で実は純粋な乙女的な思考回路をしているからですね」

「有り得ない。僕が日常的にどれだけエロワードを使ってる？　もはや色欲の錬金術師エロワード・エロティックだよ！」

「にーさん！」

「それはルイズに言ってほしいかな」

まぁ、たぶん性格が変わるような副作用でもあったんだろう。ルイズの発情の仕方もなんかおかしかったし。

僕は一人で納得して、とりあえずフランシアをエア・ハンマーで吹っ飛ばした。

すぐに立ち上がって無傷で服についた埃を払っていたけど気にしない。なんかたぶんコイツ人間じゃないんだろう。

そして、学名はヘンタイロリコンメイドとかかなぁ、なんて考えながら僕はフランシアに唾を吐き掛けて部屋を後にした。

第十八話　友達百人できません（後書き）

久しぶりに見た憧れのシンガーがメイクのせいか肌がボロボロになっていて、写真とかではわからないけど大変なんだなぁ、なんて悲しい気持ちになった。

第十九話　けれど別に必要ない

自分の部屋に戻ろうとしたら、ルイズが部屋の前に立っていた。おそらく先程の事についてだろう。

「……あっ」

誰かの気配を感じたらしく後ろを振り向いたルイズが、僕を見付けて小さく声を出す。そして最初は少し不安そうな表情だったが、すぐに睨むような表情に変わった。

「何処行ってたのよ」

「ちょっとブレーメンロード渡ってた」

「……？」

ルイズははてな顔。ハルケギニアにそんな物騒なモノもゲームないから当然だろう。フランシアは「１０００万？　お前が手にできるのは１０００万から借金の（以下略）」とか返してきそうな気がするけど。

「まぁ、いいわ。アリアが意味不明な事言うのはいつもの事だし」

なにその変人扱い。

「そんな事よりさっきの事なんだけど……」

もじもじと俯き、ぼそぼそと小さな声を出すルイズ。さっきはき

ゅんきゅんしてたけど、今は別にしない。むしろハキハキ喋れってイライラする。

「さ、散歩……行ってあげてもいいわよ？」

「いえ、結構ですぅ」

「えっ」

ルイズは手を差し出しながらぷいっとそっぽを向く可愛らしい仕種を見せてくれたが、僕は丁重にお断りした。ルイズはそれに対してぽかーんとマヌケな表情をし、意味がわからないと目を見開いている。

「そんな事よりさっきの薔薇野郎でもからかいに行こうぜ☆　そして身体中の穴という穴に薔薇をぶち込んでやろうですよ！」

「なにそれこわい」

身体に薔薇を植えたら、限りなく薔薇に近付けるような気がするー。あると思います。

「もちろん眼球にも……毛穴にすら差し込んでやるぜぃ☆　行くぞルイズ！　ですです！」

「ちょ、待ちなさいよ！　どう考えても死ぬわよ！」

「僕浮気性の人間って大嫌いなんですよ」

前世では浮気いっぱいしたけどな！

「……流石に殺すのはマズイわよ」

さっきまで火薬を仕掛けろとか、爆殺するとか言っていたくせに、首を横に振るルイズ。基本的に常識人ですね。

「バカっ！　常識に囚われていては、何も生まれない！　何も生み出せない！　お前は凡人で一生を終えるつもりか！？　そんなの僕は嫌だッ！」

「はいはい、てゆーかいつまでも廊下で話してるのもアレだし、さっさとあんたの部屋入るわよー」

「全ての人間は生まれた時は平等に何の価値もない！　そして生きていく中で、自分に価値を作り出せるのはほんの一握りだ！　お前は無価値で終わるのか！？　何もないままで――」

「はいはい、近所迷惑だからさっさと部屋を開けなさい。部屋に入ったら聞いてあげるから」

……つまんない。さっきはなんかもじもじしてたくせに、今はもう、いつも通りに戻っている。

僕はちゃんと相手をしてくれない彼女に苛立ちながら、おとなしくドアを開けた。

☆

女子寮の一室、ルイズの隣の隣、つまりキュルケの隣の部屋に僕の部屋はある。常識的に考えて、男子生徒が女子寮に侵入する事でも危ないのに、男子生徒が女子寮に住んでいるとかどんな悪ふざけなのだろう。お父様の過保護とお母様の趣味は理解できない。

そんな僕の部屋で、僕はベッドに腰掛け、ルイズは化粧台の椅子を僕の正面に運んでそれに座り、仲良く楽しく僕達は雑談をしている。いつものしょうもない、馬鹿らしい会話内容で。

「アリア！　あんたのその狡賢い頭脳をたまには普通に役立てなさい。今回の議題は『どうすれば友達ができるのか』よ！」

「脱いだらいいんじゃない？」

「そんな娼婦みたいな事できる訳ないでしょ！？　てゆーか脱いだらどうやって友達ができるのよ！？」

脱がされる→決闘→仲直りというパターンでキュルケは親友を作りました。

「もっとマシな方法考えなさいよ。あんたも白兎の君とかバカみたいな名前で呼ばれて遠くから眺められるだけなんて嫌でしょ？」

僕は大きく頷く。

それは確かにイヤだ。だいたい白兎の君って何だ。みんな真面目な顔で言っているけど、バカにしているようにしか聞こえない。

「それにアレよ？　私なんか唯一の友達であるアリアをお、おお犯そうとして断られてフラれた……なんて噂が流れてるのよ！？」

ついさっきの事なのに速いですね。閉鎖された学院の中では、娯楽になる噂が流れるのは速いみたいですね。

「魔法成功率『ゼロ』、友達も『ゼロ』のルイズとか本気で爆殺してやろうかしら……」

ルイズさんがアップを始めたようです。

「だ・か・ら！　一刻も早く私たちは友達を作って変なイメージを消し去らなきゃいけないのよ！　イメージだけで本物を知らないくせに知っているつもりなヤツらに真実を教えていかなきゃいけないのよ！」

だからの意味がわからないけど、ルイズは随分気合いが入っている。立ち上がりながら拳を握りしめ、天高く突き上げて、椅子に足を乗せながら熱く語っていた。

「でもさ、友達作ると人間強度が下がるとか言ってなかった？」

「あんたバカァ？　私レベルになると少し下がるぐらい問題ないに決まってるじゃない」

溜息を吐きながらダメな子を見る目を向けるルイズに殺意が芽生えた。

――ぶち殺すぞ、ヒューマンッ！！

「ほんとアリアはダメなんだから……」

ルイズは更に調子に乗り出す。１０年会わない間に成長したものだ。まさかルイズごときにダメなんて言われるとは。

必ず報復してやる。

「ほら、さっさとアイディア出しなさい」

先程の事をたいした事がなかった事にしながら話を続けるルイズに、こめかみがピクピクと動き、顔が引き攣るのを感じるが今は我慢する。

今簡単に仕返しするだけなら楽勝だが、それではつまらない。

「優しい態度で接する」

「却下。それじゃあ嘗められるわ」

お前はヤンキーか。

「爆発させたら謝罪する」

「却下。爆発するのは私のせいじゃないもの」

自己中心的過ぎるよルイズ。

「キャラを変える」

「却下。ありのままの私と仲良くしたい人しかいらないわ」

それハードルがアルビオンの高度より高いですよ。

「奢ったりして餌付ける」

「却下。お金で釣れる小さい人間に興味ないわ」

友達少ないくせに自分では何もしないで相手に条件作ってんじゃねぇですよ。

「とりあえず自分から話し掛けてみる」

「却下。そんなの惨めじゃない」

なんというプライドの高さ。ベジータ様かお前は。

「面白い格好をして注目を浴びる」

「却下。私はピエロじゃないわ。もっとマトモなアイディア出しなさいよ」

「自分で考えろバカ」

僕はそう言い捨てて、ベッドに勢いよく倒れ込む。

流石にもう諦めた。ルイズが満足するアイディアなんておそらく一生出て来ない。考えている内に学院生活が終わる。

「ちょ、ちょっと!?」

だいたいアレだ。最初からルイズに友達を作る方法を考えてあげるなんて無駄だったのだ。

我儘で、プライドが高くて、意地っ張りで、見えっ張りで、素直になれない性格の人間なんて、自分から積極的に動かなきゃ友達なんて作れない。関わる機会がなければ友達なんてできるはずがない。自分から行動しないで、待ってるだけじゃ何も変化しないのだ。

「……アリアは友達ほしくないの？」

「別にいらない。玩具がたくさんあったらどれで遊ぶか迷っちゃうし。それに僕はたくさんの友達より小数の親友派だし」

「玩具って……、でもそうね。確かに小数の大切な親友がいる事の方が素晴らしいわ！　私にはアリアや姫様、それに一応フランシアだっているし！」

いつの間にか友達から親友に進化していたようです。ちなみに友達や親友の状態からジョグレス進化をすれば最低でも恋人関係になれるそうだ。間違えてセフレ関係に進化する場合もあるそうだが。

更にちなみにトリステインでは結婚関係までワープ進化してしまう。

「そうね！　友達なんかいらないのよ！」

ルイズは他人が聞いたら強がりにしか聞こえない事を言い出した。

「今いる親友を大切に！　アリア！　私達の友情を深めていくわよ！？　えいえいおー！！」

「えいえいおー」

「棒読みじゃない！？　もっと元気よく！　えいえいおー！！」

「えいえいおー」

なんだこれは……バカみたいじゃないか。

僕がそんな事を考えていても、ルイズは自分達の行動を全く気にしている様子がない。

流石原作で『今日は貴方が御主人様にゃん』とかやっていた人間だ。思い込んだら一直線、猪突猛進の猪っ娘だ。

「えいえいおー！！」

「えいえいおー」

「えいえいおー！！」

「えいっ！　えいっ！　おーっ！！」

「えいえいおー」

この掛け声を繰り返す謎の儀式は、サイレントをかけて深夜３時まで続いたのだった。

第十九話　けれど別に必要ない（後書き）

Friday of this week is pleasure.

It is because 『BECK』 broadcasts.

Do you watch the broadcast?

第二十話　薔薇ナルシストと褐色ビッチ

授業が終わり放課後。僕は何か面白いものでもないかなぁと学院内を散策していた。そしてお目当ての面白そうなものを見付けた。

「ギーシュ様！　これは一体どういう事ですの！？」

「私だけっておっしゃってくれたのは嘘だったのですか！？」

「ご、誤解だよ。僕はね、君達と――」

修羅場。名前も顔も知らないモブキャラ二人に囲まれて、ギーシュが必死に言い訳していた。周りの人間は呆れながら巻き込まれないように距離を置いている。

「ではこれは一体どういう事ですの！？」

「そうですわ！」

「だ、だからね……」

冷や汗をかきながら後退るギーシュ。そんなギーシュを彼女達が逃がすはずもなく、どんどん壁に追い詰めていく。

そういえば『浮気はバレないようにやれ。バレなければ浮気ではない』って言ってたのは誰だったかなぁ。まぁ、思い出せないならいいや。とりあえずご愁傷様ギーシュくん。

「「さようなら！！」」

「げふっ！？」

哀れ、ギーシュくんは二人の女性に同じタイミングで、挟まれるように頬を叩かれ、タコのような顔でノックダウンした。女性達はそれを見て満足したのか、ふんっと鼻息を鳴らした後、足早にその場を後にする。

「か、かほほはひひははらのほはがわはらなはっはみはいなようはへ（か、彼女達には薔薇の良さがわからなかったみたいなようだね）」

痛々しい腫れた顔でキザに決めるギーシュはものすごく滑稽だった。周りの人間も呆れてその場から去っていっている。

でも僕はその場から動かなかった。ギーシュのアホ面を見て、心の中で大笑いしていたからだ。もっとじっくり見ていたい。

「……ん？」

「えへ♪」

ギーシュが僕の視線に気付いたので、ごまかすように舌を出してウインクしてみる。

するとギーシュは顔を紅潮させ、金魚みたいに口をパクパクと開閉し出した。

これはアレだろうか。惚れられてしまったのだろうか。同性すら惚れさせてしまうなんて魔性の男過ぎる。

人生初ニコポです。

そしてギーシュは女好きで惚れっぽいとは思っていたが、まさかあっちの意味でも薔薇男だったのか。でもギーシュってナニが小さそうだから満足できないと思う。満足させられても困るけど。

「おほんっ……、みっともないところを見せてしまったようだね、ミス・アリア」

むしろ普段の姿からしてみっともないのだが、流石にそこまで酷い事は言えない。けれどやっぱり服のセンスと薔薇を持ち歩くのは気持ち悪いです。

「……ふふ♪」

僕は言葉は話さずに、笑顔だけで返事を返す。そしてギーシュが耳までタコのように真っ赤になる。

おおっ、ニコポを完全にマスターしたみたいだ。早速ルイズとかフランシアにも試しに行こう。

僕はギーシュを置いて、歩き去ろうと動き出す。

「ま、待ってくれ！」

けれどまだ用事があるらしいギーシュによって引き止められてしまった。

恋愛ごっこなら他人とやってほしい。

「ぼ、僕はギーシュ……、ギーシュ・ド・グラモンだ！」

「はぁ……アリアです」

「そ、そうか」

いや、知ってるでしょ。

僕が困った顔を演じながら自己紹介し返すと、ギーシュは笑った。

「み、ミス・アリア……良かったら、良かったらなんだが、今度の虚無の曜日に遊びに行かないかい？　良い湖をしし知っているんだが」

ルイズ相手だったら『野外プレイはイヤです』とか言うんだが、目の前の童貞坊や――げふんげふん、男の子の夢を壊してあげるのも忍びない。ここは最後まで演じてあげる事にしよう。

「申し訳ありませんわ、ミスタ・グラモン。私(わたくし)はあまり外出するのが得意ではない（面倒だから）ので。それに虚無の曜日はルイズとお話をする予定がありまして」

本当はトリスタニアに掘り出し物を探しに行く。

「そ、そうだね。確かに君は外出するのは得意ではない（病弱だから）のだったね。いや、失敬。あはははは……」

演技に騙されたギーシュくんは断られてちょっと悲しいのか、曖昧にごまかすように笑っている。なんだか普通過ぎてつまらない反

応だ。

「それでは、ごきげんよう♪」

「あ、ああ！　ま、また今度！」

アリアという人間が男だと知って、彼が泣き崩れる日はそう遠くないだろう。

僕は美しさは罪だなぁ、とナルシストのような気分で歩き去った。

☆

「あら、貴方……確かあのヴァリエールの友達でしょ？　名前はアリアだったかしら？」

ニコポしようとルイズの部屋に向かっていたら褐色ビッチに出会った。取り巻きの男は今日はいない。

「そういう貴方はツェルプストー」

「ええ、キュルケ・フォン・ツェルプストーよ。よろしく、ミス・アリア」

「アリアで結構ですよ、ツェルプストー。よろしくですです」

「なら私もキュルケで構わないわ」

褐色ビッチは桃色ボンバーとは違って、実に社交的で、男にとっては魅力的なプロポーションで、ビッチなところ以外姐御みたいな感じで頼れそうな良い性格の人間なようだ。

けれど単純な訳ではなく、ヴァリエールの友人だから少し警戒しながら観察しているところもあるのが面白い。巨乳はバカとよく言われているが、なかなか賢い人間らしい。

「意外ね。ヴァリエールの友達はツェルプストーなんかと話さないと思っていたわ」

「意外ですね。ツェルプストーはヴァリエールの友達なんかと話さないと思っていたよ」

因縁対決。ヴァリエールにとっては何度も恋人とかを盗られた恋敵の一族。領地が隣同士なのに殺し殺され合ってる一族。

まぁ、キュルケとルイズは少し仲の悪い姉妹にしか見えないけど。意地悪な姉と意地っ張りな妹？

「坊主憎けりゃ袈裟まで憎いって？　そんな事言ってたらヴァリエールから恋人を奪えないじゃない」

それは確かに。むしろヴァリエールから奪う為には、積極的に友達とかに関わっていた方がいいよね。

「……あ、でも安心しなさい。今代のヴァリエールは女に走ったみたいだけど、私も流石に同性は奪わない、ってゆうか奪えないから」

力無く笑う褐色ビッチ。

なんかルイズがものすごい勘違いされてる。あれ？　てゆーか僕も勘違いされてる？　僕がロリコンレズ野郎とか思われてる？　フランシアと同じ扱い？

ルイズはどうでもいいけど、女とかレズとか勘違いされるのはいいけど、フランシアと同じ扱いだけは絶対いやだ！

「へい、勘違いしてんじゃねぇですよ褐色ビッチ」

「か、褐色ビッチ！？」

「ルイズがレズなのかは知らないし、興味ないけど僕は関係ない。僕はルイズとは恋仲ではないですです。あんなロリ体型に欲情した事はないし、それに僕は男です」

「……へ？」

か、勘違いしないでよね！

「いや、どこが男なのよ。証拠見せなさいよ」

まぁ、そうなるでしょうね。お母様そっくりだし。この容姿だと『恋人１００人できるかなゲーム』とかできないからお父様似が良かったなぁ。いや、前みたいに刺されたくないからやらないけど。

「証拠って言われても……」

「だいたいどう見てもヴァリエールの方が胸ないし、むしろあっちの方が男だって方が信じられるわ」

メロンパン入れになってまーす。

「……そうね。もしそうだって言うのなら一晩付き合ってみる？」

キュルケは胸を強調して舌舐めずりしながら僕を舐め回すように見る。

けれど、普通の男ならホイホイ着いていくのだろうけど、残念ながら僕は褐色好きでも、ビッチ萌えでもない。

「あ、あの廊下でそういう話は……」

「「えっ」」

唐突に、背後から聞こえた声。後ろを振り向くと、そこには顔を赤らめながらぷるぷると震える女子生徒がいた。おそらく同級生だろう。

「で、でもミス・ツェルプストーがまさか女の子でも……い、いえ！　この事は誰にも話しませんので！　そ、それでは！」

「あ、ちょっと！？」

そしてその女子生徒は言いたい事だけ言うと、キュルケの呼び止める声を無視してそのまま走っていく。

「ま、待ちなさいよ！」

キュルケは勘違いされた事に気付き、彼女の誤解を止めようと追い掛けた。

「だ、誰にも言いませんから助けてー！」

「誤解よーっ！」

そしてそのまま二人共見えなくなっていってしまった。

後日、キュルケが同性を誘っていたのを邪魔した生徒が犯されそうになったという噂が流れていたのはまた別の話。

第二十一話　イタリアーノなルチアーノ

本日の出来事。タバサが甘やかされて育った勘違い貴族の一人、ロレーヌくんと決闘して完勝しました。

「……あの娘強いのね」

「肯定です。けどカリーヌ様には勝てないでしょうね」

「エルフすら裸足で逃げ出す化け物ですです」

うんうんと三人一緒に頷く。相変わらず周囲の人間から距離をとられているので、僕達二人と変態メイド一匹は落ち着いて彼等の戦いを観戦する事ができた。

この戦いが終わったという事はそろそろ褐色ビッチがパーティーで露出。それからチビメガネの本棚が焼かれて、次に二人が決闘。勘違いに気付いて友達になって、最後に犯人は逆さ吊りにされるって感じだったかな。

やるなら徹底的って言葉を知らないよね。僕が犯人側ならキュルケには何人か男を雇ってトリスタニアでアヘ顔ダブルピースエンド。タバサはメイジを何人も雇って暗殺エンド。もしくはタバサの一番大事な母親惨殺エンドにでもするんだけどなぁ。ちなみに反対側ならロレーヌくんには最初の決闘で断髪イベント、懲りなかったら更に去勢エンド。キュルケに嫉妬して嫌がらせしたヤツらには取り巻きの男を使ってアヘ顔ダブルピースエンドにでもするのに。大物貴族に手を出したんだから没落エンドもあり？

「アリアがなんかいつもより楽しそうな笑顔になってるわ。うわー、こわい」

「お嬢様の笑顔には愛想笑いと邪悪な事を考えている時の笑いの二種類しかありませんよね。今回は邪悪な方でしょうか」

普通の笑顔もあるよバカ。

「ちなみに私的には大乱交アヘ顔ダブルピースエンドが良いと思います」

「いきなり何の話よ」

勝手に考え読んで勝手に意見出さないでください。

「それでは私は仕事に戻りますので」

「学院のメイドに変な事教えるんじゃないわよ？」

たぶん手遅れですね。去っていくフランシアを見ながら、僕はそんな事を考えていた。

「そろそろ私達も行きましょ」

「イクんですか？」

「……？　最後までいたら厄介事に巻き込まれちゃうかもしれないじゃない」

荒れた場所を直せーとかですかね。

「ほら行くわよ」

「あ、待って。最後に言わなきゃならない事があるから」

「……まぁいいわ。先に行ってるからね」

ルイズが去っていくのを背中で感じながらガクブル状態のロレーヌくんを指差す。

「犯人はお前だ！」

いきなりの僕の発言でロレーヌくんもタバサもギャラリーもはてな顔。でも事件が始まる前に犯人を当てる探偵さんができて満足したからあまり気にしない。

☆

そしてキュルケが露出してその快感に目覚めるかもしれない舞踏会の日。僕は男の恰好でそれに参加していた。

髪を後ろで結んで、胸を無くして、服装を変えて、口調を変えて、声を変えて、名前を変えて、それだけで美少女は美男子へと変わる。ちなみに声は小野坂昌也。

「やぁ、マリア久しぶりだね。一年ぶりくらいかな？　元気だった

かい？　少し見ない間にすっごく美人に変わってしまったようだ」

「人違いだと思いますわよ？　私の名前はエリザベスですから」

「驚いたね。名前まで変えたのかい？」

普段話す機会のない上級生に声を掛ける。彼女の名前はエリザベス。もちろん僕にはマリアなんて女性と燃え上がった夜など存在しない。

「私の名前は生まれた時からエリザベスですわ」

「確かに人違いみたいだ。残念ながらマリアは君みたいに魅力的ではなかったからね」

「口が達者なようですわね」

「達者なのは喋る口だけじゃないさ。キスの方も君を満足させられると思うね」

「あまり軽薄な方は好みではありません」

「それは残念だ。けど気になった女性には声を掛けなきゃ気が済まないんだ」

クールな口調で気取っていても所詮はトリステイン人。いきなりこんな風に口説かれる経験などあるはずがなく、朱色に染まった頬のせいで照れているのがまるわかり。

「……貴方、お名前は？」

「ラパンさ。いずれ君の最愛の人の名前になる」

「ラパン（うさぎ）？　寂しくて死にそうだから私に声を掛けてきたのでしょうか」

エリザベスは口元を隠しながらクスクスと笑う。高貴な、育ちの良いお嬢様タイプのお姉様ってところだろうか。経験上、こういう女性にはたまにちょっと変わった性的趣向を持つ人間がいる。

「そう、うさぎは寂しいと死んでしまうんだ。君の愛で俺を助けてくれないかい？」

「マリアさんとやらにお願いしたらどうですか？」

「残念ながら一年前にフラれてしまってね。毎日愛を囁いてくる男はうんざりだそうだ」

「相性が悪かったみたいですわね」

しかしながら流石はトリステイン人。ガードが固く、ちょっとやそっとじゃ切り崩せそうにない。美形の男に積極的に口説かれているのは嬉しいようだが、エリザベスはそれでホイホイ着いてくるようなバカな女ではないらしい。

「君との相性はどうかな？　毎日愛を囁いてくれる男は好きかい？」

「私一人に囁いてくれる人は好きですわ」

「君以外の女性なんて君の魅力を知ってしまったら興味を失ってし

まうよ」

「お上手ですわね」

「ただ本音を口にしているだけさ。君の前だとついつい隠したい本音まで話してしまう」

「……本音？」

「そう、本音さ。一目見た瞬間から君の姿は僕の心を捕えて離さない。僕の視線は君を捉えたまま離れない」

「な、何を……」

僕はエリザベスの頬を掴み、強引に瞳を合わせる。流石の彼女もようやく言葉にも照れが混じってきた。

男は色気に弱い、女は積極的な愛に、誠実な愛に弱い。もちろん僕に誠実な愛などないのだが。

「ふふ、さて今日はせっかくのダンスパーティーだ。そろそろ一曲どうですか？」

「……突然ですわね」

「言葉だけじゃなく仕種でも愛を語りたくなってね」

「……本当に口が達者ですのね。いいですわ。貴方の求愛ダンスとやらを見せてもらいましょうか」

「着いてこれますか？　レディ」

「貴方の方こそ遅れないでくださいね？　ジェントルマン」

手を取り、足を踏み出し、くるくると回っていく。1、2、3、1、2、3、1、2、3……。軽やかにステップを踏みながら中央へと近付いていく。

僕は社交界に出席する機会が多かったという訳ではないが、ダンスは男性用も女性もステップを覚えさせられていた。

「お上手ですわね。達者なのは口だけではないみたいでしたわね」

「素敵な女性に興味を抱いてもらう為にはいろんな努力が必要なのさ」

ちなみに前世では盆踊りすらマトモに踊った事がありませんでした。見ている方が滑稽で面白かったので。

「他にはどんな事を？」

「たいていのことは――」

「きゃあああぁぁぁあああ！！！？」

踊り始めてまだ時間が経っていないのに、突然の悲鳴によって僕達のダンスは中断されてしまった。

足を止めて、悲鳴の先を見る。

「まぁ……」

エリザベスが口元を手で覆い隠しながら驚きの声をあげる。

そこにはドレスを魔法で切り裂かれ、下着姿にされてしまった褐色ビッチの姿があった。

「彼女に露出癖がある訳ではなさそうだね」

「誰があんな酷い事を……」

主演男優はヴィリエ・ド・ロレーヌくんです。脚本はシャネーなんとかだったかな？

「……エリザベス。悪いけど俺は彼女のところに行くよ。あんな姿で人前に出されている女性を見捨てる訳にはいかないからね」

「周りで見ている男達に聞かせてあげたい台詞だわ」

僕はエリザベスから離れ、テーブルクロスを何枚か引き抜いてキュルケに近付いていく。

「失礼、ミス。流石はツェルプストー……情熱的な演出を考え出すようだね。けれどいくら誰に見せても恥ずかしくないスタイルとは言え、その姿をされていては俺達男は恥ずかしがって声も掛けられない。どうか、コレで身体を隠して貰えないだろうか。暑がりのミス・ツェルプストー」

「……あ、あら、そうね。じゃあ、好意に甘えさせていただこうかしら、ミスタ」

キュルケは僕の意図を理解したようで、辱められたなんて態度を噫にも出さずに頷く。

そして僕はその言葉を聞いて、彼女に何枚ものテーブルクロスを巻き付け、糸で縫い付ける代わりに錬金で引っ付け、即席で純白のドレスを作り出した。

「あら、器用なのね」

「君にはリコリスの花のような真っ赤なドレスが似合うと思うが、あいにく白いものしかなくてね。これで我慢してくれるかい？」

「ええ、ありがとねミスタ」

「では、ごゆっくり」

と、告げて僕が離れていくと、時期を見計らっていたロレーヌくんがキュルケに近付いていき、何やら話している。

どうせタバサ怪しいよー。たぶん犯人だよー。なんて言っているのだろう。

「おかえりラパン」

「ただいまリズ」

「紳士的なのですわね。素敵だったわ。私、少し嫉妬しちゃったかしら」

エリザベスは自分の元に戻ってきた僕にクスクスと上品な笑みで、冗談を飛ばす。

「ありがとう。君が嫉妬してくれたなら格好付けた意味があったかな？」

僕はそれに笑いながら返した。

「パーティーはまだ終わっていないようですけど、まだ付き合ってくれますわよね？」

「もちろん。……パーティーの後も君が良ければね？」

そしてウインクをして、彼女に手を差し出した。

「ではもう一曲踊りましょうか。レディ」

「喜んで。ジェントルマン」

キュルケもタバサも放置して、パーティーが終わるまで、僕はずっと彼女と踊り明かした。

ちなみにルイズが僕を捜してたけど見付からなかったとかなんとか。

第二十一話　イタリアーノなルチアーノ（後書き）

リコリス＝彼岸花、曼珠沙華。

エリザベスさんは名前があるモブキャラです。たぶん再登場はありません。ちなみにエリザベスの名前は我等が女王様から。

第二十二話　お仕置きは最後まで

なんか炎がばーっとなったり、風がびゅーんってなったりして、結局決闘の最後はタバサの勝利で終わった。そしてお互い決闘中に誤解だった事がわかり、隠れていた真犯人をキュルケがお仕置きしてジ・エンド――で終わらせないのが僕だった。

いくらなんでも可哀相だと感じた正義感が有り余っている僕は、ついつい彼等を助けてしまったのだ。

「な、なにアレ……」

「う、うわぁ……」

「変態すぎる……」

翌朝、塔に逆さ吊りされて失禁している火傷だらけの生徒達の姿がそこにはあった――はずだった。

しかし流石に一晩中逆さ吊りは可哀相だろうと思った僕がちょっと変えた。

彼等は昨日キュルケ達が決闘した広場で、今見世物になっている。お腹に『私はドMです。もっと蔑んだ瞳で見てください』と書かれた紙が貼り付けられ、頭は仏教徒にでも改宗したかのようにスキンヘッド。ギャグボール、鼻フック、目隠しの変態装備、亀甲縛りされながら三角木馬の上に座っている状態でだ。

ちなみにロレーヌくんは失禁姿は可哀相だから服装を女物にして、

トネー・シャラントをリーダーとする女性陣は、流石に服を変えるのはアレだから、失禁が気にならないように身体中に山芋を塗っておいてあげた。

「な、なによアレ……」

「……驚天動地」

キュルケとタバサまで驚いているようです。お仕置きから助けてしまってごめんなさい。

「ち、ちょっとアリア、あんたでしょアレ？」

そんな風に生徒達の感想を確かめていたらルイズがやってきて、耳元に顔を近付けボソボソと尋ねてきた。

バレテーラ。

「何をおっしゃるうさぎさん」

「うさぎはアリアでしょうが。てゆーかああいうのは自重しなさい！」

「あいたたたたたたっ――」

耳を引っ張られて痛みに悶える。最近のルイズはなんか暴力的です。

あと人間だよバカ。

あ、ちなみに何をおっしゃるうさぎさんは『うさぎとかめ』が由来だそうです（豆知識）。

「あんまりいろいろやってるとあんたの家潰されちゃうわよ？」

「やられる前にやれ、潰される前に潰せですよ」

「……本気でやれそうなところが怖いわ」

未来の知識あり、各家の子息の秘密握ってる状態で誰が刃向かえるのでしょうかね。

「一応ルチアーノ伯爵家ってウチには負けるけど由緒正しき家系なのよ？　とにかく迷惑掛けないようにしなさいよ？」

「自慢ですか？」

「心配してやってんのよ！」

むしろヴァリエール家の方が心配ですけどね。男が生まれていなくて、性悪長女は未婚、病弱次女は可能性なし、三女は学院で毎日爆破テロ。公爵に同情してしまうですよ。

てゆーかエレオノールはいつになったらウチのお兄様を落とすのやら。婚約してみて反応伺ったりしてるですけど、未だに進展なしとは。

でも我が兄も結婚してないのを考えてみるともしかして脈あり？

ヘタレとヘタレの２６歳未婚コンビって結構お似合いですね。マ

ゾとサド的な関係も含めて。

でもルイズはマゾだから実はエレオノールもマゾ？　気が強い人、ツンツンしてる人はマゾっぽいですし。

「ルイズルイズ」

「なによ？」

「エレオノールはマゾですか？」

「知らないわよ！　いきなり何なのよ！？」

やっぱりルイズも知らないですか。いや、知ってたらどんな関係なのか疑うですけどね。

「てゆーかアリア、なんであんな事やったのよ？　また暇だったからとかそんな理由？」

「いやいや、僕は彼等を助けたのだよ！」

「はいはい嘘嘘」

逆さ吊りだと頭に血が上ってうんたらかんたらどうたらこうたらで障害とか残っちゃうかもしれない。でも僕にはまだ年若い彼等がそんな事になるのを黙って見ていられる程鬼畜でも外道でもなかった。

だから地面に降ろしてあげた。でもただ解放しただけだと懲りないかもしれないし、キュルケ達もお仕置きが不十分だったと勘違い

してしまうかもしれないから、少しお仕置きをした。

これは僕の優しさですよ。

「実は彼等はこれよりももっとひどい目に遭ってたんだよ。で、普通に解放されたらまた同じ目に合わされる気がしてこんな感じにしたですです」

「これよりひどいって、そんな悪魔みたいな事するヤツいる訳ないでしょ！」

「その言い方だと僕が悪魔一歩手前みたいなんだけど」

「アリアは悪魔でも魔王でも地獄に付き堕としそうじゃない」

僕はいったい何ですか。

「……本当の理由は？」

本当に善意からの行動なのにしつこいよルイズ。

僕は目薬（中身は水、ケースは硝子製）を使って瞳に涙を溜めて、うるうるとした目でルイズを見つめる。

「うっ、な、なによ？」

「本当だもん……」

可愛い容姿で産んでくれたお母様に感謝。ルイズも涙には弱いのか、どんどん強気な態度がとれなくなっていく。

「で、でも――」

「嘘じゃないもん……」

「あーあ、もう！　わかったわよ！！」

そしてはぷいっと顔を背けながら陥落してしまった。

涙は女の武器という言葉があるけど、女だけの武器ではないみたいですね。僕も小動物のうるうる攻撃には勝てないし。

「はぁ、狡いわよアリア……」

ルイズは頭を押さえながら溜息を吐く。

賢いと言ってほしいです。

「ねぇ、お取り込み中みたいだけどちょっといいかしら」

「要件有り」

突然背後から二人の声。振り向くとそこには褐色ビッチと発育不良メガネがいた。

ルイズは宿敵ツェルプストーの登場で眉間に皺を寄せる。

「なによ」

そして無愛想な返事をした。

「これやったのアリアなの？　ああ、安心して。聞いてたのは私達だけだから」

「心配無用」

キュルケは変態軍団を指差しながら問い掛け、その言葉を聞いてルイズが少し焦り出すと自分達だけしか聞いていないと付け足した。

そしてタバサが杖をアピールしながら更に付け足す。どうやらサイレントを使っていたようだ。

「あ、あんた達には関係ないでしょ！？」

「元は私達の問題なのよ。関係ないのはヴァリエールの方でしょ？」

「な、なんですってぇ！？」

不敵に笑うキュルケの挑発に見事に乗せられるルイズを見て、僕はクスッと笑う。

なんだかようやく原作を見たような気がする。

「まぁ、だから私達には理由を聞く権利があるって訳」

「大義名分」

「ち、ちょっと！　無視すんじゃないわよ！！」

「もちろん教えてくれるわよね？」

「詳細所望」

「聞いてるの！？」

きゃんきゃんうるさいルイズを無視して僕に詰め寄る二人。

てゆーかタバサのキャラが何か違うような気がする。

「僕がやったかというと肯定。理由は特になし……どう満足？」

「ちょ、私に言った理由と違うじゃない！」

「り、理由ないの！？」

「吃驚仰天」

僕は驚く二人にコクコクと頷く。

別に怨みも妬みも何もないです。

「貴女ってドS？」

「加虐趣味」

「さっきから無視してんじゃないわよ！」

「いえ、僕はむしろマゾです」

「「絶対嘘よ！！！」」

「虚言確実」

僕のM発言を彼女達は一斉に完全に否定した。どう考えても有り得ないと、首を横にぶんぶんと振った。

まさかそこまで全力で全員に否定されるとは思わなかったであります。

「うーん……でもやっぱり貴女面白いわね。ヴァリエールなんかじゃなくて私達と仲良くしない？」

「熱烈歓迎」

「ちょ、ちょっと！？」

二人の突然の勧誘。それを聞いて突然焦り出すルイズ。

唯一の友達だもんね。

「私達と“も”ならおーけー。僕は欲張りですから」

「あ、アリア――って、なんでツェルプストーなんかと仲良くする気なのよ！？」

僕は彼女達の誘いを半分承諾する。

ルイズはそれを聞いて、自分が見捨てられない事に感動していたみたいだが、よく考えてみると自分の宿敵と仲良くなると言っている事に気付き、怒り出す。

でも僕達はそれを無視する。
「改めてよろしくね、アリア」
「夜露死苦」
タバサそれヤンキーみたい。
「よろしくですです」
「さっきから無視してんじゃないわよぉーっ！！！！！」
たたたたんたんたんたーん。
アリアに愉快な仲間が増えた。

◇◇◇

「タバサはなんでそんな話し方をするの？」
「本を読んでいて格好良い話し方だと思ったから」
「真似？」
「そう。書物で読んで憧れた」
「ちなみにどんな人ですか？」

「夢幻の冠帯」

「ちょ」

第二十二話　お仕置きは最後まで（後書き）

なんでゼロの使い魔の二次創作とか書いているのだろうか。しかもこんな主人公のヤツを。

シャナの二次創作で自分を投影したキャラクターとヴィルヘルミナ様の百合ん百合んな小説が書きたい。

第二十三話　魔剣デルフリンガー

サイトくんが来た時の為に武器を買っておいてあげよう。ギーシュ戦でボロボロになるの可哀相だし。

そう考えた僕はルイズと二人でトリスタニアまで来ていた。

文字を知らない平民でもわかるように看板などが絵で表現されているのを見ると、ＲＰＧゲームを思い出すですです。

「こんな汚いところに何の用なのよ？」

「着けばわかるですよー」

ルイズは裏通りにあるチクトンネ街の薄汚れた道を見て不満を言いながらも僕に着いて歩いてくる。

ルイズが感じている不満なら僕も感じている。　臭いし、汚いし、治安も悪いし、本来の僕なら街ごと焼き払っているところだ。

だが今回はそういう訳にはいかない。ガンダールヴ取り扱い説明書で、魔法を吸収する効果のある、本来なら国宝レベルの剣、おしゃべりな６０００歳のじじい、魔剣デルフリンガーを手に入れなければいけないのだ。

それまでこの街の安全（僕からの危険がない事）は保証されている。

でも街の一部（住民）の安全は一切保証してやるつもりはない。

「あ、すいません貴族様」

僕にドンッと平民の、服が小汚いおじさんがぶつかってきた。

そして謝罪してそのまま僕から離れようとしていく。

「ぎゃあぁあああああああ！！？」

「えっ」

突然叫び声が聞こえてルイズは驚きの声を出す。

それから間もなく僕の後ろで人が倒れる音がした。

「……スリ？」

「いえーす」

僕はコクコクと頷いた。

平民は絶対に貴族に危害を加えない訳ではない。

――バレなければいい。

誰でも一度は考えた事があるだろう。僕は何度も何度も考えた事がある。

つまい食い、万引き、悪戯、強盗、殺人、痴漢、カンニング、未成年の飲酒・喫煙、ギャンブル、セクハラなど。人間はダメな事を

『やるな』と言われて『はい、わかりました』と簡単に納得できる生き物ではない。絶対にやらない生き物ではない。バレなければ問題ないと行ってしまう生き物だ。

成功すれば危険なんてないと失敗し、失敗してもその失敗を反省せずにまた過ちを繰り返す人間だっている。

――貴族に逆らってはいけない。

破れば災いが降り懸かるとわかっていても破ってしまう平民はたくさんいる。

今回もそんな平民の一人。バレなければ大丈夫。バレても子供、しかも女だから大丈夫だと犯罪行為をしてしまった。

そして僕がそれに気付かないはずもなく罰を与えたのだ。

「おじさん……悪い事しちゃダメだよ？」

「それアリアに言われたくはないわよね」

失礼だよルイズ。

スリを働いた男性の、僕のお金が入った袋を握ったのであろう右手には『私はスリです』と焼き印が刻まれていた。

ハルケギニアにはマジックアイテムという時には科学の技術を上回る魔法の力を使って作られた道具がある。

僕の財布もそれの一つ。登録された人間以外が触れると罠が発動

する、なんて遊び心溢れたものだ。

これで彼にはこの過ちのせいで、その右手のせいで、人から信用されない生活が待っているだろう。

でも僕は同情はしない。罪には罰が必要なのだ。僕以外の人間には、が最後に付くけどね！

自分大好き自己愛主義な僕です。

「――と、目的地到着」

「武器屋？　あんたこんなとこに用があったの？」

「うむうむ～」

ピエモンの秘薬屋を通り過ぎた先に銅の看板、剣が描かれたものを見つけ、僕達はその中に入った。

「失礼するんだぜーっですよ」

「き、貴族様！？　うちはまっとうな商売をしてまさぁ。お上に目を付けられるような事はしてませんぜ？」

「貴族を見た瞬間にそんな言葉が出るっていうのは『ウチの店にはやましい事があります』って言ってるようなものですね」

「う、うげっ、勘弁してくださいよ貴族様ぁ……」

パイプを吹かしていた武器屋の店主は僕が言った言葉に嫌そうな

顔をする。
警察を見たら条件反射で逃げ出したくなるような感じと同じだろうか。
「まぁ、安心してくださいな。お前が麻薬を売ってようが、貴族をぶち殺していようが気にしないですから」
「いや、それは気にしなさいよ」
「そ、そういうもんですか？」
「コイツは特殊だから気にしないでいいわよ」
「は、はぁ……」
変な貴族だなぁ、なんて思っているであろう店主。僕はそんな店主や僕に失礼なルイズを無視して隅にある安物の剣の束を漁り出す。
「き、貴族様？」
「何ですか？」
「そんなボロより良いのありますぜ？」
「いらにゃーい。だいたいこんな細腕で触れるのは杖くらいですよ。あ、でも冷やかしではなくて普通に買い物していくですよー」
「は、はぁ……」

「気のない返事ばかりですね。そんなんじゃモテないですよー」

そう言いながら漁り続ける。

しかしデルフリンガーは出て来ない。てゆーかどれがデルフリンガーかわからない。

「あるぇー？　店主さん、おしゃべりな魔剣ちゃんはどこですか？」

「あんた、インテリジェンスソードでも探してるの？」

「うむ、インテリジェンスソードのデルフリンガーを買いに来たのですよー」

「へ？　ああ、そういえば今日はデル公のヤツが静かだなぁ。おい、どうしたデル公？」

店主さんが声を掛けてもデルフリンガーは答える事はない。それに店主は首を傾げる。

「おかしいなぁ……。いや、普段は貴族様だろうが何だろうが失礼な事を言いやがるおしゃべりなヤツなんですけどね」

「どれですか？」

「ああ、ちょっと待ってくださいね」

そう言って、店主はカウンターから出て僕の漁っていた剣の束までくる。

「おお、あった！　貴族様、これでさぁ。おい、デル公、挨拶しやがれ！」

「勘弁してくれ親父ぃ」

そして一本のボロボロに錆びた剣を引き抜き、僕に差し出した。

その剣から情けない頼りない声が聞こえてくる。

……あの母親の悪行は武器の世界にまで轟いているのだろうか。

「あ？　なんでいデル公。いつもの元気はどうしたんでぃ」

「頼むから見逃してくれ！　６０００年分の剣生経験が叫んでんだ！　あいつに関わったら不幸になっちまう！！」

「武器なんて相手を恐がらせる道具にまで恐れられるなんて流石はアリアだわ」

「もしかして僕は何を言われても傷付かないとか思ってる？　ガラスのハートの持ち主なんですよ僕は？　だから媚びへつらって僕に気を使って話せよ」

会った事もない人間に恐れられるのは経験豊富だが、初対面の剣に怯えられるのなんて初めてだ。傷付く。そこに更にトドメを刺そうとしないでほしい。

「そのガラスにはスクウェアクラスのメイジが固定化を掛けているんでしょ？　あんたのハートが普通のガラスなら全人類のハートは紙屑よ」

「傷付ける側の人間は傷付けられる事に慣れてないものですよ」
「慣れていなくてもロンズデーライトよりも固いハートを壊せる人間なんていないわよ。てゆーか本当にアレを買うの？」
ルイズは未だに店主が差し出したままぎゃーぎゃー騒いでるデルフリンガーを見て尋ねる。
「もちろん。僕は変わったものが好きなんだぜ？」
「ぎゃー、離せッ！！」
僕が店主が差し出すデルフリンガーを握ると、彼はカタカタとうるさい音を出しながら更に騒ぎ出す。
けれど僕はそんなデルフリンガーを無視して店主の方を見る。
「店主さん、これぐらいでいいかにゃー？　あ、やっぱり面倒だからこれぐらいでいいですよね？」
そして財布から５００枚ぐらいの金貨を取り出し、カウンターにジャラジャラと流し置いた。
「あ、へ、へえ。本来なら５０でいいんですが、貴族様がそういうなら」
「おい親父！　俺を見捨てんのかよ！」
「うるせぇデル公！」

それを見て店主は上機嫌になり、デルフリンガーは不機嫌になる。

けれどどんな機嫌になろうと変わらないものは変わらない。今日からデルフリンガーは僕の所有物(おもちゃ)だ。

「うるさい時はこの鞘に突っ込めば大丈夫ですんで！　あ、研ぎ石もセットにしておきやすね」

「親父ぃぃ！！！」

へへへと愉快そうに笑う店主。

処分に困っていたものが１０倍の値段で売れたのがよっぽど嬉しいのだろう。

本来は値段が付けられないほどの貴重な宝剣なんだけどね。

「ありがとうございやした。また是非お越しください」

「親父ぃぃ！！！」

「買われたくないと訴え商品なんて面白いわね」

「貴族の娘っ子。助けてくれ！！」

「諦めなさい」

「ちくしょう」

デルフくんは帰ったらお仕置きかな。

たたたたんたんたんたーん。

アリアは魔剣デルフリンガーを手に入れた。

第二十三話　魔剣デルフリンガー（後書き）

ロンズデーライト＝純粋なものならダイヤモンドより５８％硬いと予測されている炭素の同素体。

第二十四話　風ったら最強ね！

朝、目が覚めて真っ先に君の事が思い浮かんだ。だから思い切って――

「おはよー」

「あいたたたたた……えっ、何？　えっ？」

「目覚めのキスならぬ、目覚めのアキレス腱固めー」

「普通にキスしなさいよ！　いや、本当はよくないけど！　でもキスの方がマシっていうかなんてゆうか……てゆーかなんでいたたたたたた……朝から関節技！？」

「愛情表現ー」

「愛が痛い！！」

ついやっちゃったんだ。

朝起きて身支度を整えて、それから向かいのルイズの部屋に禁止されているアンロックを使って侵入。

そして気持ち良さそうにベッドで眠っているルイズを見たら我慢（性的な意味ではない）できなくなった僕は襲って（性的な意味ではない）しまったんです。

「もうしない可能性もあるから許してほしいですすでーす」

「いたたたたた……し、しない可能性もあるってするつもり満々じゃない！　せめて嘘吐きなさいよっ！」

「じゃあ、しない（嘘）」

「か、括弧の中身は心の中でいいなさ――いたたたたたたたたたた」

僕はルイズのアキレス腱に更にキメる。最近口が悪いルイズへのお仕置きとか仕返しではない。断じて違う。

――そんな僕達の爽やかな朝。

☆

授業というものは学ぶ意欲がないものにはつまらない。教える側が相手の考えを広げさせるものではなく、自分の考えを押し付ける授業をしていたら更につまらなくなる。

「諸君……最強の系統魔法を知っているかね？　――そう風だ」

まだ誰も何も言っていない。けれど独自解釈して授業を進める彼の名前はギトー。疾風の二つ名を持つスクウェアクラスのメイジ。とにかく『風最強。それ以外はダメ』の考えを延々と語るアホだ。

彼の授業は全生徒、風の系統のメイジにも好かれてはいない。

今回の授業もいつも通り『風最強』を延々と語っている。僕達生徒は一部を除いて全員、それをうなだれながら聞き流すだけで何もしない。

貴族なんて基本的にみんな豚だ。与えられるものに満足して、奪い取れるものに満足して、自分の努力で勝ち取ろうなんて考えを持った人間はいない。

魔法に対してもそれは同じ。厳しい教育や実戦の経験があるものは少数だ。

みんないつか自分の眠っている才能が目覚めて、なんて中学みたいな考えで怠惰に過ごしている。だからメイジにはドットやラインがたくさんいて、トライアングルやスクウェアは少ないのだ。

ライン程度なら才能は基本的にいらない。例外はあるが両親がメイジなら誰でもそれぐらいにはなれる。

でも僕の学年のトライアングル以上は三人。内二人が留学生。一応僕はスクウェアだけどそれは前世とか知識込みのチート。トリステインオワタだね。

「ちょっとアリア。ちゃんと話し聞いておきなさいよ」

隣でガリガリと勉強していたルイズが僕に注意する。委員長ですかお前は。

「筆記試験は『風が最強です』って書いておけば大丈夫だって」

「ぶっ、あ、有り得そうね」

ルイズはそれを想像してみたのか、笑いそうになってしまう。けれどそれを必死に堪えた。

「おほん……ミス・ヴァリエール。授業中には私語を慎みたまえ」

けれどそれはギトーにはバレバレだったようですぐに注意の声が飛ぶ。

授業中の私語の多さならギトーの勝ちだと思うのですが、それを言うのはダメですかね？　授業という名の俺様語りをしているですし。

「それともミス・ヴァリエールには私の授業なんて受ける必要性がなかったかね？　何て言ったってあのヴァリエールの人間なのだから。ミス・ヴァリエール……その名も高きミス・ヴァリエール――」

そこで一旦、ギトーは息を吸い込んで溜める。

「――よろしい。ではその実力を見せてもらおうではないか。何でもいいから私に向かって呪文を唱えたまえ。なーに、心配はいらない。いくら君が“あの”ヴァリエールの人間だからと言っても、教師には……風の系統のメイジたるこの私には傷一つ付けられないのだから」

ギトーは自信満々に、髭を触りながら言葉を紡ぐ。僕はそれを聞いて失笑した。

「せ、先生。やめておいた方が……」

「心配はいらんよ。私もきちんと手加減はするからな」

ルイズの魔法の威力を知るらしい生徒の一人がそう言っても、ギトーは発言を撤回しない。それにルイズの心配をしていると勘違いしているようだ。

僕は流石に可哀相に思う。あの人間爆薬庫の一撃を受けなければならないとか、僕なら絶対に逃走を選ぶ。

挑発も効いたようで、ルイズはすぐに立ち上がり杖を構える。プルプルと震えている様子からしてかなり苛立っているようだ。

それに対してギトーは余裕。杖をくるくると手元で遊ばせながら魔法がくるのを待っている。

「いきます」

「遠慮はいらぬ」

「――《錬金》」

ルイズが呪文を唱えるとドッカーンと大きな音がしてギトーが煙に覆われる。

そしてそれに続いてバタンと人が倒れる音が聞こえた。

それから教室内はしーんと嫌な沈黙に包まれる。

「し、死んだーッッ！！？　ルイズがついに爆発で人を殺したぞー！！」

「うわー！！」

「や、やりやがった！？　いや、殺りやがった！！」

一人の生徒が叫ぶと、それを皮切りに教室内の全ての生徒が騒ぎ出す。

ルイズは「や、殺ってないもん」と可愛らしく否定しているが、殺人事件を起こした後だと全く可愛くない。

「せ、先生！？　ギトー先生！？」

煙が晴れ始めると、今まで嫌っていた生徒達もみんなギトーに近付いていく。涙を流す生徒までいるようだ。

「えっ……？」

しかし突然、その涙を流していた生徒は茫然とその場に立ち止まってしまった。

何があったんだろう。僕も気になってギトーに近付いていく。

そしてちょうど僕がギトーの元に到着した瞬間、煙が晴れ、ギトーの全貌が明らかになった。

「こ、これはある意味死んでるな……」

「……ああ、男として死んでる」

ギトーは生きていた。五体満足、一部以外何も変化のない姿で、目を回しながら倒れているだけだった。

生徒達はみんなその一部を笑おうとしたがある事に気付いて笑えなくなった。男子も女子もその表情が青ざめている。もしコレをくらったらと自分の姿とギトーを重ねてしまったのだろう。

「どうやって励ますよ？」

「いやー、ハゲ増しちゃいましたね、とか？」

「励ましてねぇじゃん！　ただの駄洒落じゃん！　てゆーかハゲ増したとかじゃなくてゼロじゃん！　一本も残ってねぇじゃん！」

そう、ギトーの頭皮から毛根が全て奪われていたのだ。床にすら一本足りとも残っていない。

生徒達はルイズを見る。

「……何よ？」

しかし視線が合うとすぐに逸らした。

髪は女の命。けれど男にとっても大切だ。ハゲた男がモテるはずがないのだから、若い男にとってそれは困る。

いつも失敗魔法と馬鹿にしていたあのルイズの魔法はこんなに恐ろしい事ができたのか。と生徒達はルイズが距離をとる。

ルイズに軽いイジメのような事、悪口を言った事がある生徒は、仕返しを恐れて更に倍以上後ろに下がる。

「『ゼロ』のルイズだ」

「ああ、全てを『ゼロ』にする魔王様だ」

「おい、聞かれたらお前等も『ゼロ』にされるぞ！」

生徒達はルイズに聞こえないようにひそひそとやり取りをする。びくびくと怯えながら機嫌を損ねてしまう事を恐れて涙目になっている生徒までいる。

これが原作とは違う意味の『ゼロ』のルイズがハルケギニアの、ここトリステインの、このトリステイン魔法学院に誕生した瞬間だった。

第二十四話　風ったら最強ね！（後書き）

勉強しよう→気付いたらネットにいる→気付いたら執筆している→気付いたら投稿している。あるある。

ちなみに寝起きにアキレス腱固めは危険ですので注意してください。友人は泣きました。犯人は知りません。たぶん幽霊です。もしくは妖怪。妖精の可能性もあります。

あ、やる場合の注意として思ったより暴れられて怪我をしないように。犯人が言ってました。

第二十五話　ルイズの方が主人公っぽい

また今日が始まった。朝起きて最初にそう感じてしまうのは私がまともな魔法が使えないとか、友達が少ないからとか、朝が苦手だからとかが理由ではない。私の幼なじみが今日も何かやらかしてその結果私に不幸が起きるのがわかっているからだ。

あいつが近くにいると私が不幸になるはイコールで結ばれている。魔法学院に入学してから何ヶ月か経ち、何故か昔と比べたら自重しているようだが、それでも同性愛者と噂されたり、にっくきツェルプストーのホルスタインと仲良くなってしまったりいろいろな不幸（できごと）に巻き込まれている。

それでも今でも友達関係を続けているのだから私ってすごいわ。始祖ブリミルでも泣いて謝るレベルの性悪の幼なじみなんてやってるんだから。

「あ、ルイズルイズ。ちょっとクーデター起こさない？　あのアホ姫とかならすぐに降伏させられるですよ。それにその方がアンアンにとっても幸福です」

そんな幼なじみ、アリア・ルチアーノが出会い頭に言った言葉は朝の挨拶ではなく、何故か限りなく貴族らしからぬ物騒な言葉だった。誰かに聞かれたら反逆罪で一族全員晒し首にされてもおかしくない。

「はぁ……あんたねぇ。朝最初に会ったらまずは挨拶でしょ？」

「挨拶代わりに右ストレートを――」

「普通に挨拶しなさいっ！」

このように私の幼なじみはとても変わっている。

「おはようございますです」

アリアはふんわりと上品に笑いながらそう言った。

「……おはよ」

コイツは見た目はまぁ可愛らしい。黙っていれば誰もが見惚れるような容姿をしている。けれどその見た目に騙されてはいけない。綺麗な薔薇（はな）には棘があると言うが、アリアという花には触れたモノを腐敗させ、激痛を与え、永遠に苦しませるような猛毒がある。棘どころか槍で串刺しにされかねない。

アリアという人間は他の心にも身体に深いダメージを負わせる突然変異のエルフよりも恐ろしい存在だ。風の噂（と）では会わなかった時間（き）に実際にエルフを奴隷にしたとかなんとか。

「あんたせっかくこの学院では悪評がないんだからもっとまともにできないの？」

「誰かの顔色を伺いながら自分押し殺せって事？　そんなまともなんかクソクラエですです」

アリアの性格は誰にも矯正できない。何を強制しても彼は自分らしく強生する。

昔はそんなアリアに憧れた事もあった。けれど現実を知った今ではいつかアリアが世界に、社会に殺されてしまうのではないかという不安がある。

何でもできて何でもしたいように自由に生きるアリア。彼にこの世界は不自由過ぎる。

「大人になりなさいって事よ」

だから私は忠告する。幼なじみだから。大事なと、とと友達だから……。

無駄だとわかっていても。

「ルイズよりは大人ですけどね」

アリアは何故か私よりも大きな胸を張りながらそう言った。

「死ねッ！！」

私はアリアの脛を蹴りながら叫ぶ。しかしアリアはそれを軽々と躱して笑った。相変わらずムカつくヤツだ。

「だいたいあんたに何で胸があるのよ？　何をしたらそうなる訳？」

「メロンパン入れに――」

「服剥ぎ取ってフランシアの前に差し出すわよ？」

「――なってません」

またふざけようとしたので彼の数少ない弱点を利用してそれをやめさせる。私もあのメイドは苦手だがアリアにとってあのメイドは私のお母様への気持ちかける五くらいだ。まぁ、性的な意味で狙う人間が四六時中一緒にいるのだから仕方がないと思うけれど。

「ねぇ、突然だけどあんたの裸見た事ある人ってどれくらいいるの？」

「お父様とお母様と医者ぐらいですね」

「使用人は？」

「見せません。見せてません」

……怪しい。見た目通り女である方がつじつまが合う気がする。でも理由がないのよね。

「あんたって本当は女なんじゃないの？」

「僕は昔も今も未来も、前も今も男ですよ」

思い切って直接聞いてみてもアリアは否定した。そりゃあそうよね。まぁ、どっちでもいいわ。アリアはアリアなんだし。

私は妙な納得の仕方をしてこの話を自分の中でまとめた。

「そういえばルイズ。あのボロ剣何処にやったか覚えてますか？」

「いきなり何？　そろそろ食堂に行きたいんだけど」

廊下で長々と立ち話をし過ぎてそろそろお腹がぺこぺこだ。

「ご飯なら昨日食べたでしょ！」

「毎日食べさせなさいよ！」

「私にする？　僕にする？　それともア・リ・ア？」

「全部アリアじゃない！」

私はアリアの意味不明な言葉の全てにとりあえずツッコミを入れた。

アリアと話しているといつもいつも彼のペースに巻き込まれていく。けれどそれが嫌にならない辺り私も変わっているのだと思う。

「まぁ、それよりボロ剣の話ですよ。逃げ出しちゃったみたいなのですです」

アリアはニコニコと笑いながらそう言った。

ボロ剣ことデルフリンガーはアリアがこの前買った大きくて太い喋るインテリジェンスソードだ。主人（アリア）にとても怯えていたがいくら何でも逃げ出す事は不可能だ。

だから、

「あんたが何処かにやったんでしょ？」

という可能性以外ない。喋る事はできたが、アレは歩く事はできなかった。もしそうならさっさと逃げ出していたはずだ。

アリアは私の言葉を聞いてうーんと唸り出す。何処でなくしたのか思い出しているんでしょうね。

「確か……買った後は部屋に持ち帰って……」

その辺りまでなら私も見ていた。一緒に帰った後お互いの部屋に入るまでは一緒のままだったわよね。確かに引きずりながら部屋に入っていったわ。

「……床に突き刺して伝説の剣ごっこを楽しんで？」

下の階の住人が困っていないかしら？

「部屋にサイレントをかけて……それからデルくんにいろいろ本気で魔法をぶつけて……」

スクウェア・クラスの本気の魔法をあんなボロボロな剣にぶつけたとかどう考えても壊れるでしょうが。はいはい、これで話は終わ――

「それを続けてたらピカピカになって魔法を吸収し出して……」

――ってなかったみたいね。あのボロ剣、実は特殊な能力を持ってたのね。そのせいで苦しみが長引いたみたいだけど。

「……それから飽きるまで魔法をぶつけて」

いっそ一思いに殺してくれってボロ剣の叫びが聞こえてきそうだわ。って、叫び？　サイレントは魔法の音じゃなくてあのボロ剣の叫び声対策？　……本気で同情するわ。

「飽きた後は物理的なダメージを与えようと……ブレイドで攻撃して……」

もうやめて！　ボロ剣のライフはゼロよ！！

「……それも飽きた後は森の方に投げ捨てたんだっけ？」

「あんたは鬼か！　てゆーか抜き身の剣を投げんじゃないわよ危ない！！」

心の中だけツッコミを入れておこうとしたが限界だった。私はつい言葉を口から出してしまう。

そんな私を見てアリアは笑った。どうやらようやく反応したのが嬉しかったらしい。

「まぁ、そんな訳でデルくん捜しの探検に行こうぜ！　おやつは3エキュー以内ね！」

そして突然妙な事を言い出した。自分で捨てた物を捜しに遠足気分で探検？　まぁ、私に迷惑が掛かりそうじゃないからいいけど。

「いいわよ。で、いつ行くの？」

「今から！」

「今から！？」

前言撤回。朝食抜き&授業無断欠席はどう考えても迷惑だ。断っても無駄だからと安請け合いするものではなかったわ。

「ちなみに今から断ったら明日の朝、ルイズの部屋はカエルの住み処になってます」

そして今から断るのも無理。容赦ない脅し言葉によって私の退路は塞がれた。

ちなみにアリアはやると言ったらやる、やらないと言ってもやる。人の嫌がる事限定で。

「朝食は？」

「フランシアに用意させる」

「授業は？」

「オスマンの弱みは握ってる」

もうどうにでもなーれ。

私は諦めた。諦めてアリアに付いて行く事に決めた。ちなみに弱みとやらは気にしてはいけない。聞かなかった事にしておく。

「面白そうじゃない。私達も付いて行くわよ。ね、タバサ？」

「イエス、面白そうです、しょうがないから付いていってやるです。感謝するですよ？　人間」

そんな私達の会話に割り込む二人。汚いデカチチを晒すツェルプストーと何故かこの前と口調の変わった（棒読みだけど）タバサも参加するらしい。でもどうでもいい。

「そんな訳でしゅっぱーつ！」

「「おー！」」

なんか話がどんどん進んでいくけどどうでもいい。とりあえず私の不幸が全て宿敵（ツェルプストー）にいきますように。

第二十五話　ルイズの方が主人公っぽい（後書き）

普段以上に読み返したくない稚拙な文章。ちなみに稚拙（ちせつ）って読み方今日知りました。

第二十六話　デルフ捜索隊

魔法の森に封印された喋る魔剣、デルフリンガーをヴァリエール探検隊が追う……ッ！

密林の中を進むルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー、タバサ、フランシア、そしてみんなのアイドル、アリア・マヌエル・アダリッド・ド・ルチアーノ。

「誰がみんなのアイドルですって？」

彼女達はトリステインの魔法学院の近くの森に、始祖ブリミルの伝説の使い魔ガンダールヴが使っていたとされる『魔剣デルフリンガー』が隠されているという情報を入手し、その秘宝を得る為に実際に森に探索に来ていた。

「それにしても何処まで投げ捨てたのよ……」

桃色の髪のロリ少女、ルイズが釘宮ボイスで溜息混じりに、疲れたようにそう言った。

「誰がロリ少女よ誰が」

まだ森の中に入ったばかり、時間はあまり経っていないのにルイズはもうかなり疲れている様子だ。恐らく出発前に疲れるような事があったのだろう。しかも肉体的なものではなく、精神的なものであったと推測される。肉体的な疲労だったならそもそも魔剣捜索のような危険な行為に参加するはずがない。無謀だ、無茶だ、万全の

状態でも困難な冒険にそのような状態で行く程ルイズという少女は馬鹿ではない。だから彼女が今感じているのは精神的な疲労だ。

いや、もしかしたらこの予想は外れているのかもしれない。この先にいったい何が？　知りたい……見たい……行きたい！　そんな心の欲求がルイズを危険な場所へと誘っているのかもしれない。

どちらにしてもルイズは疲労している。だけどルイズは進む。この先に必ず幻のインテリジェンスソードがあると信じて。

ルイズの姿は、疲労はこの冒険で更に溜まっていっているような印象を受ける。危険な冒険への緊張感からだろうか。ルイズの顔色はみるみる悪くなっていく。

「お腹空いた」

……違った。

「てゆーかさっきからうるさいわよアリア。何ブツブツ言ってんのよ」

ルイズは不機嫌を八つ当たりかのように僕にぶつけようとす――」

「八つ当たりじゃなくて原因はあんたでしょうが。いいからちょっと黙ってなさい」

ルイズは少し僕に厳しかった。

☆

テイクツー。気を取り直してやり直し。

密林からは掛け離れた近所にある普通の森。朝だから薄暗いという事もなく、魔法学院の近所だから人が足を踏み入れないという事もなく、何処にでもあるような普通の森。熊の代わりにオーク鬼が出てくる危険性もあるけど、やっぱり普通としか言いようがない森。そんな森の中を僕達は進んでいく。

先頭を歩くのは好奇心旺盛なキュルケとその隣にタバサ。その後ろを歩くのが僕とルイズで、更に後ろからフランシアが従者らしく歩いてきている。これがよく言う『前門の売女（ビッチ）、後門の強姦魔（レイピスト）』な状況だ。売女に危険性はないが、強姦魔はオーク鬼とかエルフとかと比べ物にならないレベルでヤバイ。最近は特にヤバイ。起きたら拘束されていた時は杖を隠し持って寝ていて良かったと始祖ブリミルに感謝の祈りを5秒捧げたぐらいだ。

そんな危険人物の前方を歩きながらも常に後方に注意しつつ、いざとなったらルイズを囮に出来るように僕は歩く。

「ねぇ、そのインテリジェンスソードってどんなものなのかしら？
私達は見た事ないのだけど」

「さっさと言えです人間（棒読み）」

キュルケとタバサが後ろを向きながら歩くという器用な事をしながら話し掛けてきた。きっと人と話す時は相手の顔を見ろと親に厳

しく教わったのだろう。難しい状況ですら教えを守るその姿勢は見習いたくはないが尊敬する。

「大きくてボロボロで錆びた太い剣よ。なんかオッサンみたいな声で下品な喋り方をするわ。なんかアリアの魔法でピカピカになったらしいけど、どうせ魔法でボロボロになって投げ捨てられて壊れてるわね、きっと」

「ないない。一応伝説の剣ですよ？　僕が虚無の魔法でも使えない限りデルくんは壊せないですです」

「えっ、あんた虚無使えなかったの？」

と、ルイズが心底不思議そうな顔をする。ルイズは僕の事を何だと思っているのだろう。確かに基本的に何でも出来るが流石にそこまでチートになった覚えは一切ない。

「何言ってんのよヴァリエール。虚無は伝説の系統よ？　普通の娘に使える訳ないじゃない」

「……アリアが普通、ね。それだったらどんなに良かった事か」

ルイズはボソッと小さな声で呟いた。その失礼な言葉は隣にいた僕だけにしか聞こえなかったようで、キュルケもタバサも何の反応もしない。

どうやらルイズは僕を普通とは認識していないようだ。普通である僕を望んでいるようだ。彼女にとっての普通というのは個性のない人間、つまり何処にでもいる凡人の事なのだろう。しかし、個性が欠落した人間をはたして普通と呼べるのだろうか。誰にでもある

個性を欠如した人間など僕には異常としか思えない。それに普通じゃないからの僕、僕だからこそ普通ではない。普通を押し付けられた僕は『僕』と呼べるのだろうか。ルイズ曰く普通じゃない僕には答えは出せない。

「うーん、ないわねぇ」

「疲れたのですよ（棒読み）」

キュルケのぼやきに今度は何に影響されたのか知らないがタバサが棒読みで普段とは違う口調で返事する。

「面白そうだから着いてきたけど全然面白くないわ」

期待ハズレね、と言わんばかりに溜息を吐くキュルケ。いったい何を期待していたのだろう。

「こんな事なら、しかもサボるならトリスタニアにでも行っておけば良かったわ」

「グチグチうるさいわよ。あんたが勝手についてきたんでしょツェルプストー」

まだ険悪な仲のルイズが心底鬱陶しそうにキュルケに噛み付く。初期ルイズらしい姿を初めて見た気がする。

「ヴァリエールは心が狭いわねぇ。少しの愚痴も許さないなんて貴方の姉が婚約解消を何度もされてる理由がよぉーくわかるわ」

「なんですって！？」

立ち止まって睨み合う二人。険悪な犬猿の仲。売り言葉に買い言葉ですぐに喧嘩の始まりそうな空気になる。タバサは止める気がないのか近くの木陰に座って本を開き、フランシアは新しい獲物（ロリ）を見付けたからかそんなタバサにねっとりとした視線を送り、じっとりと観察するように見つめている。

「先祖代々人の相手を盗る事に長けたツェルプストーは他家の恋愛事情に詳しいのね。流石は売女（ビッチ）のツェルプストーだわ！」

「あ、あらあら言うわねぇ。恋人に逃げられるヴァリエールが悪いのにそれを棚に上げてよく口が回るわねぇ。ツェルプストーは火のように暖かいその懐に迎え入れて、恋に疲れた可哀相な殿方（ヴァリエール）に新しい恋を与（ツェルプストー）えているだけなのに」

もちろん僕も止める気はない。勝手にやってろですです、な気分だ。

「何よ！？」

「やる気！？」

お互い杖を出して向け合った。どうやら本格的に喧嘩が始まりそうな雰囲気だ。僕はそれを察して彼女達から離れ、タバサとは反対側の木の側の木陰に腰を下ろす。

「ひっ、ひぃいいい！　魔法は嫌だ魔法は嫌だ魔法は嫌だ魔法は嫌だ！　もう勘弁してください！　俺様壊れちゃうのぉおおお！！　らめぇえええ！！」

ガチャガチャガチャ、というやかましい金属音と共に悲鳴が聞こえた。突然の部外者の声にピタリ、と止まるルイズとキュルケ。タバサは何故か少し怯えていて、フランシアはそんなタバサを見て「美味しそうですね」と小さな声で呟く。

「な、何！？」

キュルケは周囲を警戒するように杖を向けながら見回す。ルイズは聞き覚えがある声なのか警戒は全くしていない。

「今のが捜してたボロ剣よ。本当に壊れてなかったみたいね」

タバサはルイズの言葉を聞いて安心したらしく怯えていたような色が表情から消えた。そういえば幽霊（オバケ）が苦手って設定があったのでしたね。

てゆーか僕の言葉はあまり信用されていなかったらしい。

「で、そのボロ剣とやらは何処にあるのよ？　近くだという事はしかわからないのだけど」

警戒を解いて杖を下げたキュルケがキョロキョロと視線を動かしながらルイズに尋ねる。しかしルイズにもわからないのか「知らないわよ」と怒り気味に呟くだけで目的の物は見付かりそうもない。

「そういえばアリアの近くで聞こえなかったかしら？」

キュルケがそう言うと僕に全員の視線が集中し――フランシアだけはタバサを気持ち悪いぐらい見ている。

僕はクソメイドを気にしないようにして立ち上がり３６０度、地面を見回してみた。更に聞き耳も立てるが僕に怯えているのか再び悲鳴が聞こえる事はない。

「ないですよ？」

「あれ？　おかしいわねぇ」

「ふんっ、所詮ツェルプストーだものね」

何が所詮ツェルプストーなのか知らないがルイズは勝ち誇るように鼻を鳴らした。

「何よ！？」

「文句あるの！？」

またお互いに杖を向け合った。沸点の低い短気な二人だ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

と、同時にまた渋い声色の悲痛な声が聞こえてきた。

魔法への恐怖を刀身(からだ)で覚えているのか魔法が使われそうになると反射的に声が出てしまうようだ。魔法恐怖症の魔法無効化能力を持つ魔剣ってサイトくんに役立つのだろうか。僕は悪くないけど少し心配だ。

「下ですよ、カマ野郎（棒読み）」

タバサが素晴らしく棒読みな暴言でそう言った。カマ野郎とはたぶん僕の事だろう。この場に野郎(おとこ)は僕しかいない。学院ではあまり『アリア＝男』は知られていないが、そこは流石ガリアの恥部であり暗部の『なんとか騎士』だ。関係者は調査済みらしい。

僕はとりあえず暴言への返事を返さずに下を見た。草花の奥に少し鈍く輝く金属が見え隠れしている。

「――ごめんなさいごめんなさ」

僕はそれを手にとって黙らせる為に鞘で押さえ付けた。

「任務完了☆」

「「……あんた（アリア）は本当に何をしたのよ」」

軽いお仕置きです。

第二十六話　デルフ捜索隊（後書き）

息抜きの作品なのに字の文が多い……。いっそ台本形式にしてやろうかしら。

まぁ、とりあえずそれは置いといて、サマンサタバサの次の日替わり口調でも考えるですかね。

第二十七話　魔女出現

「アリアー？　もう朝よ？　朝食の時間も終わっちゃったわよー？」

身体が揺られる感触で意識が覚醒していく。閉じた瞼の上から眩しい光を感じ、それと同時にベッドの包み込むような――実際に包み込んでいるが――柔らかい感触を感じ、僅かに鼻先を掠める甘い香りと声が、自分以外に自分の部屋に誰かいる事を伝えてきて、僕は心地良い快眠を邪魔されて不機嫌になりながら薄く瞼を開いた。

強烈な光の中に桃色が見えた。

メイドではない事にまず安心。

そしてこんな特徴的な色はこの学院には一人しかいないので、自分の部屋に誰がいるのか把握し、何故僕の部屋にいるのだろうか、と寝ぼけ頭で考えながらとりあえず返事をする。

「やだ。今日休む」

そして布団を掴んで頭まで覆い、身体を横にして脚を曲げ、また眠る体制に入った。

「ダメに決まってんでしょうが！」

しかし。

桃色は睡眠を許可してくれないようで、布団を剥ぎ取ろうとぐいぐいと引っ張りながら僕を起こそうと揺さぶる。

朝、幼なじみが起こしにくるシチュエーションって男子の憧れみたいに言われてるけど、実際に経験してみればただただ欝陶しい行為だったんだね。よくキレてぶん殴らないと感心してあげるよギャルゲーの主人公さん。

僕は必死に布団を剥ぎ取られないように力を込めながらそんな事を考えて、

「あいだっ――！？」

桃色をおもいっきり蹴った。

桃色は可愛さのカケラもない悲鳴をあげながら布団から手を離し、僕が視線を向けると蹴られた勢いで転んでいた。

彼女は恨みがましい瞳で僕をねっとりと睨み付ける。

そして起き上がり、衣服の汚れを叩いて払うと僕の目前まで近付いてきて、腰に手を当てながら口を開いた。

「おはよう。さっきの一撃は許してあげるから授業行くわよ」

「おはよー。蹴られて嬉しいでしょ？　ルイズは。だから行かない」

「嬉しい訳ないでしょうが！　しかもだからの意味がわからないわよ！」

「サントリーのスポーツ飲料ですよ」

「さんとりー？　すぽーついんりょう？」

それはＤＡＫＡＲＡ。と自分の心の中でセルフツッコミをして、僕はまた布団の中へ潜る。

「はぁ……訳わかんない事で誤魔化そうとしてないでさっさと行くわよ。もうすぐ二年生に進級するんだから少しぐらいちゃんとしなさいよね」

「もう魔法学院辞める。最初から学ぶ事とかないし、貴族の礼儀作法を貴族（笑）に教えられるのって嫌だし、まず誰かの命令に従うのが死ぬ程やだ」

僕がそう言うと、桃色は疲れたように溜息を吐いた。

「辞めてどうする気？　てゆーかそんな事したらお母様に殺されるわよ？」

「とりあえず欝陶しいガリアとロマリアをぶっ潰して、それからお兄様に養ってもらいながら平民で遊んで暮らすです。あと、公爵婦人はルイズが誤魔化しておいてください」

「私がお母様を誤魔化すなんて出来る訳ないでしょ！　そんな事出来るなら毎日制裁受けたりしなかったわよ！！」

ルイズは大きな声で叫んだ。

脳を揺さ振るようなその大声で僕の半覚醒の頭が覚醒していく。

「てゆーか他国を、しかもロマリアを潰すとか駄目に決まってるで

しょ！　しかも堂々とニート宣言してんじゃないわよ！　それに平民と、なら許してあげてもいいけど平民で、って何よ！？　もっと真面目に生きなさいよねっ！！」

きんきんきんきん、と甲高い声が響く。きゃんきゃんきゃんきゃんと犬が喚いているような感じだ。

言い終えたルイズはぜぇぜぇ、と息を荒く乱していた。

しかしすぐに呼吸を整え、それから僕の布団を物凄い勢いで剥ぎ取る。

僕は布団が剥ぎ取られて一気に寒くなり、両手で身体を抱きながらそのままの勢いで身体を丸めて小さくなる。

「さっさと行くわよ」

「お断りします」

「駄目に決まってるでしょ？」

「お断りします」

「いいから行くの」

「お断りします」

「ほら、早く起きなさい」

「お断りします」

腕を掴まれ何度も引っ張られながらも必死に抵抗する。
しかし、悲しいながら力でルイズに勝てるはずがなく、僕は呆気なくベッドの上から引きずり落とされた。
「うううぅ……」
「唸っても駄目」
「うー！　うー！」
「そのうーうー言うのはやめなさい」
「うー！　うー！　うー！　うー！」
「やめなさいって言ってるでしょ？」
「うー！　うー！　うー！　うー！　うー！　うー！！」
「だからそのうーうー言うのをやめなさいって言ってるでしょっ！？」
スパーンと大きな音がして、同時に僕の頬に鋭い痛みが走る。
まさか本気ビンタをされるとは思っていなかったので、僕は目を丸くして唖然と驚愕していた。
ルイズの方を見ると、何故か彼女も唖然としている。

「あ、あれ？　何で私殴ったのかしら？　ご、ごめんなさいアリア、大丈夫？」

それから心配そうに声を掛けてきた。

どうやら先程の一連の動作は意識的な行動ではなく無意識的な行動らしい。

「ま、魔女です……」

「……魔女？」

たぶん魔女だ。魔女の仕業だ。
きっと魔女だ。魔女の仕業だ。

魔女がハルケギニアに現れて、そしてルイズの身体を乗っ取り、この世界で最も素晴らしい存在を嫉んで危害を加えてきたのだ。たぶんそうなのだ。

僕は頬に手を当てながら怯えるような演技をしてルイズを見つめ、それから後退りながら距離を取る。

「魔女じゃー！　魔女の仕業じゃー！　魔女が現れおったぞー！」

「ち、ちょっとアリア！？　いったいどうしたのよ！？」

「天狗じゃー！　天狗の仕業じゃー！」

「てんぐ？！　てゆーか魔女は何処行ったのよ！？」

「もう駄目じゃー！　おしまいじゃー！　激走戦隊！　カァーッレンジャーッ！！」

「えっ、最後のは本当に何！？」

これがジェネレーションギャップか。

僕はそんな事を考えながら床に落ちていた布団を掴み、ベッドに戻ってもう一度眠ろうと――

「よくわかんないけど、とりあえず授業には行くわよ。さっさと着替えなさい」

――ダメでした。

ルイズは僕から布団を取り返し、ベッドの前に腰に手を当てながら仁王立ちして通せん坊し、顎で衣装箪笥を指して僕を強く睨み付ける。

「頬っぺたが痛くて動けないです。だから今日は休むですです」

「は？」

「頬っぺたが――」

「は？」

「頬っ――」

「は？」

最近のルイズの怖さは異常。

普通の魔法が一向に成功せず、しかも使い魔を召喚しなければ二年生に進級できない時期が近付いてきているからストレスが溜まっているのかもしれない。

こんな事だと「将来物凄い鬼嫁になりそう。ハルケギニア最強の」

「な、んですってぇ……？」

いつの間にかルイズが杖を取り出していた。しかもそれを何故か僕に向けて漫画みたいな怒りマークを額に浮かばせながら不気味に笑っている。

「誰が将来ハルケギニア最強の鬼嫁になる、ですってぇ……？」

どうやらうっかり口から漏れてしまっていて、ルイズはちゃっかりそれを聞いてしまっていたらしい。

今にも爆発させられそうだ。

「どうどうどう。一旦落ち着くべきですよルイズ・フランソワーズ。こんな場所で魔法を使うのは良くないし、それに僕に魔法を使うなんて更に良くねぇです。一度クールになって考え直すべきです。あれですよ？　鬼嫁って言うのは褒め言葉で、鬼可愛い嫁って事なんですよ？　ほら、ルイズってハルケギニアで一番人気のある美女ですし？　そんなルイズと結婚出来る人は幸せなのでしょうね、ええ、はい、きっと」

なんとか誤魔化そうと饒舌にとりあえず褒めちぎりの言葉責めを実行する。

流石にこれぐらいで機嫌が直る程単純ではないだろうが、ルイズは猪突猛進で頭脳明晰なのに脳筋タイプの単細胞な簡単単純ガールだ。

もしかしたら誤魔化せるかも――

「なっ、ななな何よ。そう言う事ならささささ、さっさと言いなさいよ！　てゆーかあああ、あんまりはは、恥ずかしい事ばっかり言わないでよね……ばか」

――誤魔化せたぁーーーっ！？

「わ、私は先に教室に行ってるから着替えたらさっさと来なさいよ！？　絶対だからね！　絶対の絶対だからね！？」

真っ赤な顔の単純（バカ）ルイズはそう言って、逃げるように僕の部屋から飛び出していった。

――あの娘の将来がいろいろ心配。

僕はアホリエッタと同レベルかもしれないアホの娘に少し同情した。

「とりあえず寝るですかね」

それからルイズが置いていった布団を掴み、ベッドの中に寝転んで布団を被り、そのまま眼を閉じて眠気に身を委ねる。

そして、僕は眠った。

第二十七話　魔女出現（後書き）

あけましておめでとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4963x/

うさぎさんの楽しい毎日

2012年1月15日02時49分発行